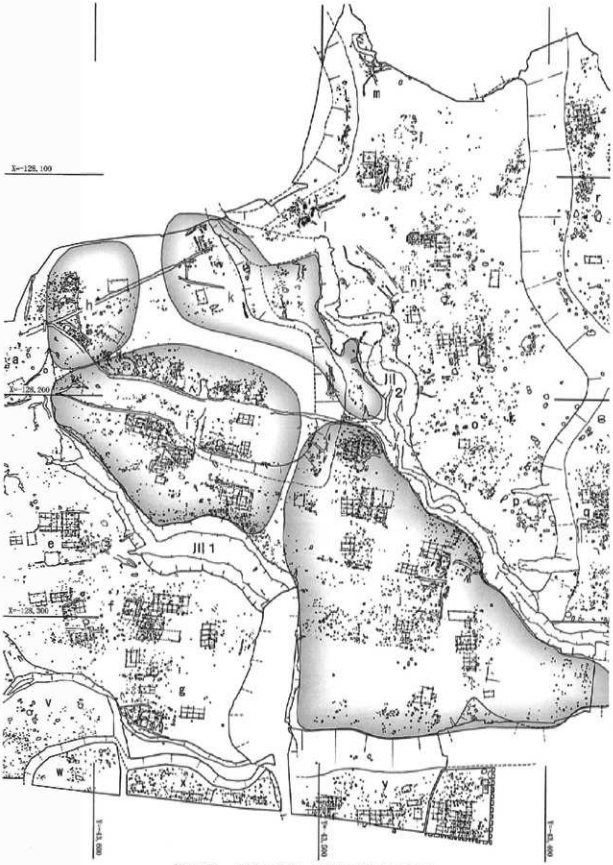
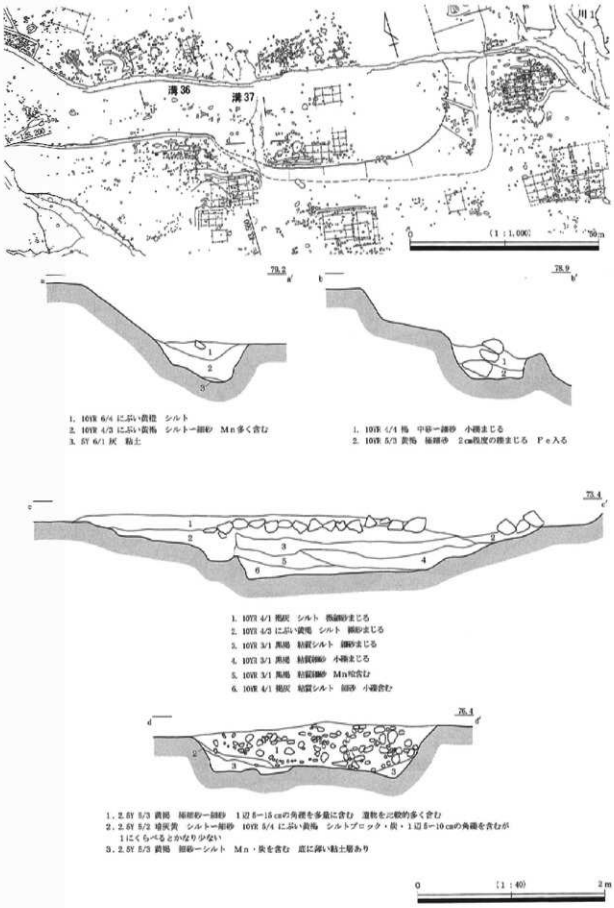
第2節　丘陵上中部



第138図　丘陵上中部　全体図（1：1,500）



第139図　溝36・37　平面・断面図

丘陵上中部はh域からk域の範囲で、北側は調査地外で、南側が段丘崖に続き、勝尾寺川段丘面のy域に至る。丘陵上西部とは川1と、丘陵上東部とは川2で隔てられる。

丘陵上中部の北部で東西方向の溝36と、その溝の中央部付近で東西方向の溝37を検出している。

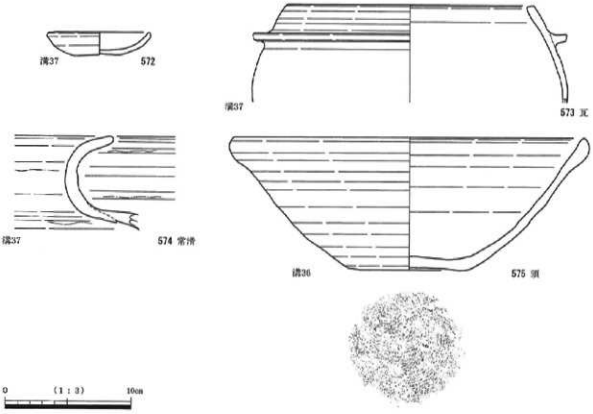
溝36（第139・140・141・147・152図　図版61～63）

丘陵上中部地区の北部を東西に横断する、全長約170mの長大な溝である。幅約1m～2m、深さ約1mである。底面のレベルは東に向かって下がり、h域、i域、j域を通って川2に注いでいる。h域部分は大きく削平されているが、i域以東と同じ溝である可能性が高いと思われる。

北から南へと下がる地形に位置し、その等高線に並行するように伸びる。西半部が北西から南西方向で、東半部が東西方向である。溝の断面形は、全体的に南肩付近が削平を受けているため詳細不明であるが、北肩より南肩の方が低くなっていたと思われ、北肩は2段落ちになっている部分もある。

埋土は、川に注ぐ辺りでは水成堆積のシルトであるが、それ以外の部分では包含層に似ている。溝中から人頭大までの礫が数点出土した場所が数箇所ある。特に川に合流する手前の部分に多い。ただし、第139図の断面c－c'は川に合流する部分であるが、この図にある石列は、溝が完全に埋まって以後のものである。

西端部は削平を受けて途切れている。検出し得た限りの西端部分は、川1の上流部分にあたり、東部は南北の地形の変化点に立地している。周辺は、南北方向の傾斜が特に大きい部分である。調査中、激しい雨が降ると、大量の水が北から南へと流れ落ちる状況がみられた。溝は、南側に水を垂れ流しにしないための排水溝であったとも想定できる。用水を確保するために、a域、h域の北側の山地形から流れ落ちてくる水を集めていたことも想定されるが、常時相当量の水量が確保できたかどうかが、疑問点



第140図　溝36・37　出土遺物

として残る。溝の基盤となっている層は礫が多く混じっており、少量の水ではすぐにしみ込んでしまう。

溝37とは直交する位置関係にあるが、時期関係は不明である。h域の溝39・40を切っており、これよりは新しいと考えられる。

遺物は、東播系須恵器鉢のほか、陶器鉢、小型の瓦質土器脚付羽釜、土師器、和泉型瓦器椀などの小片が出土した。

溝37（第139・140・152図　図版63・197）

丘陵上中部地区のi域中央を南北に伸びる検出長約34mの溝である。幅約2m～3m、深さ約0.2m～0.5mである。底面のレベルは地形通りに南へと下がっている。南に延長した位置（X＝－128,250ライン）の断面（第464図）で、溝を確認しており、検出した以上にさらに南へと伸びていたと思われる。南端がどこまで伸びていたのかは不明であるが、川1に注いでいた可能性が高い。北側は削平され失われたと思われる。

埋土の大部分は礫を非常に多く含む、埋め戻し土と考えられる層である。ただ、底面の西端と東端がわずかに窪んでおり、この部分には非常に薄いがシルト層が存在している。水が流れていた可能性がある。

第464図の断面で、溝直上の位置に、作土層に伴う畦畔が存在しているのを確認している。畦畔は、平面では検出していないが、地形上、南北方向であると考えられ、全体的に溝と重なる位置関係である可能性が高い。溝は明らかに水田作土層に伴うものではないが、水田化してからも、その地割りが継承されていたと考えられる。作土層の時期を明らかにすることはできなかったが、丘陵上地区の冒頭で述べたように、近世以前のものである可能性もある。

溝からは、周辺遺構群と同時期の中世前期のものが非常に多く出土しているが、なかには中世後期のものと思われる青磁碗なども含まれている。これらは少量であるため集落の時期よりこの溝が新しいものであると断定することはできないが、溝が新しい時期のものであるとすれば、集落後、水田化以前のものということになる。

遺物は、多くの破片が出土しており、瓦質脚付羽釜、常滑甕の破片が特に目立つ。多くは、11～13世紀のものである。

第1項　h域（付図1・5）

丘陵上中部地区の北西部分である。北、北西の調査地外は標高がより高くなっており、棚田1筆分より北が山地である。東側がk域で、西南は川1を挟んでa域、南側がi域である。

主な遺構に、建物3棟・井戸1基があり、他に、溝・土坑・ピットなどがある。

建物56（第141・142・145・150図　図版64・197）

北西部に位置し、ほぼ正方位を向き、東西3間×南北2間、約8.1m×5.1m、約41.3㎡である。柱穴3は溝38埋土を除去した段階で検出しており、溝より古い可能性がある。

遺物は小片のみで、土師器鍋、瓦器椀、瓦質脚付羽釜がある。詳細な時期は不明といわざるを得ないが、瓦器椀は比較的新しい様相のものである。

この建物は、川1の上流部分に位置する。この部分では地形としてはとらえられるものの、川としての明確な埋土はなく、中世包含層に覆われている状況である。少なくとも建物の時期には埋まっていたと思われる。

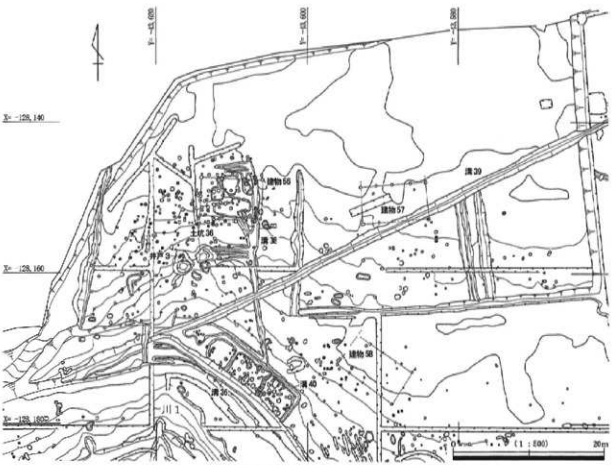
建物57（第141・143図　図版64・65）

北部に位置し、主軸方向はN－5°－Wを示す。東西4間×南北1間、約8.8m×4.9m、約43.1㎡である。南辺の柱穴を溝39に切られる。

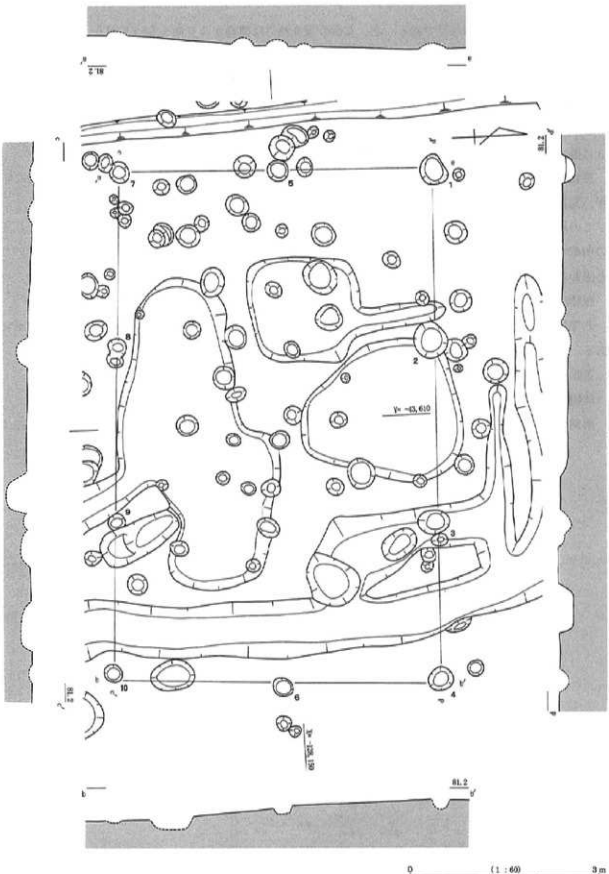
遺物は出土していない。

建物58（第141・144図　図版64）

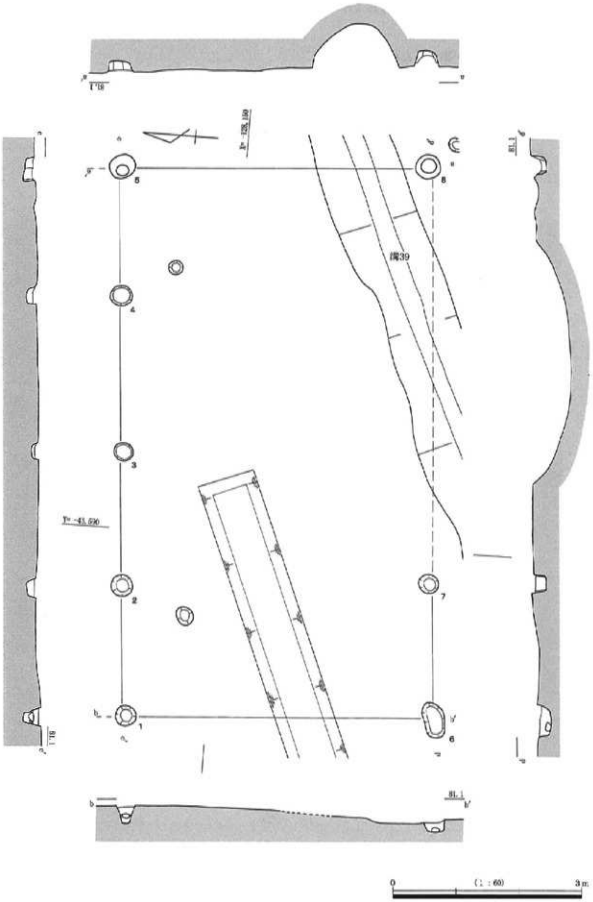
南側に位置し、主軸方向はN－32°－Eを示し、等高線に並行である。東西4間×南北2間、約9.0



第141図　h域　平面図



第142図　建物56　平面・断面図



第143図　建物57　平面・断面図

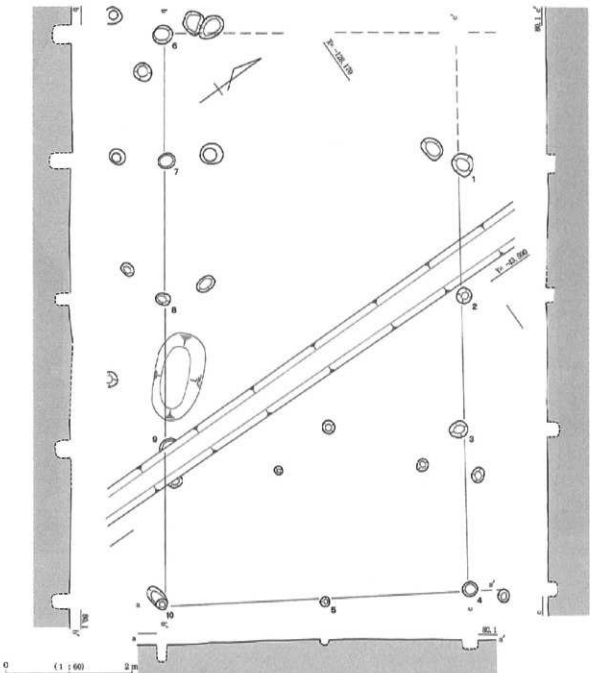
m×4.8m、約43.2㎡である。北西部および北東側が削平を受けており、北西部隅にも柱穴があった可能性がある。

遺物は土師器の細片が出土したのみである。

溝38（第141・145・147・150図　図版65）

西部に位置し、南北方向の溝の西側に、東西方向などの複数の溝が連結している。すべて埋土が同様であり、一連のものと考えられる。南北長約27.3m、幅約0.6m～1.0mで、東西長約5.0m、幅約0.8mである。底面のレベルは、南へ低くなっている。建物56を切っている。

遺物は瓦質鍋（589）が出土している。



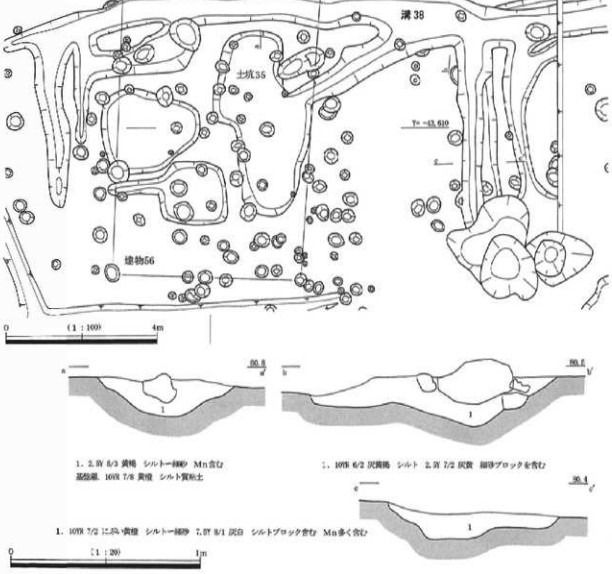
第144図　建物58　平面・断面図

土坑35（不定形で、東西長約4.9m、南北長約2.6m、深さ約0.1m）とは一連のものであると思われる。東西方向部分の底面のレベルは、西に向かって低くなっている。南北方向部分の北半には礫が並んでいた。底面からは浮いている状態である。記録をとる前にはずしてしまったが、本来は図示した以上の数が存在していた。

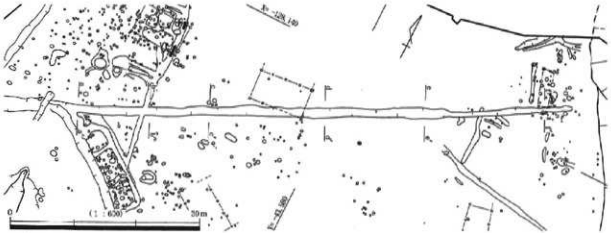
遺物は、小片が比較的多く出土しており、瓦器椀、瓦質羽釜・受け口状口縁の鍋、土師器鍋、東播系須恵器鉢、須恵器甕などがある。瓦器椀、須恵器鉢は13～14世紀代のものと思われる。

溝39（第141・143・146・150・214図　図版64・65・197）

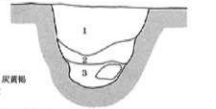
h域とk域にかかる、長さ約83mの長大な溝である。ただし、溝36に切られており、西端は確認できない。上端の幅は最も広い部分で約1.4m、底面の幅が約0.2mで、断面形は東部分ではV字状、西部分



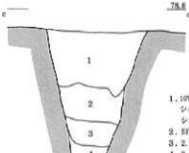
第145図　溝38　平面・断面図



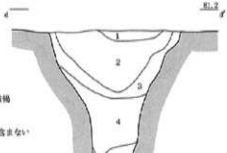
1. 10YR 5/2 灰黄褐　シルト～中砂
Mn・2.5Y 7/2 灰黄　シルトブロック含む
基盤層. 10YR 7/6 明黄褐　締まり粘土



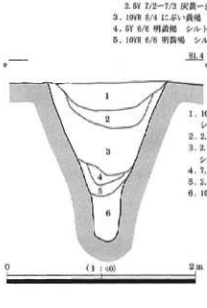
1. 10YR 4/2　灰黄褐　シルト質粘土　10YR 4/2 灰黄褐
シルトブロック・2.5Y 7/2～7/3 灰黄～浅黄
シルトブロックを含む
2. 2.5Y 7/3 浅黄　シルト質粘土　シルトブロックを含まない
3. 2.5Y 6/6 明黄褐　シルト質粘土



1. 10YR 4/2　灰黄褐　シルト質粘土　10YR 4/2 灰黄褐
シルトブロック・2.5Y 7/2～7/3 灰黄～浅黄
シルトブロックを含む
2. 5Y 7/3 浅黄　シルト質粘土　シルトブロックを含まない
3. 2.5Y 6/6 明黄褐・シルト質粘土
4. 2.5Y 7/3 浅黄　シルト質粘土



1. 10YR 6/8 明黄褐　シルト～中砂　炭・10YR 6/2 灰黄褐　シルトブロック・Mnを含む
2. 10YR 4/2 灰黄褐　シルト質粘土　10YR 4/2 灰黄褐　シルトブロック・
2.5Y 7/2～7/3 灰黄～浅黄　シルトブロックを含む
3. 10YR 6/4 にぶい黄褐　シルト質粘土
4. 5Y 6/6 明黄褐　シルト質粘土
5. 10YR 6/8 明黄褐　シルト質粘土　しまりが悪い



1. 10YR 6/8 明黄褐　シルト～中砂　炭・10YR 5/2 灰黄褐
シルトブロック・Mnを含む
2. 2.5Y 6/2 灰黄　シルト質粘土　Mnを含む
3. 2.5Y 6/4 にぶい黄　シルト質粘土　10YR 4/2 灰黄褐
シルトブロック・2.5Y 7/2～7/3 灰黄～浅黄　シルトブロックを含む
4. 7.5YR 5/4 にぶい褐　細砂
5. 2.5Y 7/1 灰白　粘土
6. 10YR 6/6 シルト質粘土　しまりが悪い

1. 10YR 5/4 にぶい黄褐　中砂まじりシルト　1辺1～3cm前後の風化礫を含む
2. 10YR 5/6 黄褐　礫まじり植質シルト　炭・Mn・10YR 6/1 褐灰　シルトブロックを含む
3. 2.5Y 5/2 黄褐　礫まじりシルト質粘土　Mn・炭・7.5Y 6/1 灰　シルトブロックを含む
4. 2.5Y 4/6 オリーブ黒　礫まじり粘土　炭・Mnを含む　1～3にくらべて礫は少ない
5. 10YR 5/2 にぶい黄褐　粘土　10YR 7/1 灰白　シルトブロックを含む
6. 10YR 4/4 褐　シルト　Mn・炭・10YR 6/2 灰黄褐　シルトブロックを含む
7. 10YR 6/3 にぶい黄褐　シルト　Mn・10YR 6/6 明黄褐　粘土ブロックを含む

第146図　溝39　平面・断面図

では逆台形である。

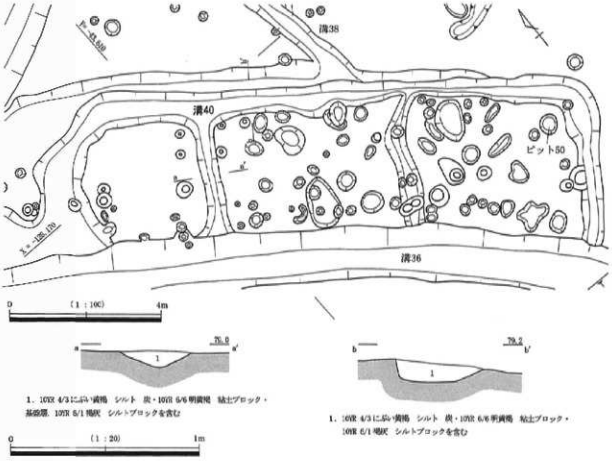
等高線に対して並行しておらず、北西から南東へと伸びる尾根上を、真直ぐに横断している。この尾根は西側を川1、東側を川2が開析することによって形成されたものであるが、この溝は西端が不明ではあるものの、あたかもこの2つの川をつなぐかのように掘削されている。底面のレベルは東端で標高79.6m、中央部分で標高79.3m、西端で標高79.0mと、緩やかではあるが東から西へと低くなっている。深さは、地形が低い東端と西端ではそれぞれ約0.4m、約0.3mであるが、地形が高い中央部分では約1.7mとかなり深くなっている。地形に規制されたものではなく、明らかに意識的に設定されたものと考えられる。

埋土は、下層から上層まで基盤層に酷似しており、水が流れていたとは考え難い。基盤層で埋められたことが想定されるが、通常これだけの規模の溝を埋める土量を確保することは困難であり、この溝を掘削した際に生じた土を埋め土とした可能性が高いと思われる。しかし、そうであれば掘削して時をおかずに埋められたことになる。

西端は溝36に切られており不明であるが、この部分はほぼ同じ位置に溝36が掘削され、重なっている可能性がある。溝36は溝39とは逆に、東へと底面のレベルが低くなっていく溝である。建物57を切っている。

遺物は、埋土の上位と中位から瓦器椀が出土した他は、細片が少量みられるのみである。瓦器椀から、溝は少なくとも13世紀代には埋まっていたといえる。

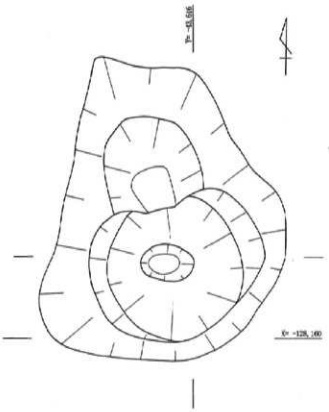
時期の詳細は不明であるが、周辺の遺構群とは大きな隔たりがないと思われる。

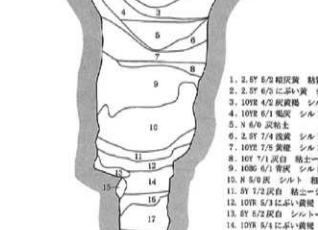


1．10YR 4/3に鈍い黄橙　シルト　炭・10YR 6/6明黄褐　粘土ブロック・基盤層　10YR 6/1褐灰　シルトブロックを含む

1．10YR 4/3に鈍い黄橙　シルト　炭・10YR 6/6明黄褐　粘土ブロック・10YR 6/1褐灰　シルトブロックを含む

第147図　溝40　平面・断面図





1. 2.5Y 5/2 暗灰黄　粘質シルト　Mn・炭を含む
2. 2.5Y 6/3 にぶい黄　シルト
3. 10YR 4/2 灰黄褐　シルト～中砂　Mnを含む
4. 10YR 5/1 褐灰　シルト質粘土
5. N 6/0 灰粘土
6. 2.5Y 7/4 浅黄　シルトと2.5Y 7/1 灰白　シルト質粘土の互層
7. 10YR 7/6 黄橙　シルト～粗砂　N 8/0 灰白　粘土ブロックを含む
8. 10Y 7/1 灰白　粘土～細砂　一部 10 cm前後の礫を多量に含む
9. 10BG 6/1 青灰　シルト　小礫が密に多く含む
10. N 5/0 灰　シルト　粗砂・小礫含む
11. 5Y 7/2 灰白　粘土～シルト　粗砂・小礫含む
12. 10YR 5/3 にぶい黄褐　中砂～小礫　粘土小ブロック少し含む
13. 5Y 5/2 灰白　シルト～細細砂　小礫少し含む
14. 10YR 5/4 にぶい黄褐　シルト～粘土のブロックと細砂～中砂のブロック含じる
15. 10YR 6/3 にぶい黄橙　細砂～中砂
16. 10YR 6/3 にぶい黄橙　中砂～粗砂　シルトの小ブロック含む
17. 10YR 5/2 灰黄褐　細細砂～細砂　粗砂・小礫含む　シルトの小ブロック含む
18. N 5/0 灰　細細砂～シルト　粗砂含む
19. 2.5Y 6/1 黄灰　シルト～細砂　小礫含む
20. 2.5Y 6/3 にぶい黄　粘土ブロックと2.5Y 7/1 灰白　粗砂ブロックがまじる

0　(1：40)　2m

第148図　井戸３　平面・断面図

溝40（第141・147図）

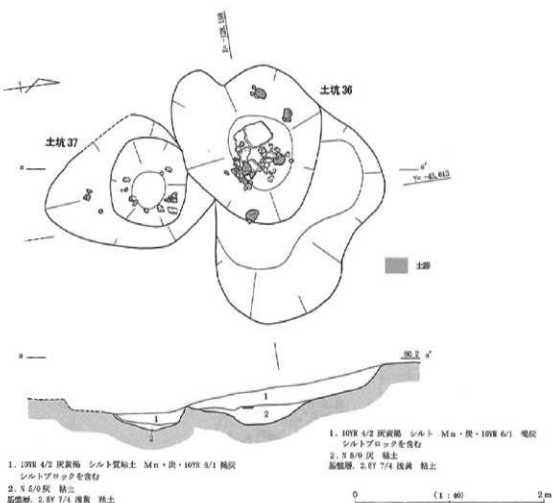
南部に位置し、平面形は懸状にみえているが、南側が後世の削平により失われているため本来の全形は不明である。溝で区画された内部では、ピットなどを比較的多く検出しているが、それらとの関連性は不明である。ただ、この部分の包含層中には細かく砕けた鍛冶滓が散見され、遺構埋土にも他の部分に比べて多くの焼土、炭片がみられる。鍛冶作業がおこなわれていた可能性も考えられるが、焼土面などは確認していない。溝36に切られる。

遺物は、細片の瓦器椀などが少量出土したのみである。12～13世紀のものがみられる。

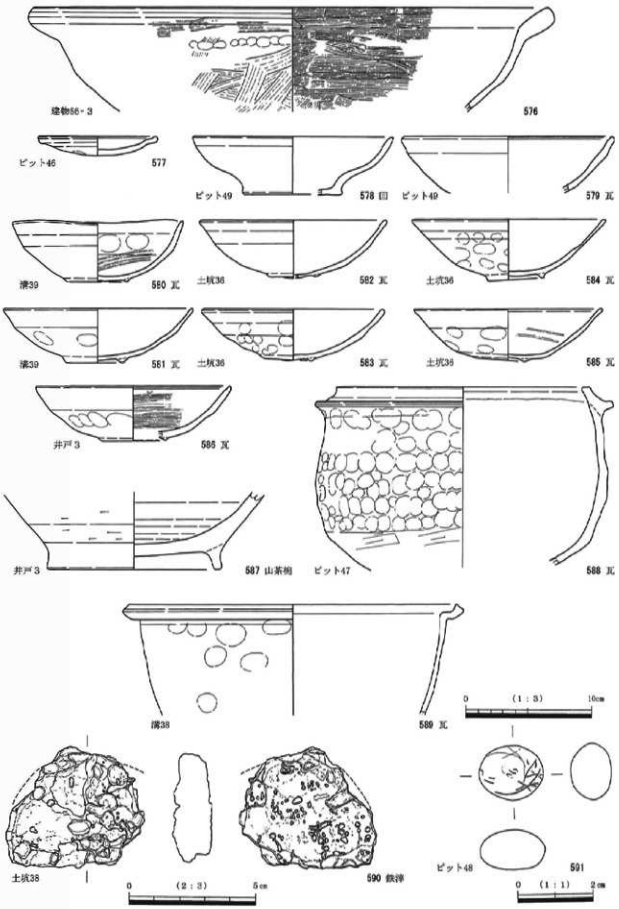
井戸3（第141・148・150図　図版64・66・197）

西端部に位置し、素掘りで、径約2.4m、北側の付属部分も含めた南北長約3.2m、深さ約3.6mである。北側には水をくむ際の足場であろうか、検出面から約1.1m掘り下げ、礫を敷き並べた部分を作り付けている。記録をとる前に一部をはずしてしまったため詳細は不明であるが、角礫でステップを築いており、2段以上はあったと思われる。礫は掘り方の底面には接しておらず、少し埋め戻してから並べられている。井戸の掘り方は、深さ2.6m以下で径が約0.5mと非常に小さくなる。

埋土は、9・10・18層がグライ化しているものの、11～16層は基盤層に、17層は中世包含層に酷似している。中層は水を含んでいたと思われるため、下層のみが掘削してすぐに埋まってしまったか、また



第149図　土坑36・37　平面・断面図



第150図　建物56　溝38・39　井戸３　土坑36　その他の遺構　出土遺物（２/３＝590　１/１＝591）

は埋め戻された可能性が考えられる。この部分の基盤層は、最上層が均質なシルトであるが、以下は非常に硬くしまった雜混じりシルトである。これが埋土の10層以下では砂層が互層に入る大阪層群となる。

遺物は、上層から瓦質羽釜・受け口状口縁鍋、東播磨系須恵器鉢などの小片が、中層から和泉型・楠葉型瓦器椀などの小片が出土している。瓦器椀（586）は上～中層、山茶椀の鉢（587）は上層から出土したものである。

ピット50（第147図）

溝40で囲まれた内部の北東隅に位置し、径約0.5m、深さ約0.2mである。根石の可能性がある石が底面から出土した。土師器皿小片が出土している。

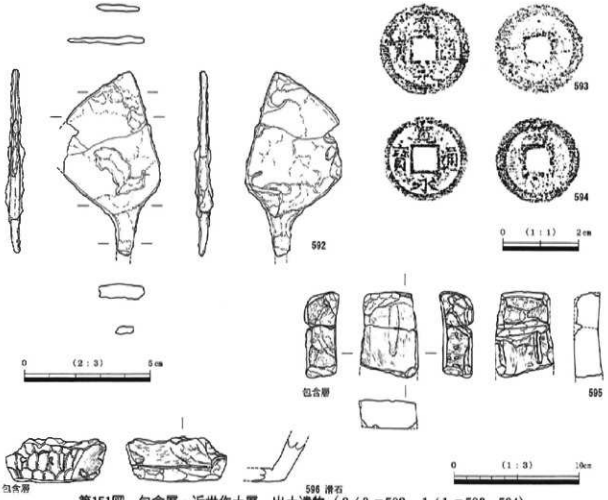
土坑36（第141・149・150図　図版66・197）

建物56の南側に位置し、不定形で東側に張り出し部をもつ、2段掘りの土坑である。東西約2.8m、南北約2.0m、深さ約0.4mで、土坑37に隣接するが切り合い関係は不明である。溝38の東西方向部分と一連であった可能性もあるが、確認していないため不明である。

遺物は、ほぼ完形の和泉型瓦器椀が数個体出土した。瓦器椀のほか、須恵器小片、土師器羽釜片、磁器の細片が出土している。12世紀後葉～13世紀前葉のものと思われる。

土坑37（第149図　図版66）

不定形で、南北検出長約1.8m、東西約1.4m、深さ約0.4mの2段掘りである。土坑36の南側に隣接している。



第151図　包含層・近世作土層　出土遺物（2／3＝592　1／1＝593・594）

出土遺物には瓦器椀、黒色土器Ａ類、土師器皿などの小片がみられるのみである。

土坑36と同様に溝38の東西方向部分と一連であった可能性もあるが未確認のため不明である。

包含層は、南西部分にのみ遺存していた。北部、東部では遺構をあまり検出していない。棚田造成時に大きく削平されており、本来の遺構分布密度は不明ではあるが、失われた遺構が少なくないと思われる。

包含層出土遺物は、小片が少量あるのみで、時期を詳細に分析し得る状況ではない。しかも、遺構出土遺物と同様な時期である、12～13世紀代のもの以外に、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器Ｂ類椀、楠葉型瓦器椀など11世紀代のものと思われる遺物も出土している。

小結

川１は、ｈ域とｉ域の境辺りより北では、明確な埋土を伴った状態ではなくなる。地形として捉えられるものの、非常に浅くなっており、包含層がその地形を埋めている。ｈ域北部で川地形が確認できないのは、棚田造成時に削平を受けたためではあるが、この辺りは本来より非常に浅かったと考えられる。川は多量の水が常時流れていたとは考え難い。丘陵上に集落が展開していた期間中に、水の通り道ではなくなっていたことが想定される。また、この部分には遺構が集中しているが、ここは周辺より地形的に低いために削平を免れており、この状態が本来の遺構分布と一致しているとは限らない。

11世紀代の遺物が出土したピットが川１最上流部分の西半部に数基、溝40周辺に10基程度が分布している。傾向としては前者の方がやや古い様相であり、両者に時期差が存在することも想定される。ただし、土器小片が少量出土したのみであるため、積極的に土地利用がおこなわれていたかどうかも含めて詳細は不明である。丘陵上西部地区のａ域北東部にも11世紀代のものである可能性がある遺構がみられるが、これらとの関連も想定される。

ｈ域では、出土遺物が少量であるため、時期を決定できない遺構が多い。建物３棟も時期が確定できるものはなく、建物56から、比較的新しい時期と思われる瓦器椀片が出土しているのみである。遺物がまとまって出土したのは土坑36のみで、12世紀後葉～13世紀前葉のものである。井戸３、溝39出土の瓦器椀も、同様なものであり、この時期がｈ域の遺構群の中心時期の可能性はある。

11世紀代の遺物も一定程度出土していることから、建物も含めて、時期の確定できない遺構の中に、この時期のものが存在している可能性もある。

ｈ域の西側、北側は調査地外で、山地に続いていく部分である。南西側は、ａ域である。東側は、川２に面するｋ域である。遺構の時期がはっきりとはしていないが、ｈ域の東部分では大きく削平を受けており、この部分に本来遺構が存在したとすれば、ｋ域の遺構と一連のものであった可能性もある。南東側はｉ域で、11～13世紀の遺構が展開している。ｈ域と隣接する北端部には13世紀代と思われる遺構がみられるが、この部分はｈ域と同じ地形であり、一連のものであった可能性もある。

第２項　ｉ域（付図１・２・５・６）

丘陵上中部の中央西部に位置し、北西から南東および南にかけては川１に面する。ｉ域では、川に並行に等高線が走り、南から北へと標高が高くなる。丘陵上西部地区に比べて等高線が密である。

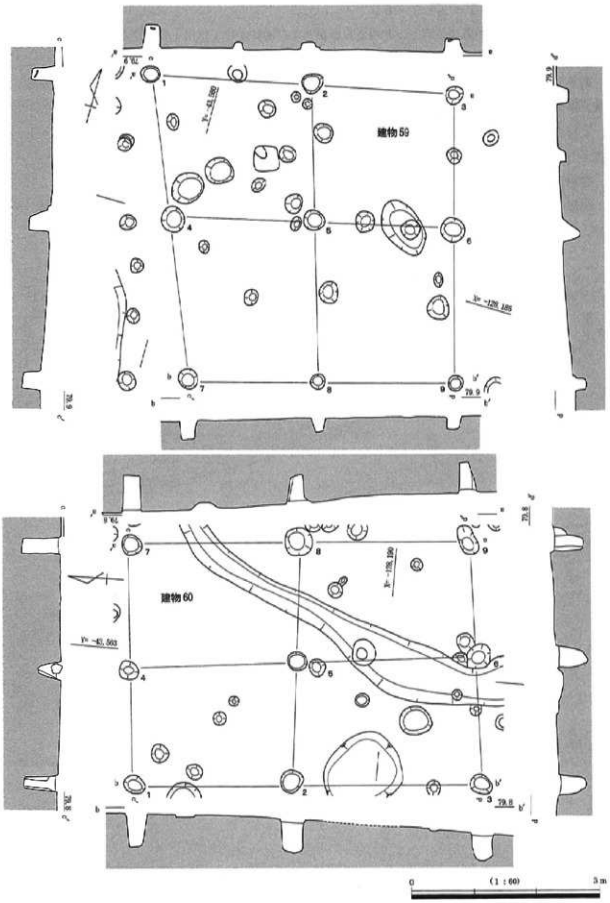
西半部の北側がｈ域で、東半部の北側がｋ域にあたり、東側がｊ域、川１を挟んで、南西側がｂ・ｅ域、南側がｆ域である。

主な遺構に、建物15棟・柱列２列・井戸１基・墓２基・焼土坑２基があり、他に、溝・ピット・土坑・土器集積などがある。

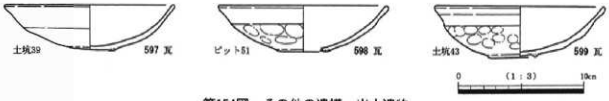
建物59（第152・153図　図版67・70）

西部の北寄りに位置し、南北２間×東西２間、約4.7m×4.5m、約21.2㎡である。主軸方向は、N－18°－Wである。北西部分がやや歪な平面形である。

第152図　ｉ域　平面図



第153図　建物59・60　平面・断面図



第154図　その他の遺構　出土遺物

遺物は小片のみで、13世紀代の瓦器椀、土師器などが出土している。

建物60（第152・153図　図版67・70）

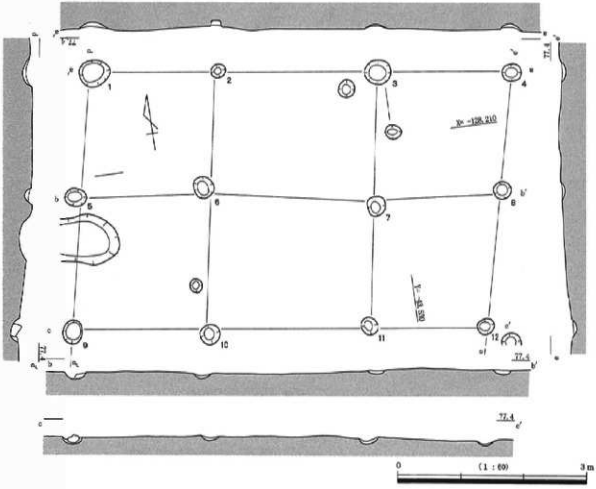
建物59の東側に位置し、等高線に沿っている。南北2間×東西2間、約5.4m×3.9m、約21.1㎡である。主軸方向はN－6°－Wである。

遺物は細片のみで、瓦器椀、土師器が出土している。古いものも含まれるが、13世紀代のものがみられる。

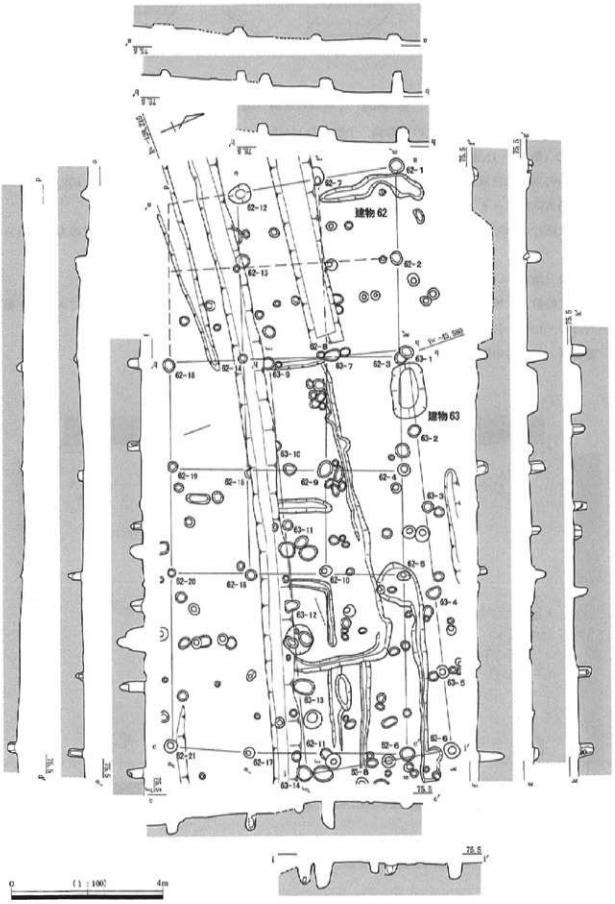
建物61（第152・155図　図版69・70）

東部に位置し、等高線に沿っている。東西3間×南北2間、約6.6m×4.1m、約27.1㎡である。主軸方向はN－10°－Eを向く。削平が著しく、柱穴は底部がわずかに残るのみである。

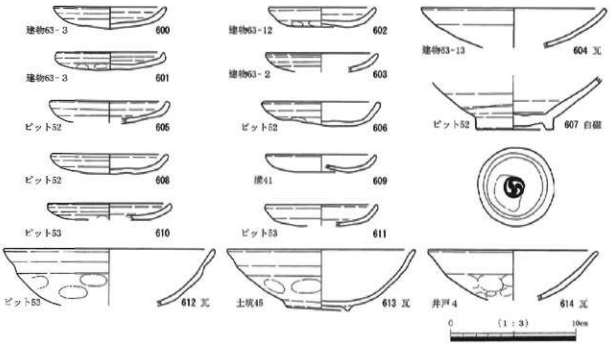
遺物は、須恵器の甕片が出土している。



第155図　建物61　平面・断面図



第156図　建物62・63　平面・断面図



第157図　建物63　井戸4　ピット52　その他の遺構　出土遺物

建物62（第152・156図　図版68・71・72）

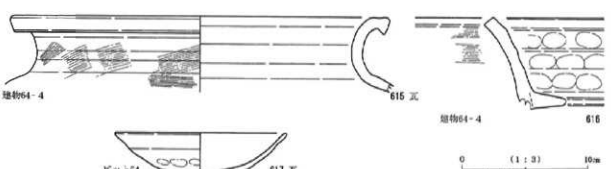
西部中央に位置し、東西5間×南北3間、約15.1m×6.1m、約92.1㎡である。主軸方向はN－23°－Eである。東端の1間は約4.5m～5.0mで、それ以外の部分が約2.3m～2.8mであるのに対して、倍の広さがあるが、中央に柱穴が存在しないことは調査時に確認している。南部分は棚田の段下にあたり、著しく削平されているため柱穴の遺存状況が悪く、南西部分で柱穴が失われた可能性が高い。

背後には、約0.7mの高低差のある段差が存在しているが、部分的にではあるが中世の包含層が遺存しており、棚田造成前の地形である。広い平坦面の少ないこの地区に建物を建てることを考えると、この高低差は、人為的に削り出されたものであることも想定される。柱穴が建物63のものと切り合っているが、前後関係は確認できなかった。

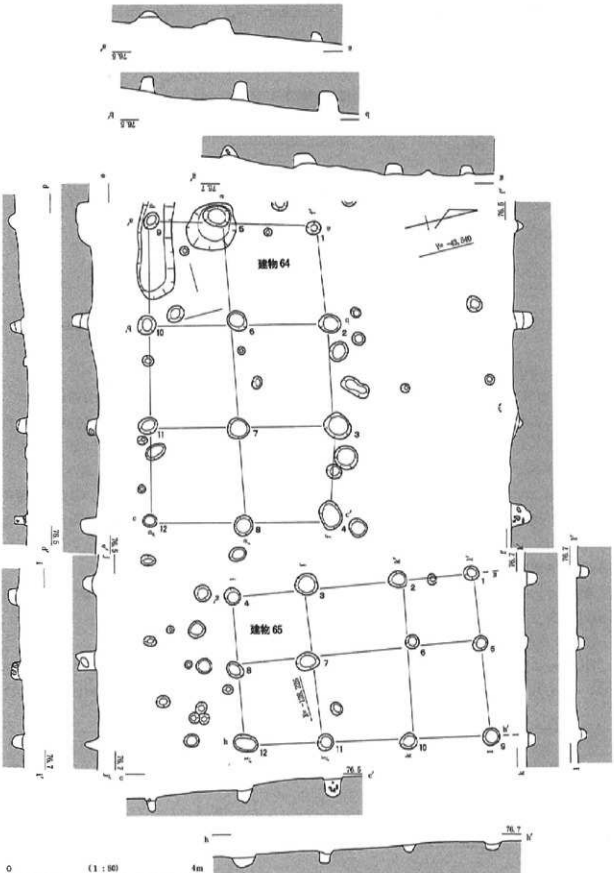
遺物は小片のみで、土師器小皿、瓦器椀などが出土している。12世紀後葉～13世紀中葉の範疇に入るものばかりである。

建物63（第152・156・157図　図版68・71・198）

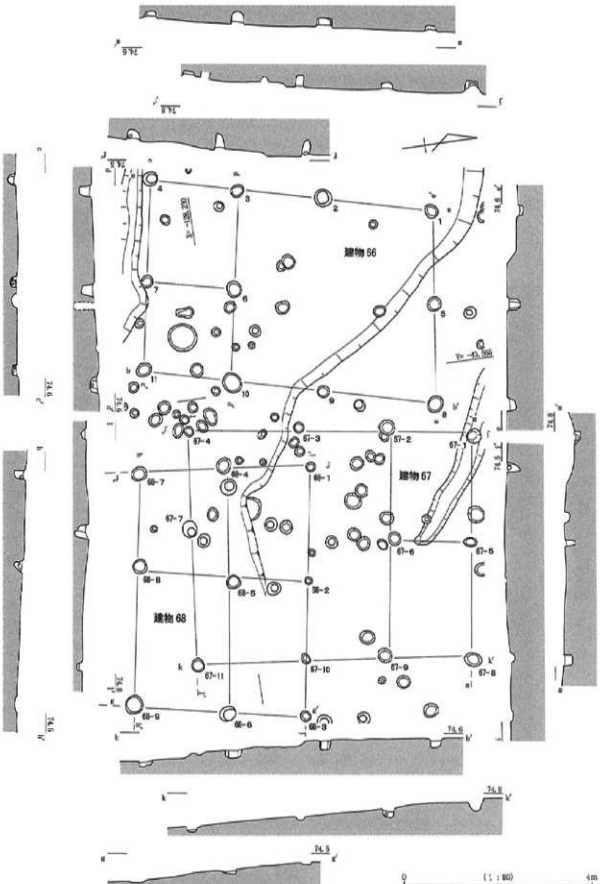
西部中央に位置する。東西5間×南北2間、約10.8m×3.7m、約40.0㎡である。主軸方向は、N－17°－Eである。柱穴は比較的深いものである。前述したように、背後には約0.7mの高低差をもつ段



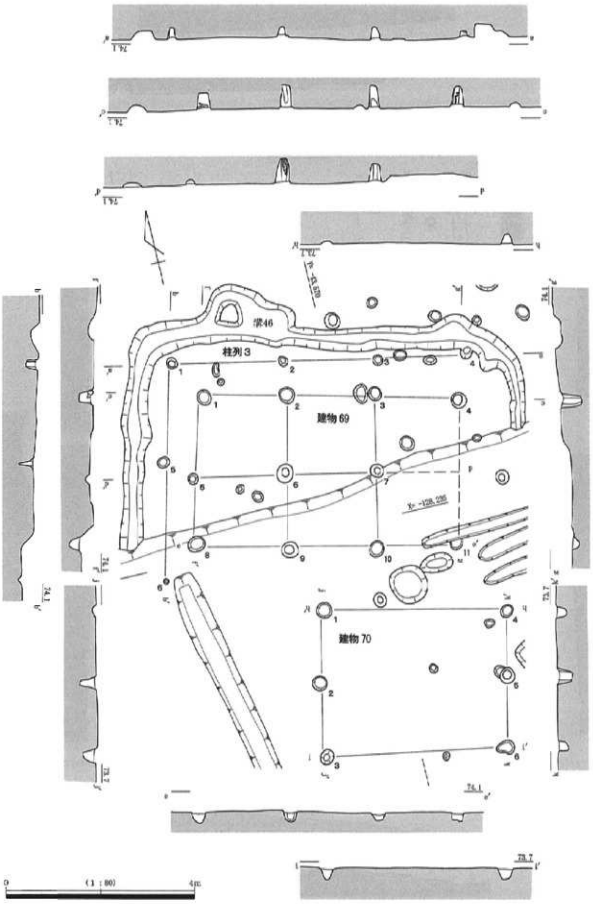
第158図　建物64　その他の遺構　出土遺物



第159図　建物64・65　平面・断面図



第160図　建物66～68　平面・断面図



第161図　建物69・70　柱列３　溝46　平面・断面図

差がある。建物62と重複しているが、柱穴の切り合い関係は不明である。

遺物は柱穴3から土師器皿数枚の破片、瓦器椀片が出土したほか、土師器皿、瓦器椀、瓦質鍔付羽釜、須恵器の小片がみられる。12世紀後葉～13世紀代のものである。

建物64（第152・158・159図　図版69・72・199）

東部中央に位置し、東西3間×南北2間、約6.3m×3.8m、約23.9㎡である。主軸方向が13°東に振れ、ほぼ等高線に沿っている。

遺物は瓦器椀、土師器羽釜、瓦質甕の小片が出土した。瓦器椀片は12世紀中葉～14世紀代の範疇に入るものである。

建物65（第152・159図　図版69・72）

建物64の東側および建物61の南側に位置し、南北3間×東西2間、約5.1m×3.3m、約16.8㎡である。平面形はやや歪である。主軸方向は建物61と揃っている。

遺物は細片のみで、瓦器椀、土師器が出土している。詳細な時期は不明である。

建物66（第152・160図　図版68・72）

建物62・63の南東に位置し、南北3間×東西2間、約6.1m×4.1m、約25.0㎡である。主軸方向は、N－12°－Eである。中央北側には柱穴が存在しないことを調査時に確認している。平面形はやや歪である。

遺物は、黒色土器の小片が1点出土しているのみである。

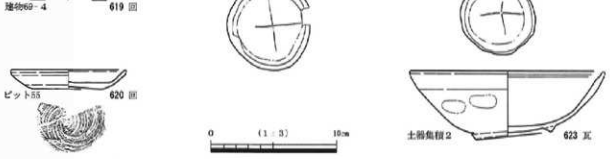
建物68と南辺が直線的に並ぶことから、その関連が想定される。建物67～69と近接する。

建物67（第152・160図　図版68・73）

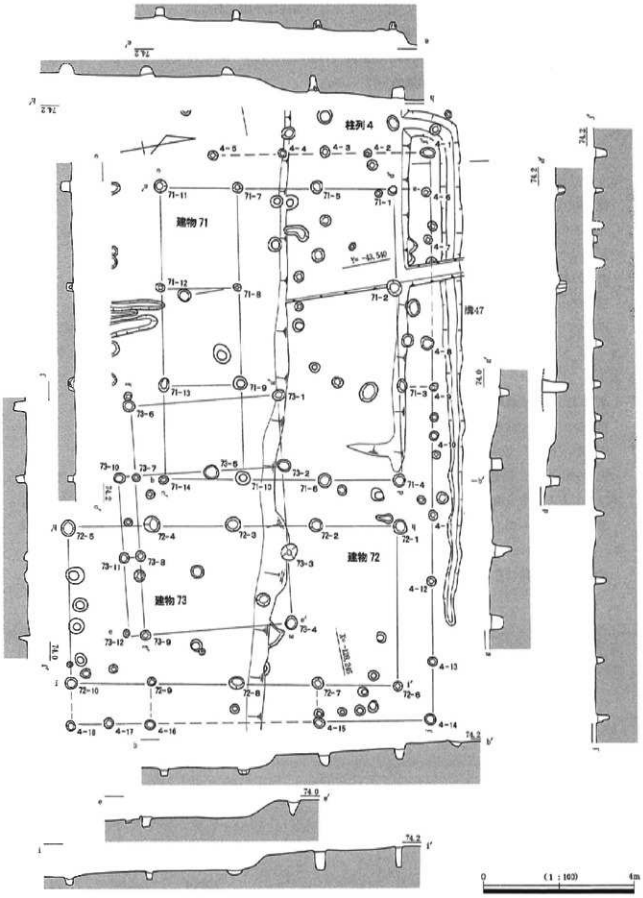
建物66の東側に位置する。主軸方向は東に6°振れる。南北3間×東西2間、約5.9m×4.8m、約28.3㎡である。中央南側には柱穴が存在しないことを調査時に確認している。南東部分は削平が著しい。

遺物は細片のみで、瓦器椀、黒色土器A類、器壁の薄い土師器皿がある。瓦器椀は古手のものであるが、磨滅が著しい。

北側および東側に位置する溝43とセットである可能性もある。建物66と近接し、建物68と重なる。



第162図　建物69　溝46　土器集積2　その他の遺構　出土遺物



第163図　建物71～73　柱列４　平面・断面図

建物68（第152・160図　図版68・73）

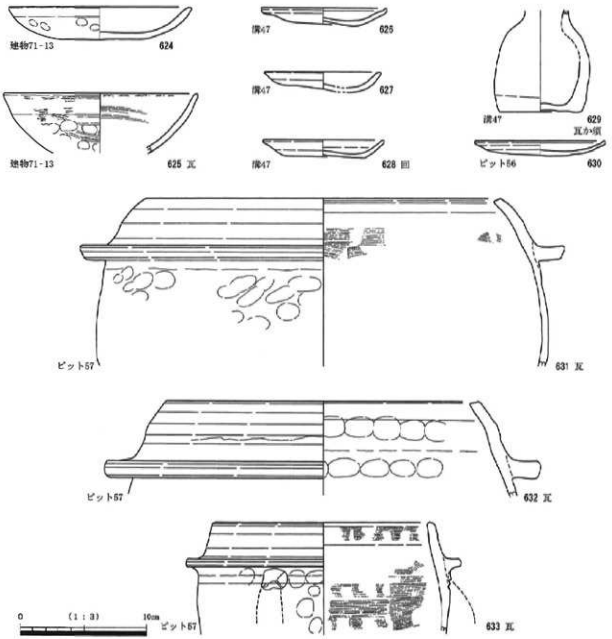
建物66の東側に位置し、東西2間×南北2間、約5.1m×3.6m、約18.4㎡である。主軸方向はN－11°－Eである。平面形は歪である。南東部は削平が著しい。建物66と近接し南辺が揃う。建物67と重なる。

遺物は、土師器と瓦器の細片がごくわずかに出土したのみで、詳細な時期は不明である。

建物69（第152・161・162図　図版68・74・199）

建物66の南側に位置し、東西3間×南北2間、約5.6m×3.2m、約17.9㎡である。主軸方向は、N－14°－Eである。南側は棚田の段差によって削平を受けており、東辺中央の柱穴は、本来存在していたものが失われた可能性が高いと思われる。柱穴6にはヒノキの柱根が遺存していた。

遺物は、「て」字状口縁土師器皿、回転台土師器皿、黒色土器B類椀片、外面にハケメのある器壁の



第164図　建物71　溝47　ピット57　その他の遺構　出土遺物

厚い土師器煮炊具片などが出土している。11世紀中葉～後葉のものと思われる。

建物の周囲には溝46が巡り、溝と建物の間には柱列3が西・北側にある。

建物70（第152・161図　図版68・74）

建物69の南側に位置し、東西1間×南北2間、約3.9m×3.0m、約11.7㎡である。主軸方向は、N－14°－Eを示す。

遺物は、土師器大皿の小片と器壁の厚い瓦器片が出土した。土師器皿片は、小片であり断定はできないが、12～13世紀のものである可能性がある。

北側にある建物69と、主軸方向が同一で、位置的に関連が想定されるところであるが、やや時期がずれる可能性もある。

建物71（第152・163・164図　図版69・75・199）

東部南端で検出し、主軸方向が10°東に振れるが、等高線に沿っている。東西3間×南北3間、約7.7m×6.2m、約47.7㎡である。

遺物は少量で、柱穴13から土師器大皿、瓦器椀、柱穴3から瓦器椀、柱穴14から白磁皿の小片が出土している。11世紀後葉～12世紀前葉のものである。

北側と西側に溝47が巡っている。ただし、南北、東西方向部分ともに削平を受けて途切れており、建物南側の状況は不明である。溝と建物の間には柱列4がある。これはこの建物の一部である可能性もあるが、東側に位置する建物72との関係も想定されることから、独立した遺構番号で扱うこととした。

建物73と重複している。

建物72（第152・163図　図版69・75）

建物71の東側に位置し、建物71と主軸方向が同一である。南北4間×東西1間、約8.7m×4.2m、約36.5㎡である。

遺物は、瓦器椀の細片が少量出土したのみである。

北側と東側には柱列4が存在する。また、その北側には溝47がある。この溝は、先述したように、建物71の西側から続く一連のもので、西端が削平を受けている。建物72と建物71は北辺をほぼ揃え、方向軸も同じである。建物73とは重複しているが、先後関係は不明である。

建物73（第152・163図　図版69・75）

建物71・72と重複する位置にあり、東西3間×南北1間または2間、南側にはわずかに張り出した部分が付き、約6.1m×4.4m、約26.1㎡である。主軸方向は、N－11°－Eを示す。西辺、東辺の検出状況は1間であるが、中央西側の柱穴5を組み合わせると、この部分のみ2間となる。しかしながら、堀田の段差があり削平を受けてはいるが、西辺では中央の柱穴が失われた可能性はなく、東辺でもその可能性は低いと思われる。

遺物はごくわずかな細片のみで、瓦器椀などがある。

建物71・72と重なるが、前後関係は不明である。

柱列3（第152・161図　図版68・74）

建物69とその周囲に巡る溝46との間に位置する。東西3間、約6.3m、南北2間、約7.0mのL字形である。溝は建物の西・北・東側に巡るが、柱列は西側と北側にのみみられる。建物69の一部であることも考えられるが、南北列が建物と全く柱の間隔を揃えていないことから、建物とは別の、塀、柵などである可能性が高い。柱穴は小規模で、杭を打ち込んだような状況を示すものもみられた。

遺物は出土していない。

柱列4（第152・163図　図版69・75）

東部に位置し、建物71と72の周囲を巡る柱列である。東西9間、約15.0m、南北西側4間・東側4間、約5.7m・約9.4mである。建物71の北側部分では建物の柱穴に対応する位置とその中央の位置に柱穴が存在する。建物71の西側にも南北に柱穴が並ぶが、柱穴の配置に規則性はみられない。建物72の北側部分では建物の柱穴と対応はしていないが、建物の幅を意識して等間隔に柱穴が配されているようにみえる。建物72の東側では、削平によって柱穴が失われた可能性がある、後世の棚田の段下にあたる部分以外、建物柱穴の位置とその位置を対応させている。

遺物は、瓦器の細片が出土したのみである。

建物2棟が同時期に隣接して建っており、その周囲にこの柱列が巡っていたと考えるのが最も妥当であろうか。

溝42（第152図）

西部の建物62・63と重複するカギ型の溝で、東西約7.4m、南北約2.3m、幅約0.3m、深さ約0.1mである。南端は、後世の棚田の段差により削平されている。

遺物は、煤の付着した石鍋の破片、瓦器の小片が出土した。

溝43（第152図）

西部の建物67の北側と東側に位置するカギ型の溝である。西側は枝分かれしているか、もしくは別の溝と切り合っていると思われ、一部が建物67の柱穴と重なっている。その切り合い関係は不明である。南端は、削平を受けている。東西検出長約13.5m、南北検出長約3.5m、幅約0.5～1.0m、深さ約0.1m～0.5mである。

遺物は、和泉型瓦器椀、土師器皿、黒色土器B類椀などの小片が出土したのみである。土師器皿は小片で断定はできないが、13～14世紀のものである可能性がある。

建物67の北辺と東西溝が揃うことから、一連のものとも考えられる。

溝44（第152図）

東部で検出し、建物64と重複する。東西方向に伸び、長さ約8.4m、幅約0.7m、深さ約0.1mである。溝45と並行する。

遺物は出土していない。

溝45（第152図）

溝44の南側に位置し、東西方向に伸びる。長さ約12.9m、幅約0.4m、深さ約0.1m～0.2mである。

遺物は出土していない。

溝44と建物64の南辺と並行する。

溝46（第161・162図　図版198）

建物69の西・北・東側を巡っているが、棚田造成による削平を受けたために途中で途切れている。東西長約7.8m、南北遺存長約4.4m、深さ約0.2m～0.3mである。

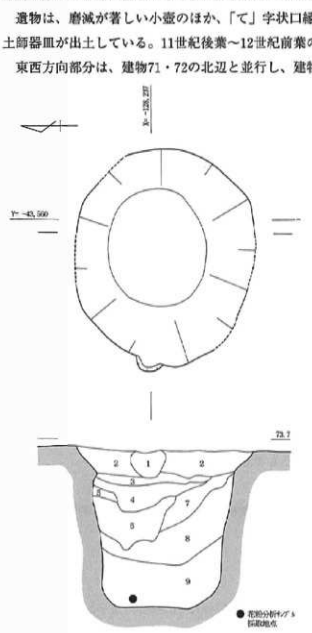
遺物は、ほぼ完形の楠葉型瓦器椀の他、和泉型瓦器椀、器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿、土師器煮炊具、焼土の小片が出土している。11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。

溝47（第152・163・164図　図版76・199）

建物71の北側と西側に巡る。西側南北方向の部分は、棚田造成による削平を受けて途切れ、南部分の状況が不明である。東西遺存長約12.9m、南北遺存長約0.9m、幅約0.5mである。地形の高い北側から降雨の際などに流れ落ちてくる水を排水するためのものと思われる。

遺物は、磨滅が著しい小壺のほか、「て」字状口縁土師器皿、口縁部１段ナデの土師器小皿、回転台土師器皿が出土している。11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。

東西方向部分は、建物71・72の北辺と並行し、建物72の北辺中央の辺りで途切れているが、これは削平を受けたためであり、本来は少なくとももう少し東へ伸びていたと思われる。



1. 2.5Y 5/2 灰黄シルト　小礫多く含む　近・現代水田造成埋土の下層
2. 5YR 5/1 褐灰　シルト－細砂　Ｍｎ・１～10 cm程度の角礫を含む
3. 7.5YR 4/2 灰褐　シルト　Ｍｎ・7.5YR 6/1 褐灰　シルトブロック・炭を含む
4. 10YR 3/1 褐灰　粘土　Ｍｎ・炭を含む
5. 10YR 7/6 黄橙　シルト質粘土　Ｆｅを含む
6. 2.5Y 5/1 黄灰　粘土－砂　Ｍｎ・炭　１辺 15 cm程度の礫を多く含む
7. 2.5Y 5/1 黄灰　細砂－粘砂　Ｆｅ多く含む　１辺 10 cm程度の礫を含む
8. 7.5YR 5/6 橙　粘砂－粘土　土壌に粘砂　Ｆｅの沁着著しい
9. N 6/0 － 5/0 灰　粘土　人頭大までの礫を多く含む
基盤層.（遺構面から約 40 cm下まで）2.5Y 6/6 明黄褐　褐砂－シルト
基盤層.（遺構面から 40 cm以下）10YR 5/6 黄褐　拳大までの礫・中砂－粗砂

0　(1：40)　2m

第165図　井戸４　平面・断面図

井戸４（第152・157・165図　図版68）

西部南寄りに位置し、平面楕円形の素掘りで、長径約2.3m、短径約1.9m、深さ約1.7mである。

遺物には、小片が少量出土したのみで、和泉型瓦器椀、黒色土器、東播系須恵器鉢などがある。12～13世紀のものかと思われる。

花粉分析、種子同定の結果をⅣ　第１章に記載している。

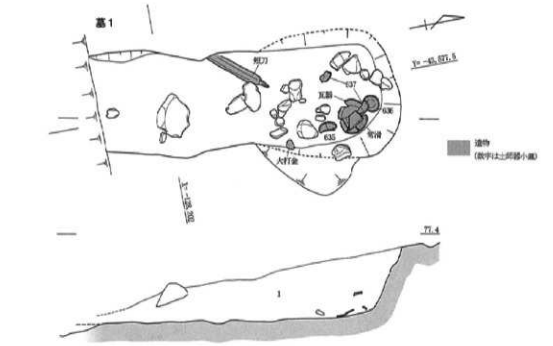
墓１（第152・166・167図　図版68・76・200・237・238）

西部北寄りに位置し、検出長辺約1.6m、短辺約0.5m、深さ約0.4mで、南北方向の長方形である。南端部分が削平されている。

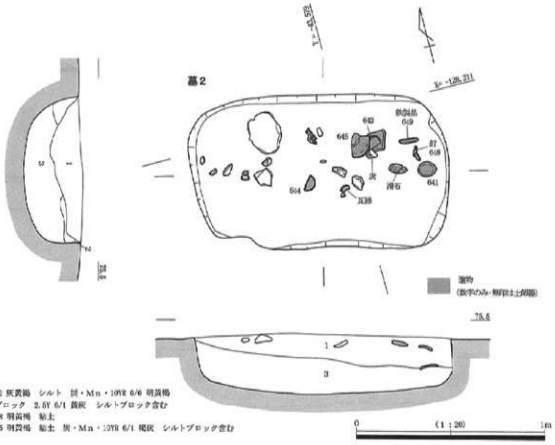
北東部の底面で、逆さまの状態の完形瓦器椀とほぼ完形と半分程度遺存する土師器小皿が、中央西よりの底面で短刀が、東壁際の底面で火打ち金が出土した。常滑焼甕片は埋土の中位に含まれていた。12世紀後葉～13世紀前葉のものと思われる。骨は出土していない。

墓２（第152・166・168図　図版68・76・200・238）

西部中央に位置し、隅丸長方形で、長辺約1.4m、短辺約0.8m、深さ約0.3mで、主軸は東西方向である。釘が出土しており、木棺をともなっていたことも想定される。遺物は破片である。多くが埋土上層から出土しており、木棺上、またはそれを埋めた土の上に置かれていたものが後に落ち込んだ可能性が考えられる。



1．10YR 5/4 にぶい黄褐　シルト～細粗砂　褐砂・小礫含む



1．10YR 5/2 灰黄褐　シルト　鉄・Mn・10YR 6/6 明黄褐
　シルトブロック　2．5Y 6/1 黄灰　シルトブロック含む
2．10YR 6/8 明黄褐　粘土
3．10YR 6/8 明黄褐　粘土　炭・Mn・10YR 6/1 褐灰　シルトブロック含む

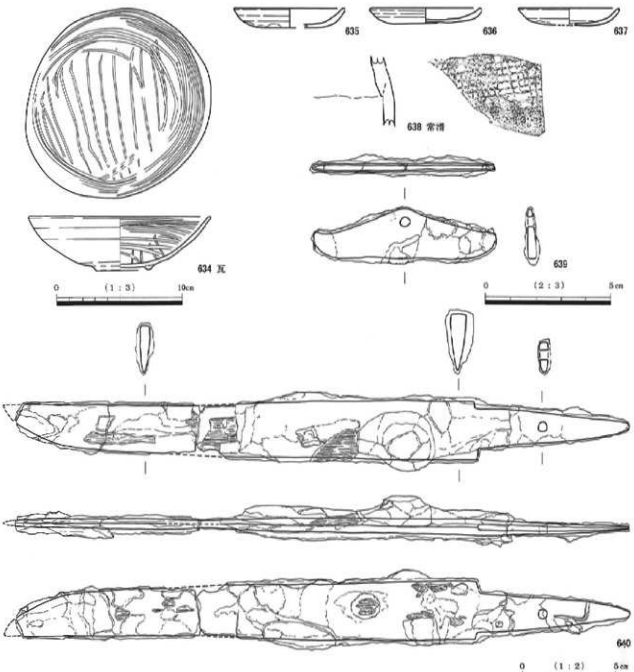
第166図　墓1・2　平面・断面図

遺物は、図示した土師器小皿・大皿、須恵器甕の破片、檜鉋、瓦器椀高台部分、滑石などの細片が出土している。また、被熱痕跡のある礫、木炭片もみられる。釘は実測不可能なものを含めて2～3点が出土している。12世紀後葉～13世紀前葉のものと思われる。骨は出土していない。

建物62・63と重なるが、先後関係は不明である。

ピット52（第152・171図　図版77・198）

西部中央に位置し、平面が不整楕円形で、長径約0.6m、短径約0.3m、深さ約0.5mである。南半部分は、後世の棚田造成によって削平を受けている。土器は埋土の途中に入っており、土師器小皿3枚が重なり、その上に白磁碗がのっていた。すべての土器は内面を上にしてやや傾いている。



第167図　墓1　出土遺物（1/2＝640　2/3＝639）

土師器皿3枚はほぼ完形であるが、白磁碗は体部上半以上が欠けており、底部外面には、巴紋の墨書がある。その他、瓦器、青磁皿などの細片も出土している。12世紀中葉～後葉のものと思われる。

建物62・63と重複している。周辺の遺構群と近い時期であると考えられるが若干古い様相を示している。

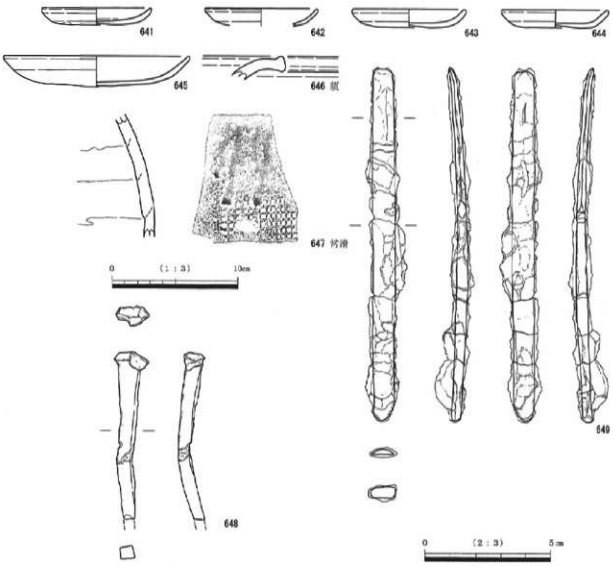
ピット57（第152・164・171図　図版77・199）

南東部に位置する。包含層掘削中に羽釜の破片がまとまって出土したがその時点では、遺構の輪郭がつかめず、包含層を除去した後に基盤層上面において、ピットを検出した。円形で、径約0.3m、検出した深さ約0.3mである。

羽釜は、すべて細、小片である。図示したもの以外にも数種類がある。

土坑40（第169図　図版77）

北西端部に位置し、隅丸長方形の土坑である。長辺約0.7m、短辺約0.4m、深さ約0.2mである。埋土に、小礫を含む。約5m東側に同じく礫を含む土坑41がある。



第168図　墓2　出土遺物（2／3＝648・649）

土坑41（第169図　図版77）

北西端部に位置し、平面形は、北半部が二股にわかれている。南北約1.5m、東西約1.2m、深さ約0.1mである。埋土に小礫を含む。削平を受けたと思われる。

遺物は、常滑焼破片が出土したのみである。

土坑42（第170図　図版77）

北西部の川１の東肩部に立地する。不整楕円形で、長径約1.3m、短径約1.0m、深さ約0.3mである。埋土にはラミナがみられ、一度の水成堆積であると思われる。

遺物は出土していない。

土坑44（第152・170図　図版77）

東部中央に位置し、楕円形で、長径約1.4m、短径約1.2m、深さ約0.6mである。埋土は細砂およびシルトの滞水堆積で、礫を多く含む。

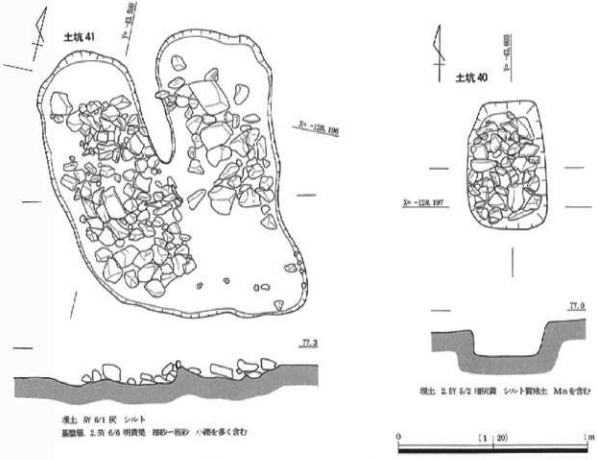
遺物は、瓦器、土師器などの細片が出土したのみである。

焼土坑12（第152・172図　図版77）

中央部に位置し、西側を土坑46に切られているが、隅丸方形と思われ、検出長約0.7m、短辺約0.5m、深さ約0.2mである。壁の上部に部分的に被熱痕跡がみとめられる。薄い炭層が３層みられる。

焼土坑13（第152・172図　図版77）

西部南寄りに位置し、南北約0.9m、東西約0.7m、深さ約0.1mの長方形の焼土坑である。壁はよく焼けしまっており、焼土化している。焼土化した部分の外側は、黒色に、さらにその外側が淡い赤色に

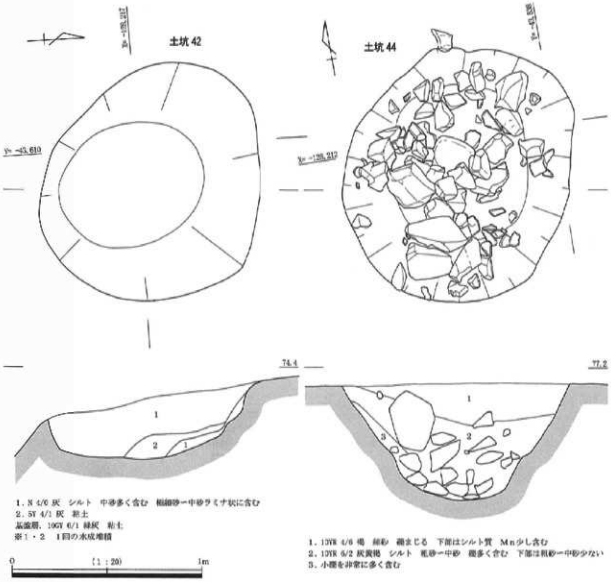


第169図　土坑40・41　平面・断面図

変化している。下層は炭層である。

遺物は出土していない。

丘陵上は、全体的に南の段丘崖に向かって下がっていく地形であるが、なかでもⅰ域は、比較的その傾斜が急で、等高線が密な部分である。調査前は棚田となっていたが、１筆で広い面積を確保できず、等高線に平行に細長い形状のものが連なっていた。包含層は、川１に近く、地形の低い南端部には良好に遺存していた。それ以外では、棚田の先端部分、つまり地形が低く造成時に削平を受けていない箇所にのみ遺存していた。棚田の段下部分は大きく削平されている。この状況は遺跡全体で認められることではあるが、特にⅰ域では棚田の段差間の距離が短いため、遺構の検出状況と本来の遺構のあり方を考える際には、注意が必要である。なお、ⅰ域西部、東部では、上層の作土層に伴う溝を多く検出しており、遺構が削平されて失われた可能性が高い。また、包含層および、その他の遺構の出土遺物は、細、小片ばかりである。



第170図　土坑42・44　平面・断面図

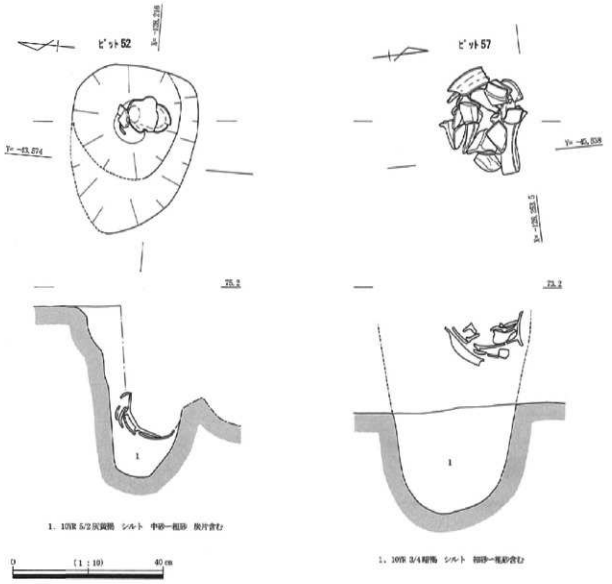
小結

ｉ域では、11世紀後葉～13世紀代までの遺構がみられる。時期別の分布が特徴的で、南の地形の低い部分から北の地形の高い部分へと、11世紀後葉～12世紀前葉、12世紀中葉～13世紀前葉、13世紀代の遺構群が順に展開している。

11世紀後葉～12世紀前葉の遺構群は、南端部、川１に面する部分にみられる。

西側には、建物69と溝46、東には建物71と溝47がある。両者の間は削平を受けており、本来より遺構が存在していなかったのかは不明であるが、いずれにしてもやや距離があいていることから、別の家地である可能性が高いと思われる。両者の間には南北方向の溝37が通っている。後に水田化した際には、この溝と同じ位置に畦畔が設けられており、長い間土地の境界として意識されていたことが想定される。溝からはやや新しい時期の遺物が出土しているため、建物群と同時期に存在していたかは不明であるが、建物群の時期にもこの部分に土地の境界があった可能性があると思われる。

同時期に二つの家地が、川に面する土地の東西に並んで存在した可能性がある。両者ともに、建物の北、西などの周囲に溝を巡らせており、建物と溝の間に、塀または柵と思われる小規模な柱列がある。



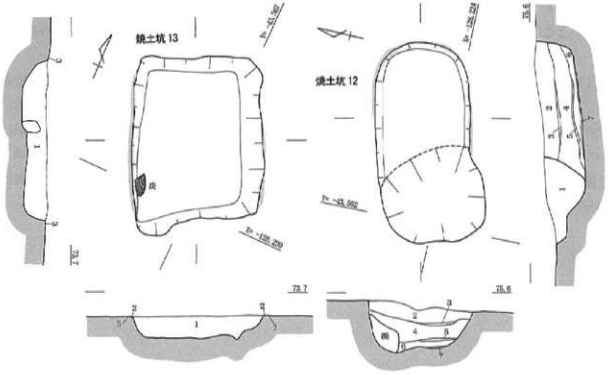
第171図　ピット52・57　平面・断面図

北側が地形的に高くなっているのはｉ域全体にいえることであるが、特にこの両者の北側には、ｉ域の東端、ｊ域との境にある崖と連続する崖が低くなりつつも存在している。建物71北側の遺構の空白地は、大きく削平を受けており、本来は建物71のすぐ北側まで地形の高い部分が迫っていた可能性が高い。建物に付属している溝は、北側から流れ落ちてくる水から建物を守り、排水するためのものであると考えられる。それぞれ周辺に他の建物が存在しており、セット関係であることが想定される。建物71と隣接する建物72は、主軸方向や位置的にみて同時か、近い時期である可能性が高いと思われる。建物69の周囲にある建物群も主軸方向や位置・重複関係などから関連性があると思われるが、詳細な時期が不明である。建物69の周辺は、削平を受けてはいるが、柱穴の深さから考えて、さらに建物が存在した可能性は低いと思われる。西と東の家地を比較すると、西の建物群の正確なセット関係が不明であるものの、明らかに東の方は建物面積が広い。

12世紀中葉・後葉～13世紀前葉の遺構群は、西半中央部分に展開している。

建物には、建物63と、それと重複関係である建物62がある。これらの建物の背後には、高低差約0.7ｍの段差が迫っている。これは、当時、人為的に自然の地形をやや削り込み、平地を確保したとも想定される。

墓２は、建物62・63と重なる位置にあるが、同様な時期の遺物が出土している。墓壙内の状態は、遺物の多くが小片で埋土中に浮いている状態であった。墓１は、北に向かって地形が高くなる緩斜面に立



1．2.5Y 4/2 暗灰黄　シルト　2.5Y 5/1 黄灰　シルトブロック
2．10YR 8/4 浅黄橙・5YR 5/6 明赤褐　シルト　（基盤層）
3．2.5YR 4/4 にぶい赤褐　シルト　（基盤層）
　Mn・1～2cm大の小礫を含む
基盤層．2.5Y 3/2 黒褐　シルト質粘土　炭・焼土粒を含む

1．7.5YR 3/3 暗褐　細砂　5cm大の角礫含む　炭・少量の焼土を含む　土坑46埋土
2．7.5YR 3/2 黒褐　粗砂並じりシルト　5cm大の角礫含む
3．炭層
4．5YR 2/1 黒褐　細砂並じりシルト　5cm大の角礫含む　炭・焼土少量に含む
5．炭層
6．7.5YR 4/6 褐　細砂～中砂　炭少量含む
7．炭層

0　(1：23)　1m

第172図　焼土坑12・13　平面・断面図

置し、建物群から北にやや離れた位置にある。これも墓２と同様な時期の遺物が出土している。建物と墓１の間は削平が著しく、本来の状況が不明である。しかし、建物を建て得るような地形ではなく、建物62・63など、南に１段下がった部分に位置する建物と関連があると考えられる。

建物と重なる位置に、土器を意図的に入れたと思われるピット52がある。地鎮などの目的をもっていたと考えられる。土師器小皿３枚と、底部外面に巴紋の墨書をもつ白磁碗が出土している。建物、墓など、周辺の遺構から出土した遺物と比較して、若干ではあるが古い様相を示している。地鎮が目的であったとすれば、この部分を土地利用するに際して、祖納がおこなわれたことも想定される。

13世紀代の遺構は、主に北部にみられる。

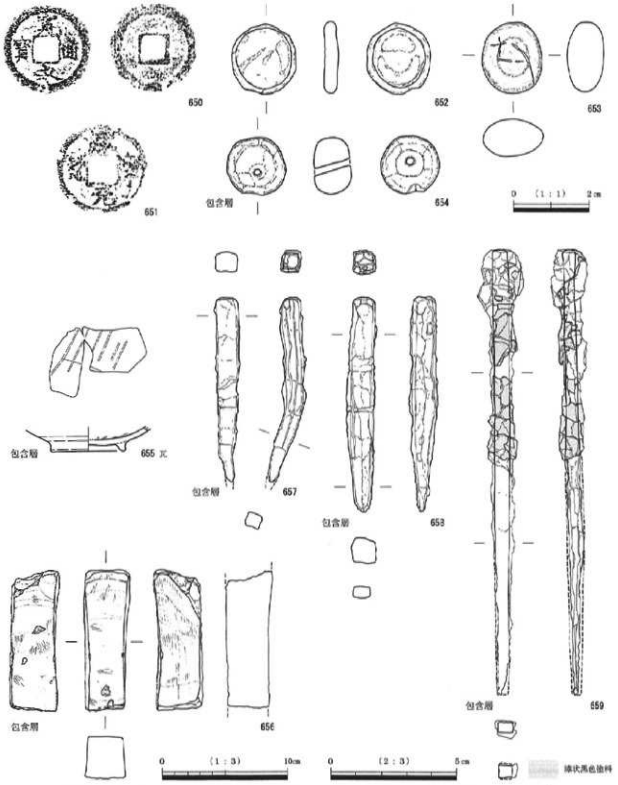
小規模な建物59・60以外に顕著な遺構はないが、周辺のピット、土坑からは13世紀代の遺物が出土している。北側は大きく削平されており、本来あった遺構が失われていることも考えられる。北西に隣接するｈ域では同時期の遺構が展開しており、これらとの関連が想定される。

東半中央部に位置する建物61・64・65は、時期が不明である。建物64から出土した小片は、12世紀以降のもので、西半中央部に展開している12世紀中葉～13世紀前葉の遺構群か、または、西半北部に位置する13世紀代の遺構群と同時期である可能性が考えられる。

西半東部に位置する、建物66～68も時期不明である。溝43がこれらと関連するものであるとすれば、13～14世紀のものである可能性がある。ただし、建物69と関連するものである可能性も否定できない。

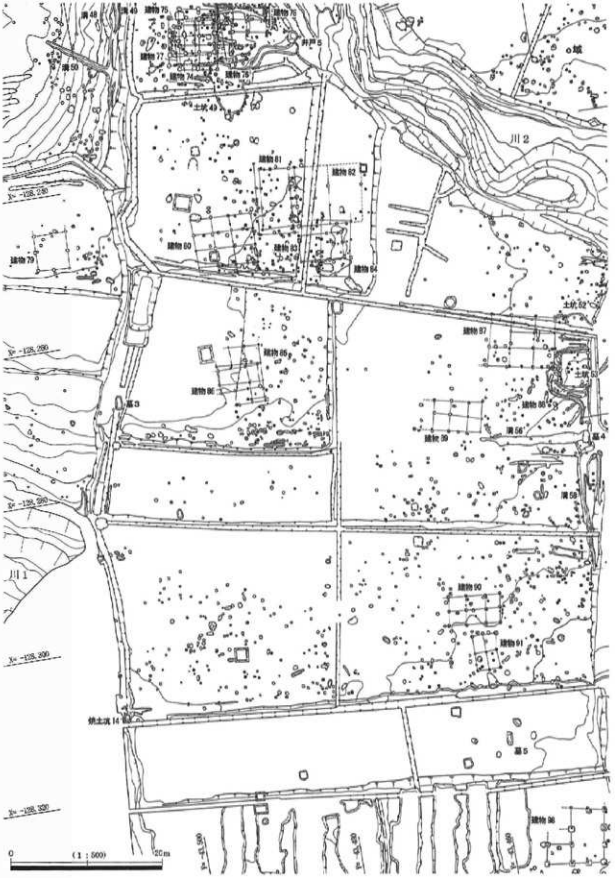
井戸４も、詳細な時期が不明である。位置的には南部の11世紀後葉～12世紀前葉の遺構群とセットにしたいところではあるが、中央部の12世紀後葉～13世紀前葉の遺構群とセットである可能性もある。

ｉ域の北西側は、ｈ域である。ｉ域北部の13世紀代の遺構と関連がある可能性は前述したとおりである。北側は、ｋ域である。遺構は時期不明のものが多く、両者の間は著しく削平されていることから、その関係は不明であるといわざるを得ない。東端は、約2.4ｍの高低差をもつ崖となっており、ｊ域にいたる。ｊ域にはｉ域と同様な時期の遺構が展開している。西、南側は、川１を挟んでそれぞれｅ域、ｆ域である。ｅ域とは全く時期が異なるが、ｆ域にはｉ域と同様に11世紀後葉から12世紀前葉の遺構がみられる。



第173図　包含層・近世作土層等　出土遺物（２／３＝657～659　１／１＝650～654）

第３項　ｊ域（付図６・７・11）



丘陵上の南東部分である。西側に川1、東側に川2が流れ、川に挟まれている。南部は勝尾寺川段丘面に面した丘陵先端部分であり、段丘崖は約7mの高低差がある。西側がi域、南西側が川1を挟んでf・g域、北東側が川2を挟んでo～q域、南側の段丘崖下がy域である。

主な遺構に、建物25棟・井戸1基・墓4基・焼土坑4基があり、他に、溝・土坑・集石などがある。

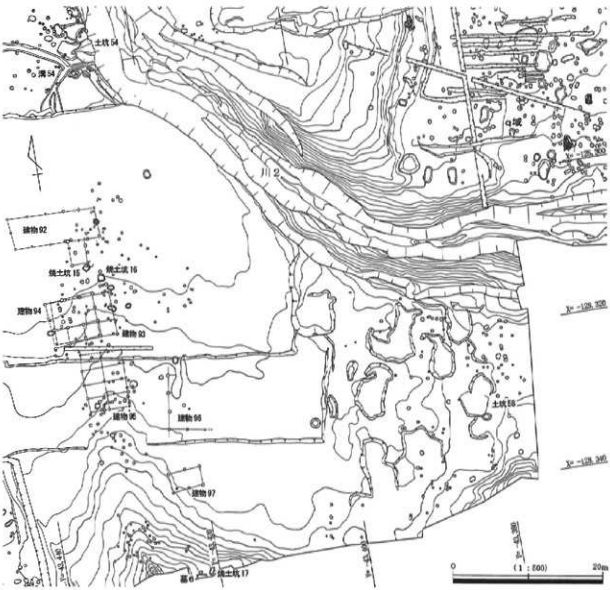
建物74（第174・175・181図　図版78・80・243）

北西端部に位置し、南北3間×東西2間、約8.0m×5.2m、約41.6㎡である。主軸方向は、N－10°－Eである。柱穴の規模が径約0.4m～0.5mと比較的大きい。建物75～77と重なる。土坑49に切られる。

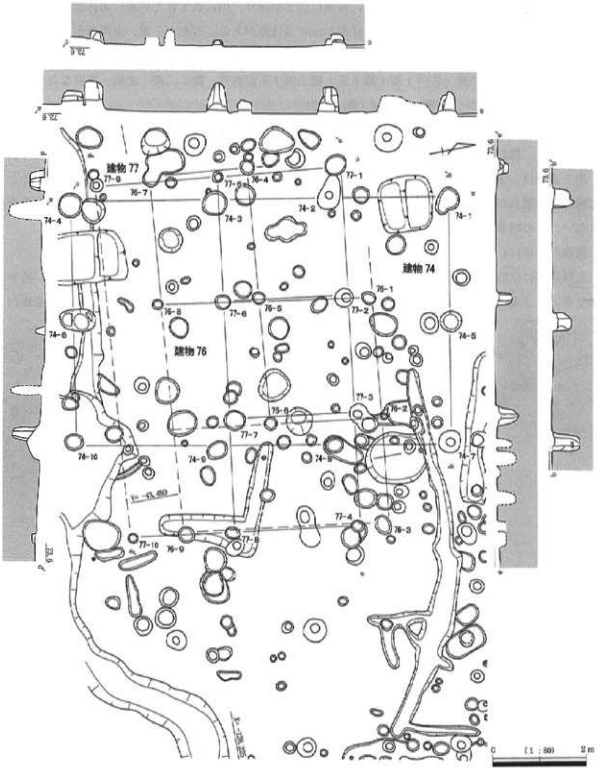
出土遺物は、土師器小皿、瓦質土器の小片がみられるのみであるが、柱穴6からは瓦器の小片とともに椀形滓の壊れたものが出土している。土師器小皿は14世紀以降のものと思われる。椀形滓は分析をおこない、その結果をⅣ　第4章に掲載している。

建物75（第174・176図　図版78・80）

北西端部に位置し、東西3間×南北3間で、南端の1間は柱間がやや狭い。約6.0m×6.0m、約36.0㎡である。主軸方向は、N－5°－Eを示す。柱穴は、径約0.4m～0.6mと比較的大きい。建物74・



j域　平面図



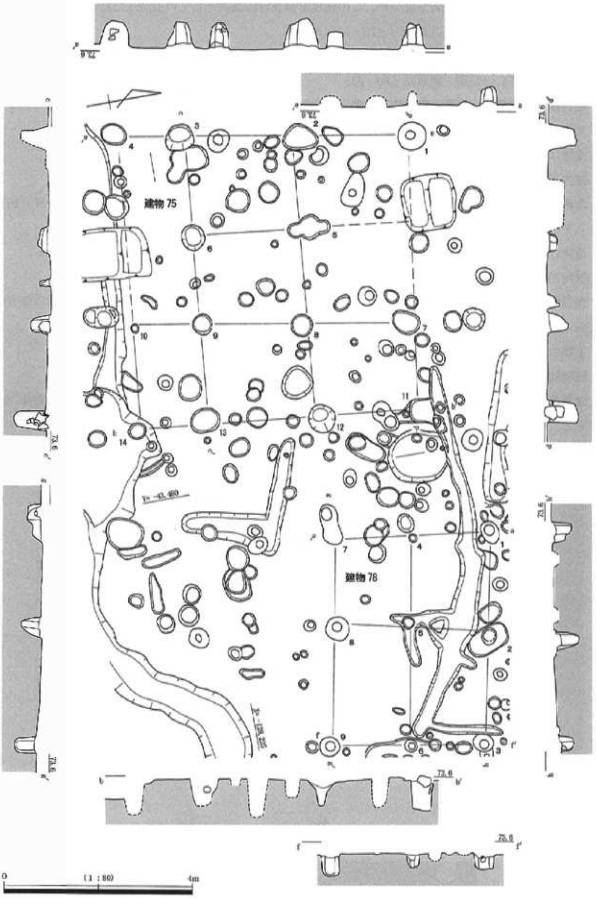
第175図　建物74・76・77　平面・断面図

76・77と重なる。土坑49に切られる。

遺物は小片のみで、土師器皿、瓦器、瓦質羽釜などがあり、若干の焼土片もみられる。詳細な時期は不明であるが、瓦器椀は12世紀以降のものである。

建物76（第174・175図　図版78・80）

北西端部に位置し、東西３間×南北２間、約7.6m×4.4m、約33.4㎡である。主軸方向は、N－5°



第176図　建物75・78　平面・断面図

－Ｅを示す。北西隅には柱穴がないが、この建物を調査時に認識をしていなかったため、柱穴の有無は厳密には確認できていない。建物74・75・77と重なる。

遺物は、瓦器小片が１点出土したのみである。

建物77（第174・175図　図版78・80・81）

北西端部に位置し、東西３間×南北２間、約7.5m×5.0m、約37.5㎡である。主軸方向は、Ｎ－５°－Ｅを示す。建物74～76と重なる。

遺物は、瓦質土器小片が出土したのみであるが、細かい焼土片もみられる。

建物78（第174・176図　図版78・80・81）

北西端部に位置し、東西２間×南北２間、約4.5m×3.3m、約14.9㎡である。主軸方向は、Ｎ－10°－Ｅを示す。

遺物は、土師器皿、瓦器椀、受け口状口縁の瓦質鍋、土師器鍋などの細、小片が出土している。

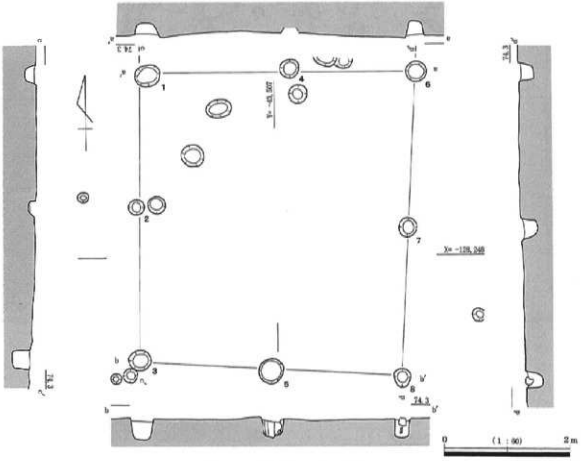
建物79（第174・177図　図版81）

西端部に位置し、南北２間×東西２間、約4.7m×4.3m、約20.2㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。建物の北側は、本来は崖地形であったが棚田造成時に大きく削平されている。

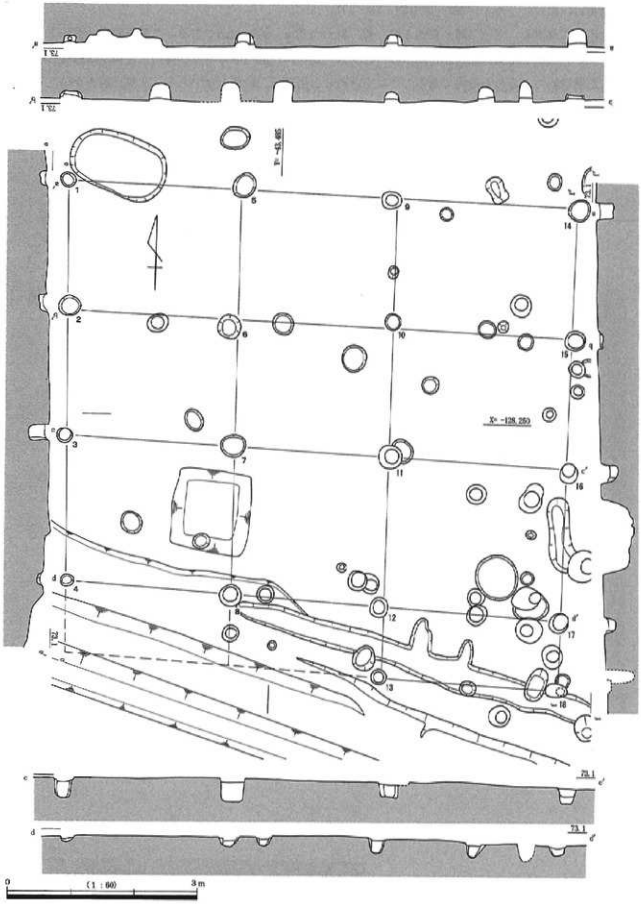
遺物は、瓦器の細片が出土したのみである。

建物80（第174・178図　図版82・83）

北西部に位置し、東西３間×南北３間で、南辺に１間の付属部分がつく。約8.0m×7.6m、約60.8㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。遺物は出土していない。



第177図　建物79　平面・断面図

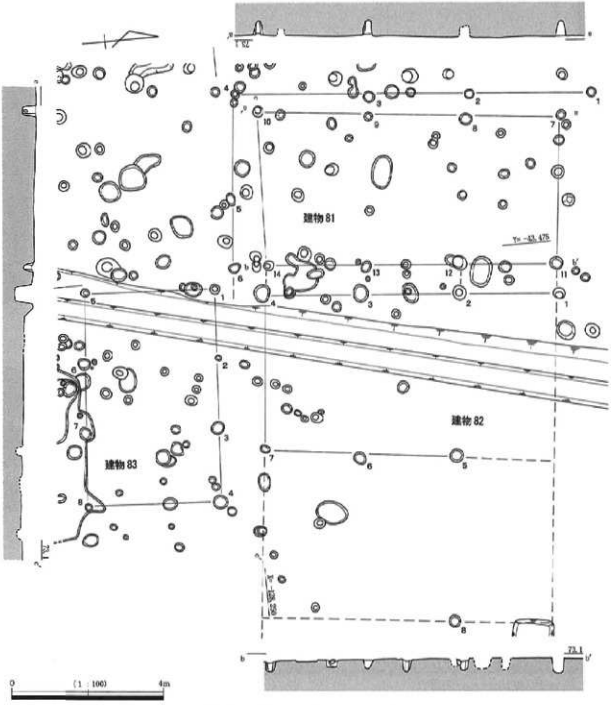


第178図　建物80　平面・断面図

建物81（第174・179・181図　図版82・83・201）

北西部に位置し、南北３間×東西１間、約7.8m×4.0m、約31.2㎡である。主軸方向は、N－5°－Eを示す。西側と南側に柱列が付属する。柱列は、建物の一部であるのか、建物に付属する構などの独立した構造物であるのか不明である。これを含めると面積は、約38.7㎡である。北側は削平が著しく、本来あった柱穴が失われた可能性もあるが、付属柱列の北端の柱穴と建物の位置関係から、その可能性は低いと思われる。東側の建物82と同一の建物である可能性もある。

遺物は、土師器皿、瓦器皿、土師器煮炊具などの小片が出土している。12世紀のものと思われる。



第179図　建物81～83　平面・断面図

建物82（第174・179図　図版82・83）

北西部に位置し、南北3間×東西1間、約7.6m×4.2m、約31.9㎡である。主軸方向は、N－5°－Eを示す。3間×1間の建物81の東側に位置し、同様な構造である。ただし、北から2列目の東西列では東にさらに1間の箇所に柱穴が存在し、周辺の削平が著しいことを勘案すれば、東西2間、約8.6m、約65.4㎡である可能性もある。北側も削平が著しいが、建物81と同様であれば、さらに北には伸びない可能性が高い。また、建物81と同一の建物である可能性も考慮に入れておく必要がある。

遺物は、土師器皿、瓦器などの小片が出土した。瓦器椀は12～13世紀のものであろうか。

建物83（第174・179図　図版82）

北西部に位置し、東西3間×南北1間、約5.6m×3.5m、約19.6㎡である。主軸方向は、東に2°振っている。建物84と重なる。建物81・82の南側に位置し、方向軸がほぼ揃う。

遺物は、瓦器の細片が出土したのみである。

建物84（第174・180・181図　図版82・201）

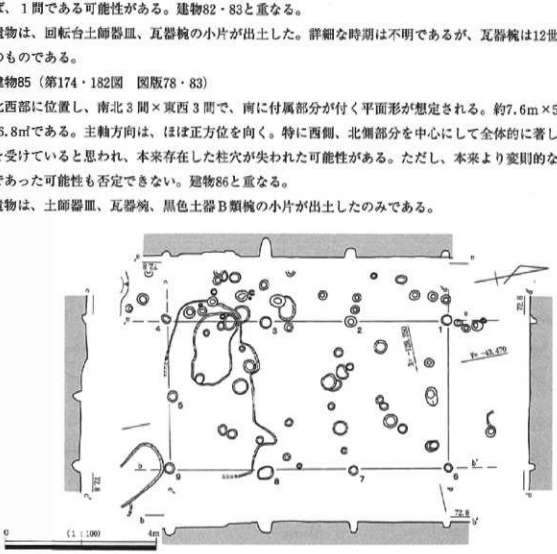
北西部に位置し、南北3間×東西1間または2間、約7.4m×4.0m、約29.6㎡である。主軸方向は、N－12°－Eを示す。ただし、北側および南側は削平が著しい。南辺は、建物81などと同様な構造であれば、1間である可能性がある。建物82・83と重なる。

遺物は、回転台土師器皿、瓦器椀の小片が出土した。詳細な時期は不明であるが、瓦器椀は12世紀以降のものである。

建物85（第174・182図　図版78・83）

北西部に位置し、南北3間×東西3間で、南に付属部分が付く平面形が想定される。約7.6m×5.9m、約36.8㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。特に西側、北側部分を中心にして全体的に著しい削平を受けていると思われ、本来存在した柱穴が失われた可能性がある。ただし、本来より変則的な平面形であった可能性も否定できない。建物86と重なる。

遺物は、土師器皿、瓦器椀、黒色土器B類椀の小片が出土したのみである。



第180図　建物84　平面・断面図

建物86（第174・182図　図版78・83・84）

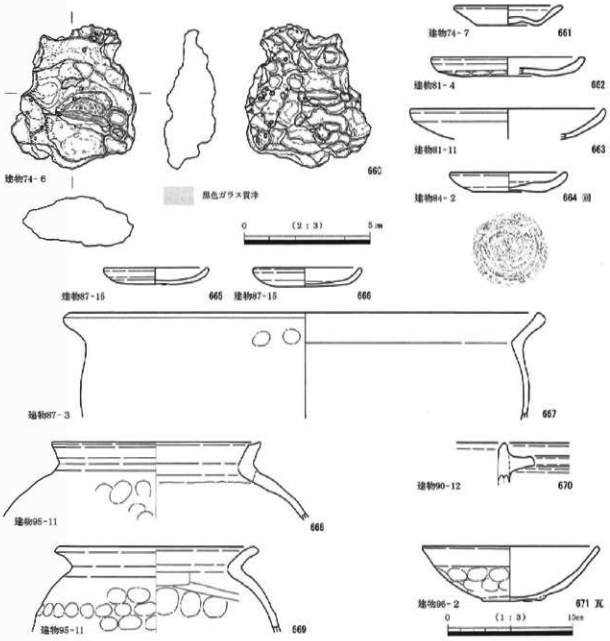
北西部に位置し、東西３間×南北１間、約5.3m×3.0m、約15.9㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。削平が著しい部分にある。建物85と重なる。

遺物は、瓦器椀の小片が出土したのみである。

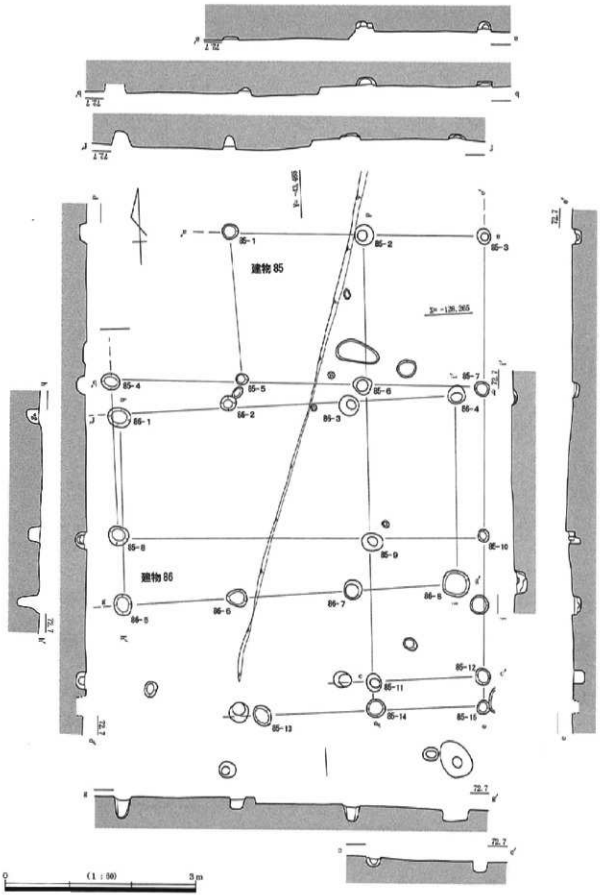
建物87（第174・181・183図　図版78・84）

中央北部に位置し、東西３間×南北３間、約8.7m×6.7m、約58.3㎡である。主軸方向は、N－12°－Eを示す。ただし、西側は削平が著しい。

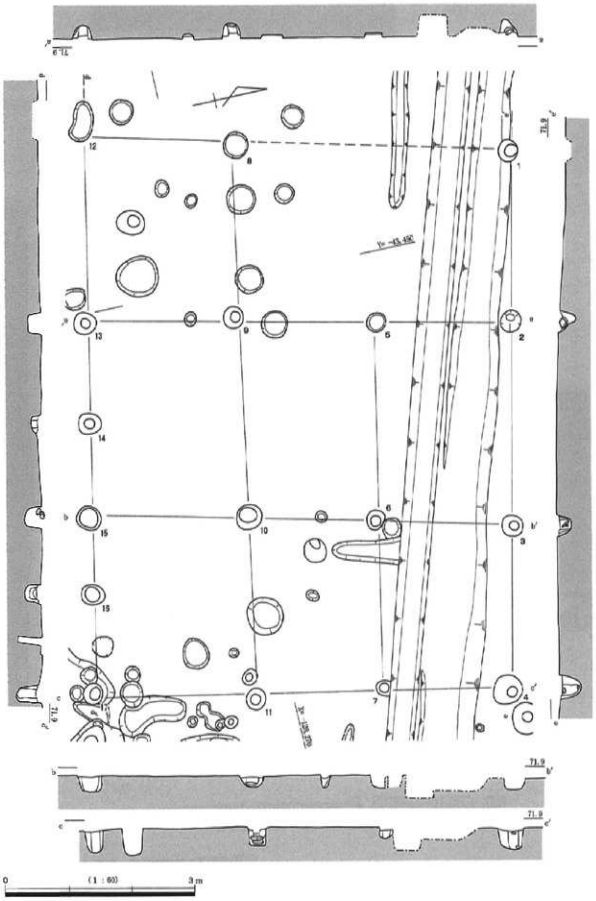
遺物は、土師器小皿・鍋、瓦器椀、瓦質羽釜の小片が出土している。土師器小皿は12世紀後葉～13世紀のもの、瓦器椀の高台は退化が始まっており、12世紀以降のものである。



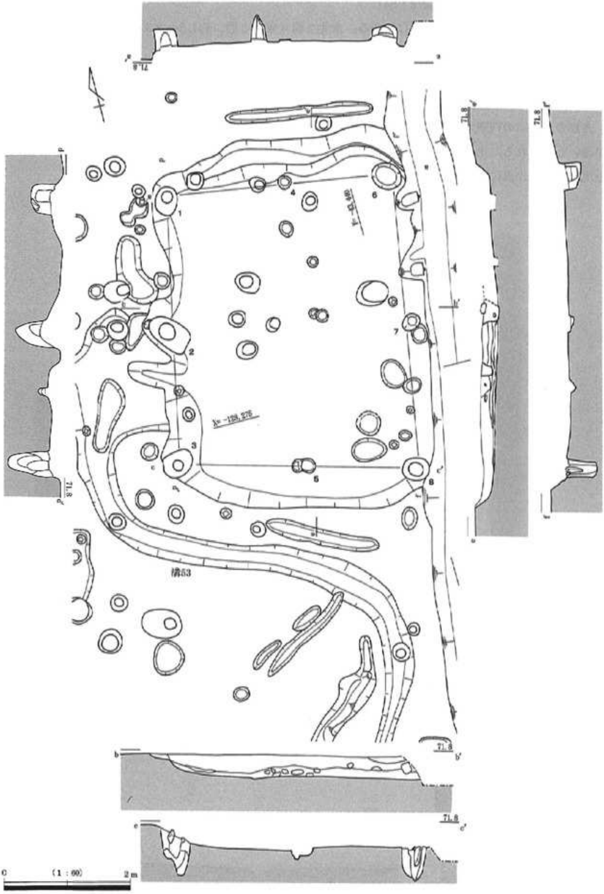
第181図　建物74・81・84・87・90・95・96　出土遺物（２／３＝660）



第182図　建物85・86　平面・断面図



第183図　建物87　平面・断面図



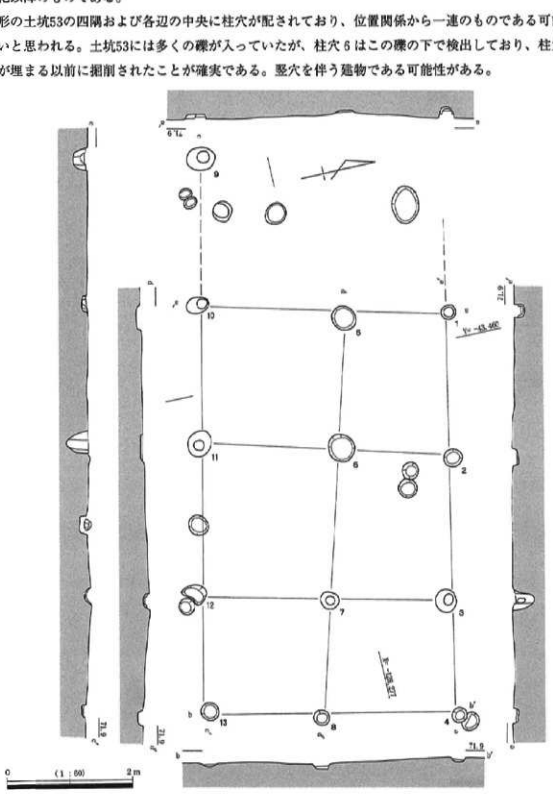
第184図　建物88　土坑53　平面・断面図

建物88（第174・184図　図版78・84）

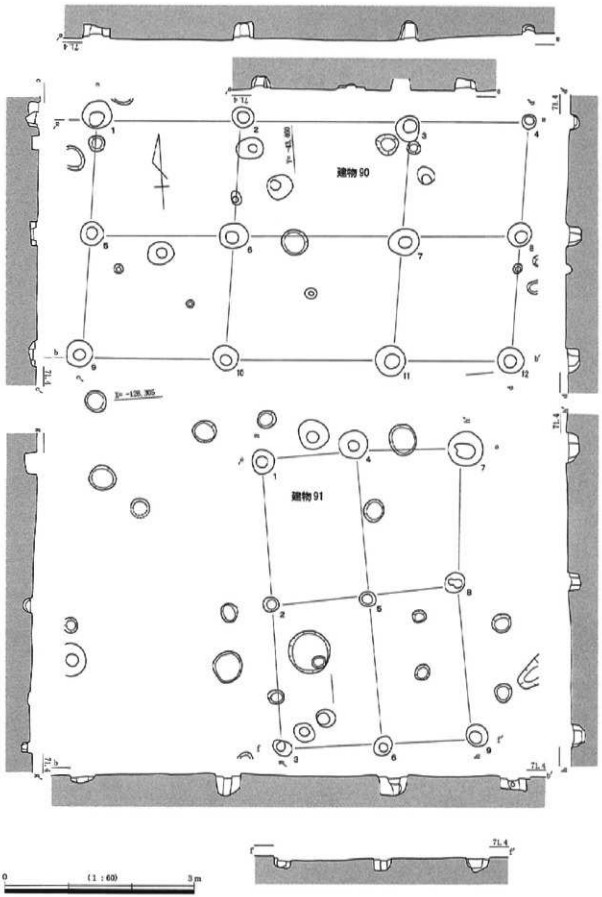
中央北部に位置し、土坑53内部に納まる。南北２間×東西２間、約4.5m×3.7m、約16.7㎡である。主軸方向は、N－10°－Eを示す。

遺物は、瓦器椀、土師器羽釜の小片が出土したのみである。瓦器椀の高台は、退化が始まっており、12世紀以降のものである。

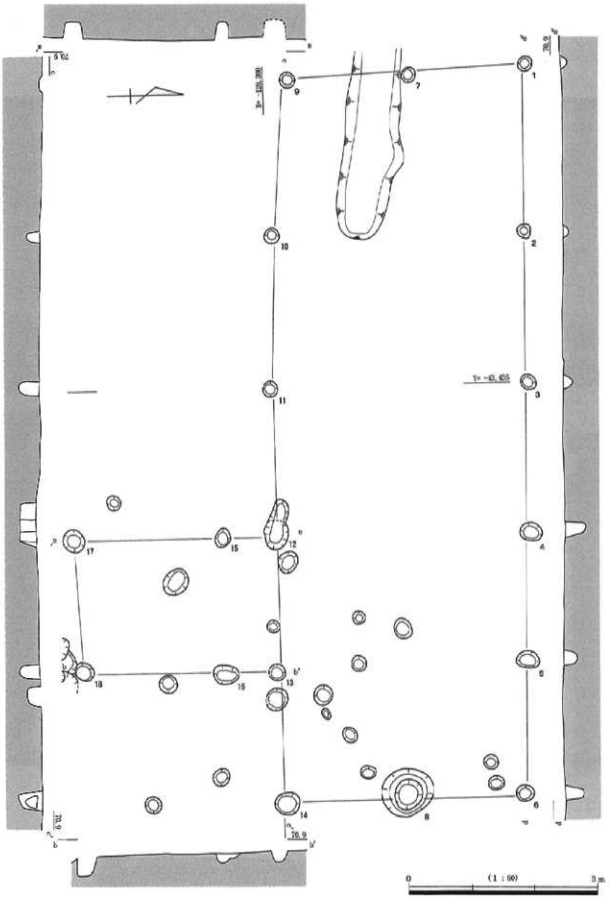
方形の土坑53の四隅および各辺の中央に柱穴が配されており、位置関係から一連のものである可能性が高いと思われる。土坑53には多くの礫が入っていたが、柱穴６はこの礫の下で検出しており、柱穴は土坑が埋まる以前に掘削されたことが確実である。竪穴を伴う建物である可能性がある。



第185図　建物89　平面・断面図



第186図　建物90・91　平面・断面図



第187図　建物92　平面・断面図

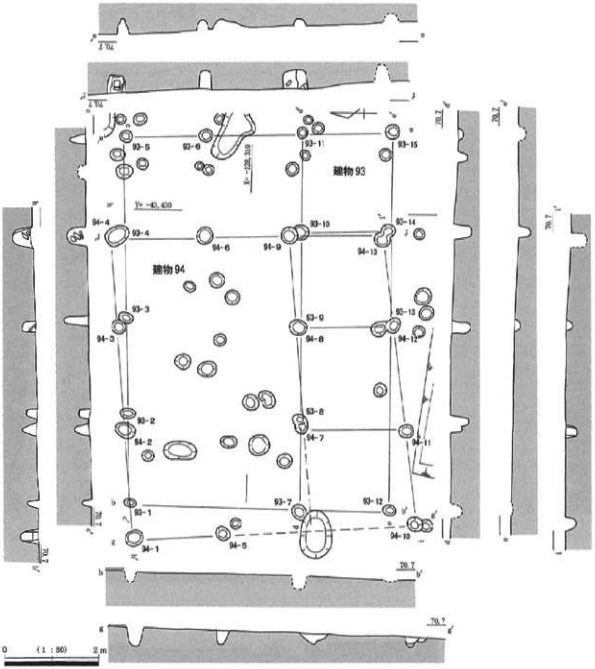
建物89（第174・185図　図版78・85）

中央北部に位置し、東西3間または4間×南北2間、約6.4mまたは約8.8m×3.9m、約34.3㎡または約25.0㎡である。主軸方向は、N－11°－Eを示す。柱穴の遺存状況から著しく削平を受けていることが想定され、特に北側、西側を中心とした周辺部分において、本来存在した柱穴が失われている可能性がある。

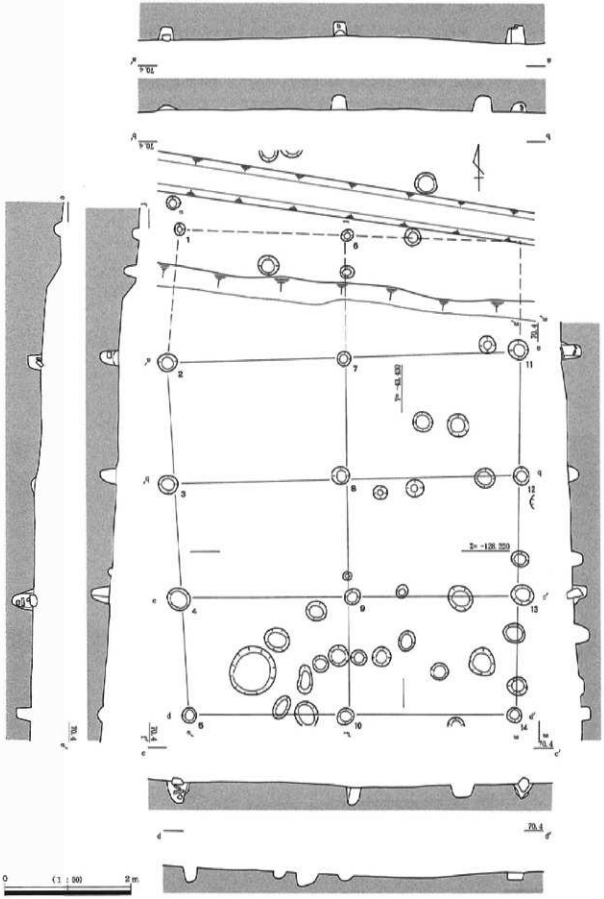
遺物は、瓦器椀、土師器皿の細片が出土したのみである。

建物90（第174・181・186図　図版78・85）

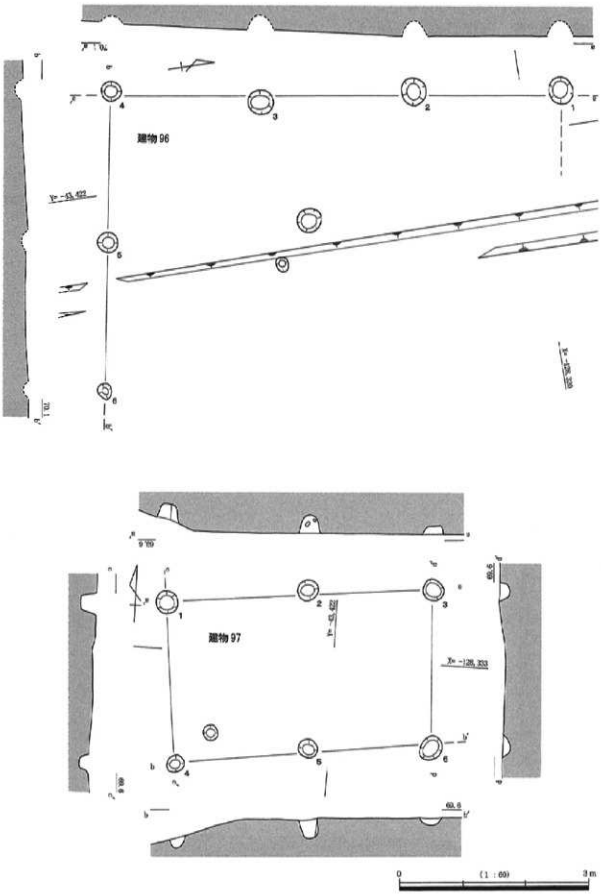
中央部に位置し、東西3間×南北2間、約6.9m×3.8m、約26.2㎡である。主軸方向はN－8°－E



第188図　建物93・94　平面・断面図



第189図　建物95　平面・断面図



第190図　建物96・97　平面・断面図

を示す。ただし、西側は削平が著しい。柱穴の規模は、径約0.4m～0.5mと比較的大きい。

遺物は須恵器、土師器羽釜の小片が出土したのみである。

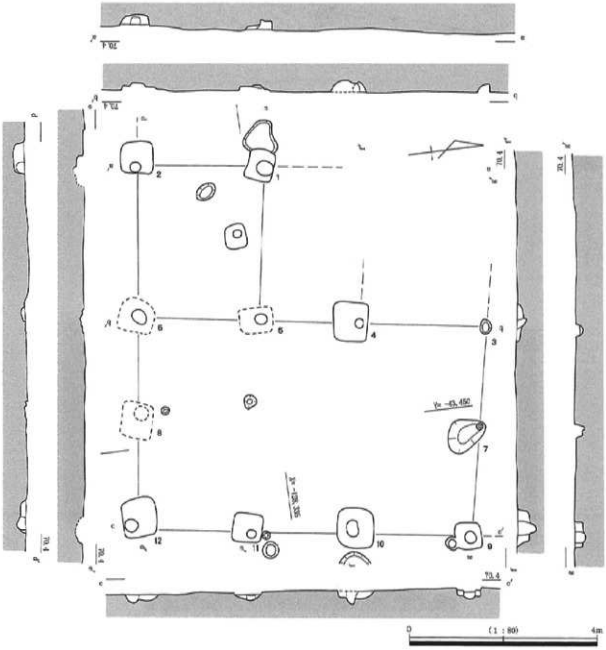
建物91（第174・186図　図版78・85）

中央部に位置し、南北２間×東西２間、約4.7m×3.1m、約14.6㎡である。主軸方向は、N－2°－Eを示す。

遺物は、土師器煮炊具の小片が出土したのみである。

建物92（第174・187図　図版79・86）

東部の北側に位置し、東西５間×南北２間、約11.5m×4.0mで、南辺の東寄りに張り出し部をもち、約52.7㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を示す。遺物は出土していない。建物93～95とほぼ方向軸を揃える。建物93・95とは東辺が揃っており、建物93・94とは柱の並びもほぼ揃っている。



第191図　建物98　平面・断面図

建物93（第174・188図　図版79・86・87）

東部の中央に位置し、東西4間×南北3間、約8.0m×5.6m、約44.8㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を示す。

遺物は、建物94と共通使用の可能性がある柱穴9から黒色土器A類、著しく磨滅した器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿、焼土片が出土したほかは、土師器の小片が出土したのみである。柱穴9の遺物は10～11世紀のものと思われるが、細片であり、建物の時期を決定し得るものではない。

建物94と重複している。柱穴4・13は、それぞれ建物94の柱穴4・12でもある。建物94も南が廂であるならば、柱穴9も2時期にわたって使用されたことになる。柱穴の切り合いから建物94の方が新しい可能性がある。建物92とは方向軸、東辺が揃っており、柱の並びもほぼ揃っている。

建物94（第174・188図　図版79・86・87）

東部に位置し、東西3間×南北3間、約6.4m×5.9m、約37.8㎡である。主軸方向は、西へ3°振っている。建物93と重複する。

遺物は、柱穴9から黒色土器A類が出土したほか、建物93の柱穴9でもある柱穴8から黒色土器A類、著しく磨滅した器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿、焼土の小片が出土している。柱穴8の遺物は10～11世紀のものと思われるが、細片である。

建物95（第174・181・189図　図版79・86・87）

東部に位置する。南北3間もしくは4間×東西2間、約5.6mまたは約7.6m×5.4m、約30.2㎡または約41.0㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を示す。建物92・93とは方向軸、東辺が揃っている。

遺物は、土師器皿・甕、黒色土器A類、須恵器、焼土の小片が出土している。

建物96（第174・181・190図　図版79・87・201）

東部に位置する、南北3間以上×東西2間以上の建物であると思われる。7.2m以上×4.7m以上、33.8㎡以上である。西側を除いて削平が著しく、本来の規模は不明である。

遺物は、12世紀後葉～13世紀前葉の瓦器椀が出土している。

建物97（第174・190図　図版79・86・87）

東部に位置し、東西2間×南北1間、約4.2m×2.5m、約10.5㎡である。主軸方向は、N－3°－Wを示す。ただし北側、東側は削平が著しい。

遺物は、土師器皿の小片などが出土したのみである。

建物98（第174・191図　図版87）

中央南部に位置する。南北3間×東西2間と思われるが西側に柱穴が存在していることから、さらに西側に展開していたことも考えられる。3間×2間の場合、約7.2m×4.5m、約32.4㎡、西側も含めた場合は、約7.2m×7.7m、約55.4㎡である。主軸方向は、N－7°－Eを示す。柱穴10は確実に方形の掘り方であるが、その他の柱穴に関しては遺存状況が非常に悪く、柱穴の平面形は不明であるといわざるを得ない。特に北と西を中心として全体的に著しい削平を受けており、本来存在していた柱穴が失われた可能性もある。遺物は出土していない。

溝48（第174図）

建物74～78の西側に存在する、約2.4mの高低差を有する崖の中位に立地する。長さ約20.0m、幅約0.5m～1.2m、深さ約0.2m～0.6mである。等高線に沿って南北方向に伸びている。削平を受けており全容がわからないが、底面のレベルも検出した限りでは一定である。北端部は東に曲がっており、その

部分からと、南端部からも、崖上からの排水をしていた可能性がある。遺物は出土していない。

溝49（第174図）

溝48の東に並行している。長さ約5.0m、幅約0.7m、深さ約0.2mである。遺物は出土していない。

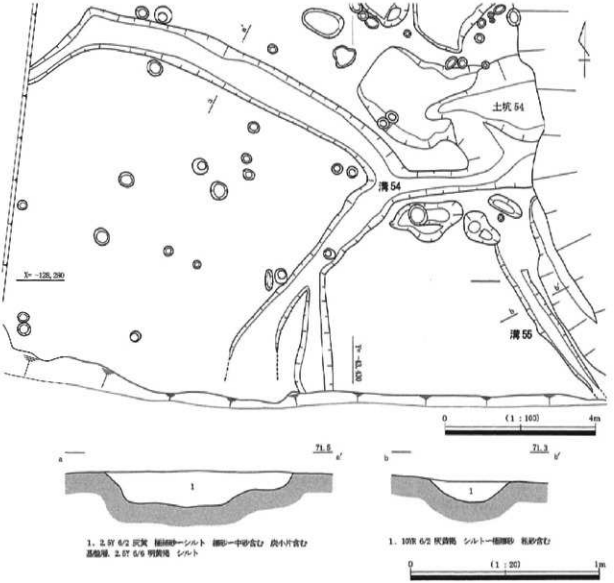
溝50（第174図）

建物74～78の西側は、ｉ域東端部から約2.4m下がる崖である。この崖上から崖下に向けて、北西から南東へと伸びる溝である。長さ約10.0m、幅約0.7m、深さ約0.1m～0.4mである。遺物は出土していない。

溝52（第203図）

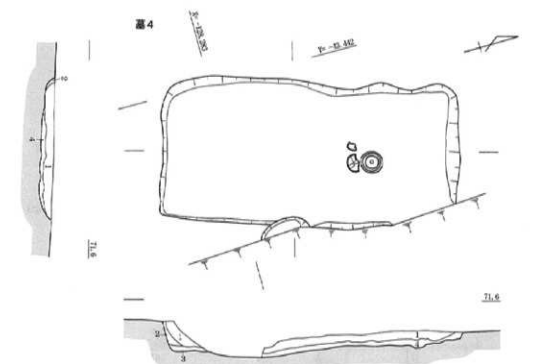
北西端部に位置し、土坑49から東側の川へと伸びる溝である。北に湾曲して東行する。検出長約8.8m、幅約0.6m～1.6m、深さ約0.4m～0.5mである。西端部と東端部で、東に向かって傾斜がついており、落ち込みから川への排水の機能を果たしていたと考えられる。

遺物は、土師器皿・鍋、瓦器、東播系須恵器鉢、土師器鍋などの小片が出土している。13～14世紀のものと思われる。



第192図　溝54・55　平面・断面図

1．7.5Y 5/1 灰　中砂まじりシルト　1辺1－3cmの小角礫を多量に含む
2．5Y 5/2 灰オリーブ　粗砂－中砂まじり粘質シルト－粘土
基盤層．7.5YR 5/3 明褐　中砂－粗砂・風化礫まじりシルト質粘土



1．10YR 6/2 灰黄褐　極細砂　Fe・Mn含む　Mn等に多い
2．10YR 5/2 灰黄褐　極細砂　Fe・Mnを多量に含む　10YR 4/3 に近い黄褐　シルトブロックを若干含む
3．10YR 6/1 褐灰　粗砂まじり極細砂　Fe・Mn若干含む
4．2.5Y 6/2 灰黄　粗砂まじりシルト　Fe・Mnを多量に含む
基盤層．2.5Y 6/3 に近い黄　シルト　Fe・Mn・粗砂－極粗砂を多く含む

0　(1：20)　1m

第193図　墓３・４　平面・断面図

溝53（第184図）

中央北部に位置し、土坑53の南西側で形状に添うように湾曲し、南へと伸びる。長さ約10.0m、幅約0.5m、深さは0.1m以内で、レベルは南へと低くなっているが、土坑53に比べると非常に浅い。部分的に埋土に焼土片が含まれていた。土坑53と一連であるかは不明であるが、形状と位置関係から関連が想定される。

遺物は、磨滅した小片のみで、瓦器、瓦質脚付羽釜、土師器などがある。

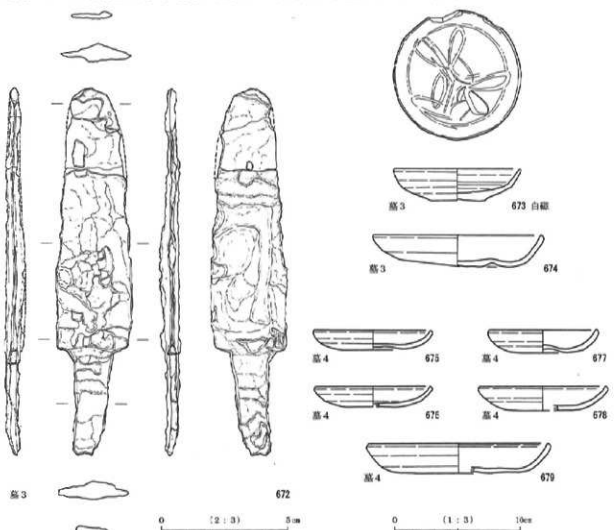
溝54（第174・192・205図）

北東部に位置し、川２の西肩部分で土坑54に接続している。検出長約15.0m、幅約0.7m～1.1m、深さ約0.1m～0.2mである。西側は二股に分かれている。川に向かって底面のレベルが下がっており、川に排水するためのものと思われる。

遺物は、瓦器椀、土師器などの小片が多く出土している他、金属製品も出土している。

溝55（第192図）

北東部に位置し、川２の西肩部分で川に沿って伸びる溝である。南部は削平されて失われている。底面のレベルは南から北へと低くなり、溝54同様排水溝であったと考えられる。北端部は溝54、土坑54に連結している可能性が高い。遺物は細片がごくわずかに出土したのみである。



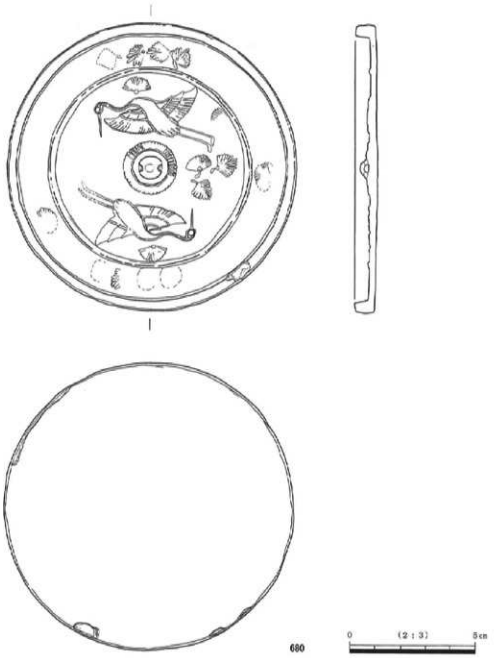
第194図　墓３　出土遺物　墓４　出土遺物（１）（２／３＝672）

溝56（第174・206図）

中央部に位置する、東西方向の溝である。長さ約13.5m、幅約1.2m、深さ約0.1mである。底面のレベルは東に向かって下がる。東部分は削平されており、西もその可能性がある。墓4を切っている可能性がある。遺物は出土していない。

溝58（第174・206図　図版90）

中央部に位置する南北方向の溝で、検出長約18.0mである。底面のレベルは南へと下がる。北端で北東または東方向に曲がるが、この部分には角礫の集積がみられる。その東側には同様に礫を多く含む土坑55・56が隣接しているが、この部分では溝が削平を受けて失われており、これらが溝内に位置するものか不明である。礫の集積は3箇所とも、溝と一連のものかどうか不明であるため、独立した遺構番号を付した。



第195図　墓4　出土遺物（2）（2／3）

遺物は磨滅した小片ばかりで、瓦器、瓦質脚付羽釜、土師器煮炊具、東播系須恵器鉢、白磁碗、青磁などが出土している。

井戸５（第174・201・202図　図版78・89）

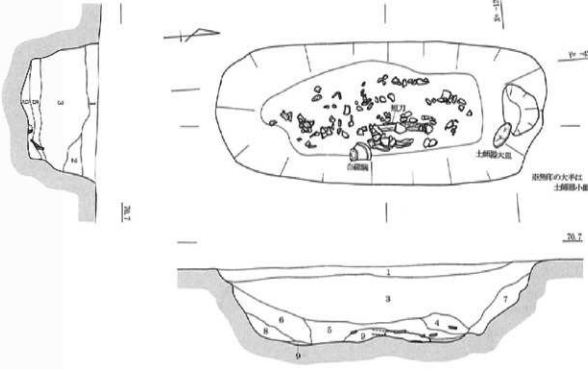
北西端部に位置し、川に接している。円形で、径約1.9m、深さ約1.6mである。西側は調査前まで使われていた水路によって削平されている。底面には巨礫が存在していた。

遺物は、瓦質羽釜、粗いミガキを施す瓦器椀などの小片が出土しているほか、漆器の破片も出土している。瓦器椀は、13～14世紀のものである可能性がある。

墓３（第174・193・194図　図版78・88・201・237）

西部に位置する。南北約1.8m、東西約0.9m、深さ約0.2mの長方形である。底面には北と南に１個ずつ角礫が置かれており、木棺をのせた棺台の可能性が考えられる。棚田造成時に削平を受けているが、調査時の側溝掘削によってさらに遺存状態が悪くなっている。骨は出土していない。

遺物は、白磁皿、土師器大皿・小皿、刀または槍先が出土している。白磁皿は側溝掘削時に取り上げてしまい、正確な位置が不明である。なお、口縁部が２箇所欠けているが、意識的にうち欠いたものかは不明である。土師器は磨滅しているため判断しがたいが、12世紀中葉～13世紀前葉のものと思われる。



1．2.5Y 6/2灰黄　粗砂まじり極細砂　Mn粒を多量に含む
2．2.5Y 5/2暗灰黄　シルトと細砂のブロック　ブロックは1cm前後
3．2.5Y 5/3黄褐　極細砂と粘土のブロック　ブロックの平均単位は2～4cm　粘土ブロックは灰白色
4．2.5Y 5/2暗灰黄　極細砂と粘土のブロック　粘土の濃度が高い
5．2.5Y 5/2暗灰黄　細砂まじりシルト　ブロックはなし
6．2.5Y 5/3黄褐　細砂とシルトのブロック　ブロックの単位は1～2cm
7．2.5Y 5/3黄褐　極細砂と粘土のブロック　ブロックの平均単位は2～4cm　粘土ブロックは灰白色
　　細砂を若干含む　3にはべてシルトブロックが少ない
8．2.5Y 6/3にぶい黄　細砂まじり粘土
9．2.5Y 6/3にぶい黄　シルト

C　(1：20)　1m

第196図　墓５　平面・断面図

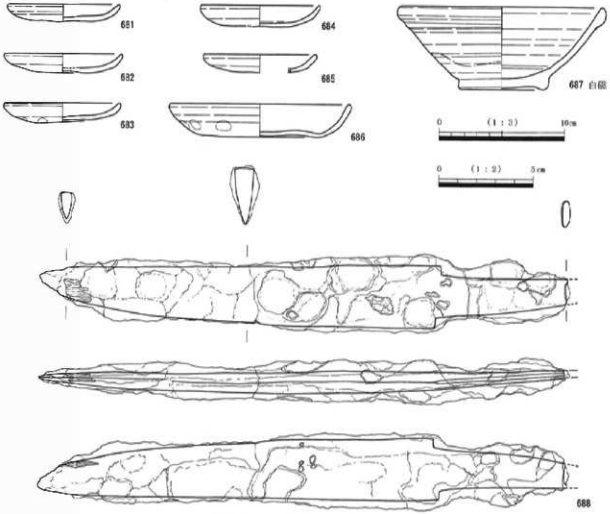
墓4（第174・193～195・208図　図版78・88・201・239）

中央部に位置する。南北約1.6m、東西約0.8m、深さ約0.2mの長方形である。溝56に切られており、遺存状況は非常に悪い。土師器大皿・小皿、鏡が出土している。鏡、土師器共に、墓壙中央やや北寄りで出土した。骨は出土していない。

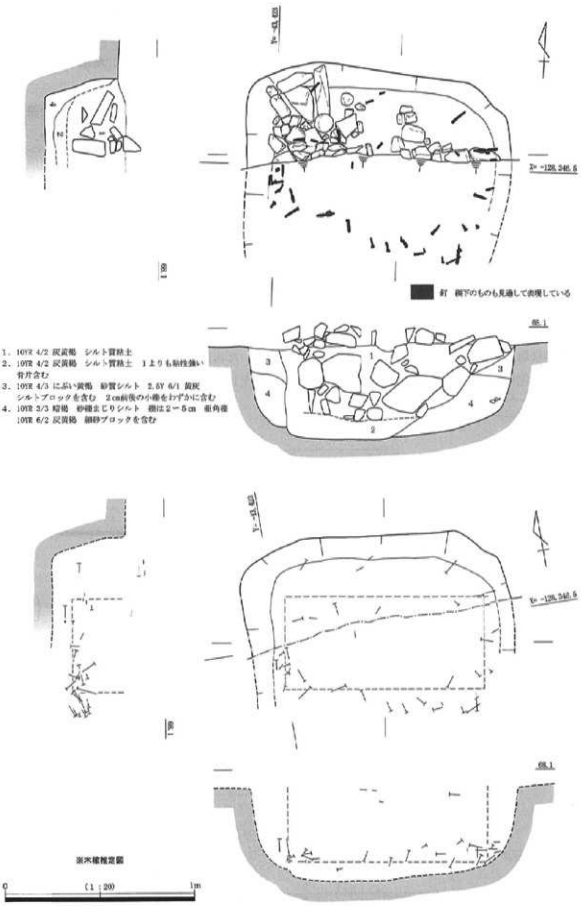
土師器皿は、12世紀中葉～後葉のものであると思われる。鏡は、双鶴と松が配される松鶴紋鏡で、両鶴は中心より向かって左に内向する。紋様としては古い系統のもので、ほりが浅く、縁は低い、といった12世紀末と考えられる要素もみられるが、界圏を意識したこじんまりとまとまっている紋様構成、花蕊座と松鶴の組み合わせなど、新しい様相もみられ、13世紀初頭のものである可能性もある。背面径11.3cmで、鋳上がりはよい。

墓5（第174・196・197図　図版89・202・237）

中央南部に位置し、南北約1.7m、東西約0.8m、深さ約0.4mの長方形である。墓壙の壁面には、掘削した際の工具痕と思われる小さな凹凸がみられた。土師器大皿1枚、小皿5枚以上、白磁碗、短刀が出土している。瓦器も出土したが、少量の細片であり副葬品ではないと思われる。短刀は底面から南北方向で出土しており、これが埋葬時に置かれた状態である可能性がある。しかし、土師器小皿は小破片で墓壙の底面近くに全体的に散乱しており、本来置かれていた状態を保っていないと思われる。土師器大皿のみが完形の状態で、北壁に張り付くような状況で出土した。土器は、墓壙埋土の上、または木棺



第197図　墓5　出土遺物（1／2＝688）



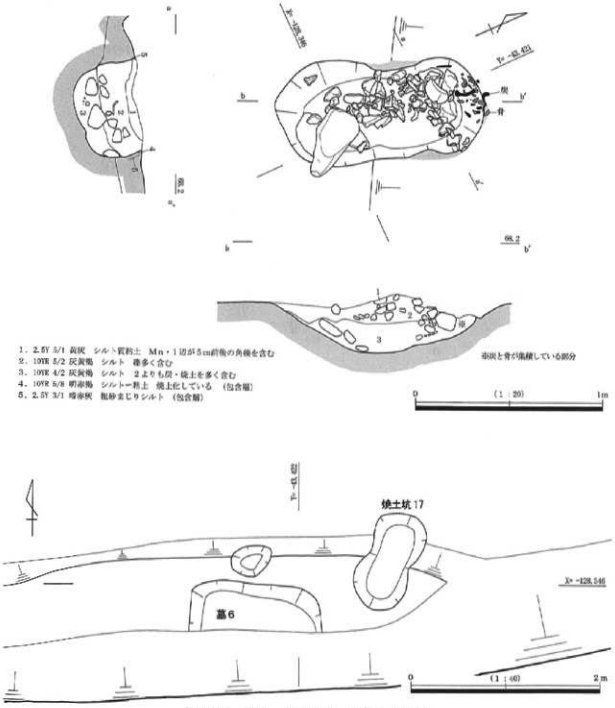
第198図　墓６　平面・断面図

が存在したとすればその上に置かれていたものが後に落ち込んだ可能性が考えられる。白磁碗には高台に欠けがあるが、欠けた後に磨滅しているようであり、副葬する際にうち欠いた可能性は低いと思われる。骨は出土していない。遺物は12世紀中葉～後葉のものと思われる。

墓６（第174・198～200図　図版89・238）

東部の南端に位置し、南北約1.0m以上、東西約1.4m、深さ約0.5mである。南部は調査地外にあたり、遺物は確認したものの、墓壙の形状、規模は不明で、被熱痕跡は確認していない。焼骨片が１点出土した。

底面付近から鉄製の釘が約40本出土した。木棺に使われていたものと考えられる。出土状況から原位



第199図　墓６　焼土坑17　平面・断面図

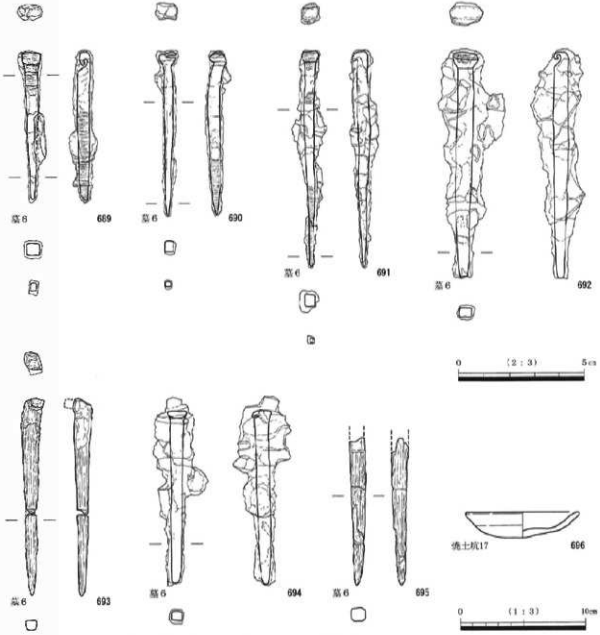
置をとどめているものが多いと思われ、木棺の規模の推定をおこなった。南北約0.5m、東西約1.1mである。

埋土には多くの角礫が含まれていた。埋土の状況からも、木棺が土圧で押しつぶされ、礫を多く含む土が墓壙内に落ち込んだことが想定される。周辺の包含層には特に礫を多く含む状況はみられない。墓の上部構造として積み石、石組みなどが築かれていた可能性がある。

遺物は、前述した釘のほかは、小片の土器のみで、受け口状口縁の瓦質鍋、須恵器甕などがみられる。瓦器、土師器も出土しているが、磨滅の著しい細片である。

骨片の鑑定結果をⅣ　第3章に掲載している。

谷筋に立地しているが、より大きな地形としては丘陵の先端部分にあたっている。東側に隣接して火葬をおこなったと思われる焼土坑17がある。墓6から出土した焼骨片は小片1点のみであり、上層にも骨片が多くみられた焼土坑17のものが混入したことも想定できる。南側が調査地外のため、これら以外



第200図　墓6　焼土坑17　出土遺物（2／3＝689～695）

にも埋葬関係の遺構が存在していることも考えられる。

土坑47（第201・202図　図版90）

北西端部に位置し、円形で、径約1.0m、深さ約0.2mである。多くの礫が入っており、礫の間から土師器、受け口状口縁の瓦質鍋の小片、鉄製品（697）が出土している。鍛造品で、鉄滓が部分的に付着している。

土坑48（第202図　図版203）

土坑47の東に隣接している。長径約0.9m、短径約0.7m、深さは約0.2mである。埋土に礫を含み、土坑47と同種の遺構であると考えられる。遺物は、受け口状口縁の瓦質鍋の小片が出土している。

土坑49（第174・202・203図　図版90）

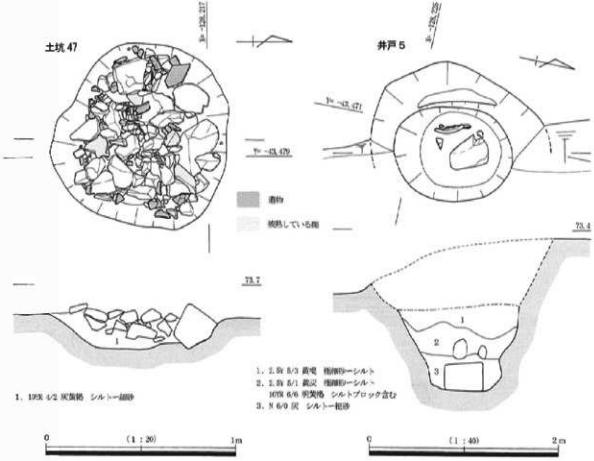
北西端部に位置し、長径約7.5m、短径約3.9mの南北に長い楕円形である。深さ約0.3mで、底面は多少の凹凸はあるものの、おおよそ平らである。角礫が入っているが、性格は不明である。溝52が東側の川2へと伸びており、川へ排水をしていたと考えられる。

遺物は、土師器皿・鍋、瓦器椀、受け口状口縁の瓦質鍋・羽釜、須恵器の小片が出土している。14世紀前後のものである可能性がある。

土坑50（第202図　図版203）

北西部に位置する不定形の浅い皿状の土坑である。東西約1.9m、南北約1.0m、深さ約0.5mである。埋土は細砂を含む極細砂で、小礫、土器小片、炭を多量に含む。基盤層は粗砂混じりのシルトである。

遺物は、楠葉型瓦器椀、回転台土師器、須恵器甕、瓦質羽釜、土師器羽釜、白磁の小片が出土してい

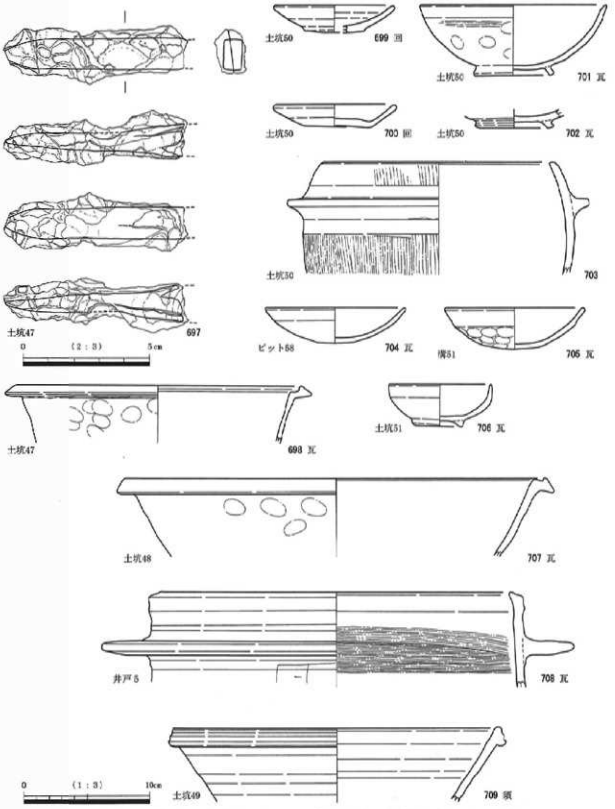


第201図　井戸5　土坑47　平面・断面図

る。11世紀後葉～12世紀前葉のものと思われる。

土坑52（第174・204・205図　図版248）

中央北部に位置し、中央と東部分に後世の棚田の段差などが存在し、大きく削平を受けていて全容不明である。南に土坑53があり、関連も想定される。



第202図　井戸5　土坑47～50　その他の遺構　出土遺物（2／3＝697）

遺物は、磨滅が著しい土師器皿・鍋、瓦器椀、瓦質脚付羽釜、須恵器、青磁などの小片のほか、石鍋片も出土している。土器は13世紀前後のものと思われる。

土坑53（第174・184・205図　図版84・90）

中央北部に位置し、南北約5.9m、東西4.2m以上、深さ約0.4mの方形の土坑である。東端は削平されているが、東北、東南のコーナーの一部までを検出していると思われる。

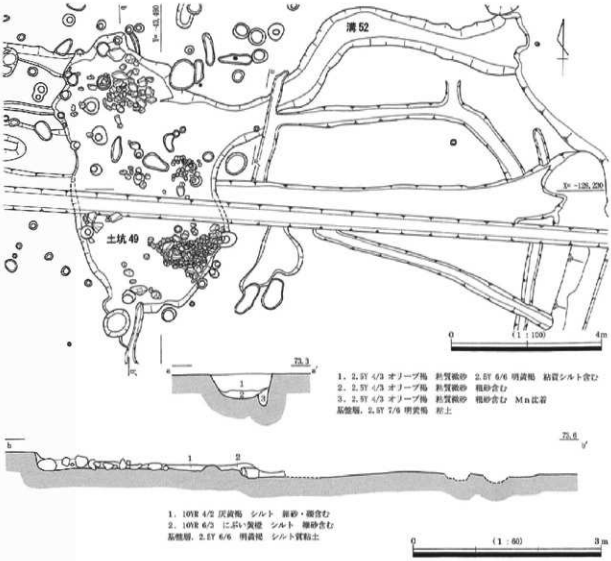
遺物は、小片のみで、口縁端部を面取りする土師器小皿、瓦器椀、土師器羽釜・鍋、瓦質脚付羽釜・甕、白磁碗などが出土している。13世紀を中心とする時期のものである。

建物88と一連のものと思われる。土坑底面には建物88の柱穴以外にもピットがみられるが、なかには、土坑埋土上から掘削されたことが土坑の断面で確認できたものがあった。土坑内の多量の礫は角礫で、集積の上面の凹凸が激しく、意識的に面を揃えているなどの状況はみられなかった。

西辺に取り付く形で溝53を検出しており、土坑との関連が想定される。

土坑54（第174・192・207図　図版203・244）

川２の西岸に位置し、川に向かって口をあけている。底面のレベルは川の方へと低くなっており、最



第203図　溝52　土坑49　平面・断面図

も深い箇所で深さ約1.2mである。土坑直下の川の肩から斜面にかけてシルトが堆積していた。

遺物は、土師器羽釜・鍋、瓦質脚付羽釜などの煮炊具が多くみられるほか、不明鉄製品、鋳造鉄製品、鉄滓が出土している。鉄滓は分析をおこなっており、Ⅳ　第4章で結果を報告している。

西から伸びてきた溝54が接続しており、川への排水機能を果たしていたと思われる。溝55も連結していた可能性がある。

土坑55（第206図　図版90）

中央部に位置する、楕円形の土坑である。角礫が集積している。東側には同様な土坑56が隣接し、西側の溝58内にも同様な礫の集積、集石2がある。遺物は、瓦器、瓦質土器、白磁などが出土しているがいずれも細片である。

土坑56（第206図　図版90）

中央部に位置し、角礫が集積している。遺物は、細片が出土したのみである。

土坑57（第210図）

東部に位置し、円形で、径約0.8m、深さ約0.3mである。埋土に炭と焼土を含む。

遺物は、土師器、黒色土器A類の小片が出土している。

土坑58（第174・208図）

南東部に位置し、北東部の削平が著しいが、やや歪な方形を呈すると思われる。東西推定3.6m、南北約3.3m、深さ約0.3mで、底面は平坦である。

遺物は、瓦器椀高台、土師器の小片が出土した。瓦器の高台は退化が始まっており、12世紀以降のものである。

焼土坑14（第174・209図）

西部に位置し、楕円形で、長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約0.2mである。調査時の筋掘りと重

第204図　土坑52　平面・断面図

なってしまい、遺存状態は悪い。壁の上部が被熱して焼土化している。遺物は出土していない。

焼土坑15（第174・210・211図　図版90・203）

東部に位置し、長方形で、長辺約9.6m、短辺約7.2m、深さ約0.2mである。壁はよく焼けしまっているが、底面は比較的弱い被熱痕跡しか認められない。壁は、シルト質粘土基盤層が焼土化したものであるが、基盤層よりやや砂を多く含む箇所が南隅部分など一部にみられる。壁にシルト質粘土を貼り付けた可能性がある。多くの遺構に切られている。

遺物は、「て」字状口縁土師器皿、瓦器椀が出土している。11世紀中葉～12世紀前葉のものと思われる。

焼土坑16（第174・210図）

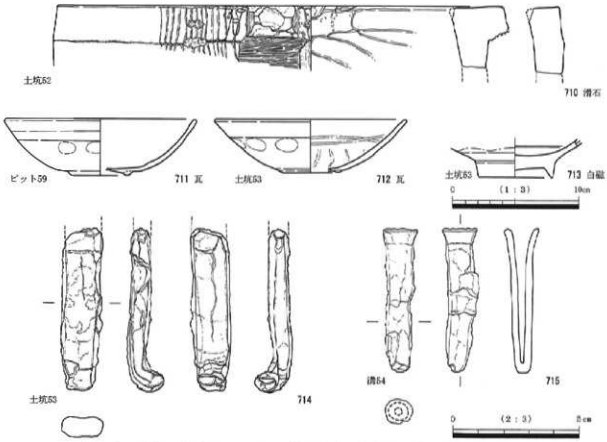
東部に位置し、隅丸方形で、1辺約0.9m、深さ約0.2mである。被熱しているが、被熱痕跡は淡く、顕著ではない。下層に炭を多く含む。遺物は出土していない。

焼土坑17（第174・199・200図　図版89）

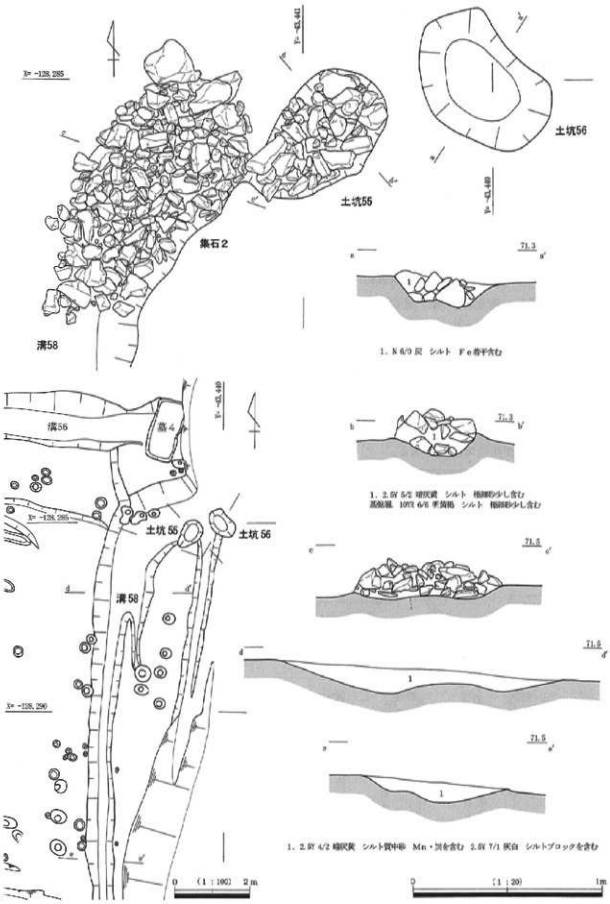
東部に位置し、南北約1.1m、東西約0.6m、深さ約0.3mの長楕円形である。北から中央部分にかけての壁は、被熱して焼土化しており、その外側は赤黒く変色している。埋土には炭、焼骨の細かい破片が含まれており、特に北端部ではまとまった量がみられた。この土坑で、火葬をおこなったと考えられるが、埋葬までおこなった火葬墓であるかは不明である。

遺物は、土師器小皿が1枚出土している。骨の鑑定結果をⅣ　第3章に掲載している。

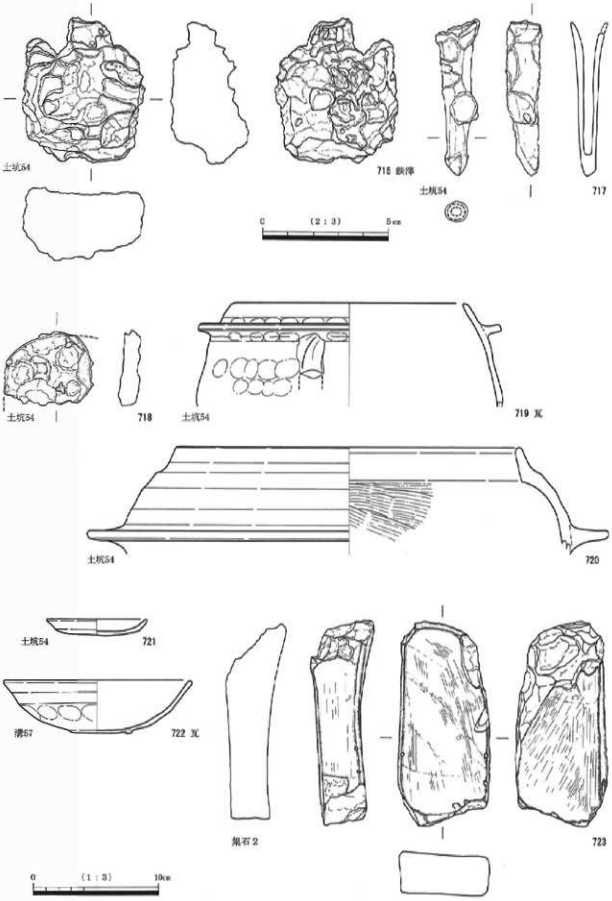
西側に隣接して木棺墓と思われる墓6が存在する。また、南側が調査地外のため、この2基以外にも、埋葬関係の遺構がある可能性もある。



第205図　溝54　土坑52・53　その他の遺構　出土遺物（2／3＝714・715）



第206図　溝58　土坑55・56　平面・断面図



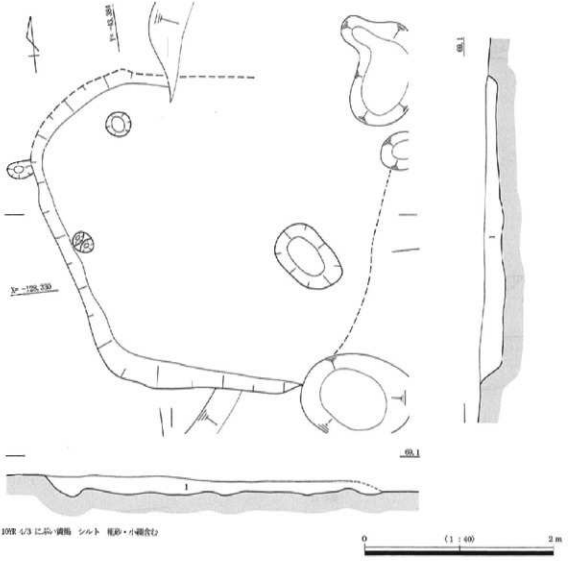
第207図　土坑54　集石2　その他の遺構　出土遺物（2／3＝716～718）

集石2（第206・207図　図版90・249）

南北方向の溝58が、北端で北東または東方向に曲がる部分に位置する。おおよそ角礫である。東側に同様な礫が集積している土坑55と56が隣接しており、関連が想定される。しかし、東側では溝が削平されているために、これらは溝内に位置したものかどうか不明である。集石2も溝と一連のものであると断定することはできない。礫中に混じって砥石が出土している。

全体的に北西から南東へと低くなる地形で、遺跡内でも等高線が密な部分である。そのため、遺構面は棚田造成の影響を強く受けている。

西部では、各棚田の東南部分のみがもとより地形が低いために削平を受けていない。北西隅を中心とする同心円状に、遺構を検出している部分と、ほとんどない部分がみられるのはそのためである。東南部の遺構分布を鑑みると、特に北西部では多くの遺構が失われたと考えられる。また、検出し得た遺構についても非常に浅いものが大半であり、削平の影響を強く受けていると思われる。特に建物89の柱穴は非常に浅いものであり、建物を検出してはいるものの、この周辺に失われた遺構が存在する可能性が高いことを考慮にいれておく必要がある。包含層は、各棚田の東南隅のごく一部分にのみ遺存していた。



第208図　土坑58　平面・断面図

丘陵先端西部は、棚田造成とそれ以降の深さ約0.1mの大型土坑群の掘削によって著しい削平を受けており、本来は遺構が存在していたとしても、そのすべてが失われた可能性がある。包含層は、南東部分と南西部分にのみ遺存していた。

東部には、南北方向の谷地形が存在し、この部分にのみ包含層が遺存していた。谷の東側では、近世作土層を除去すると、基盤層でも下層の礫層が現れる。この部分は本来、尾根状に高い地形であったと考えられ、大きく削平されて平坦になったのであろう。遺構を全く検出しておらず、失われた可能性が高い。谷部の北、西側でも遺構を全く検出していないが、棚田の段下部分にあたり、削平を受けたためであると思われる。南東端部には、包含層が比較的分厚く遺存していた。しかし、大型の攪乱坑が多数存在しており、遺存状況はきわめて悪い。

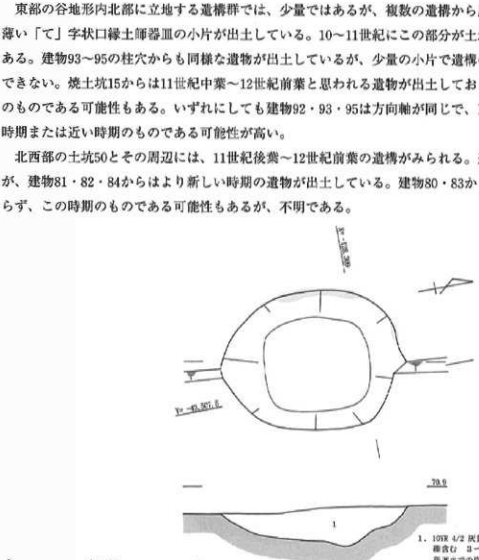
削平が著しいため、包含層、遺構共に、出土遺物は非常に少量である。

小結

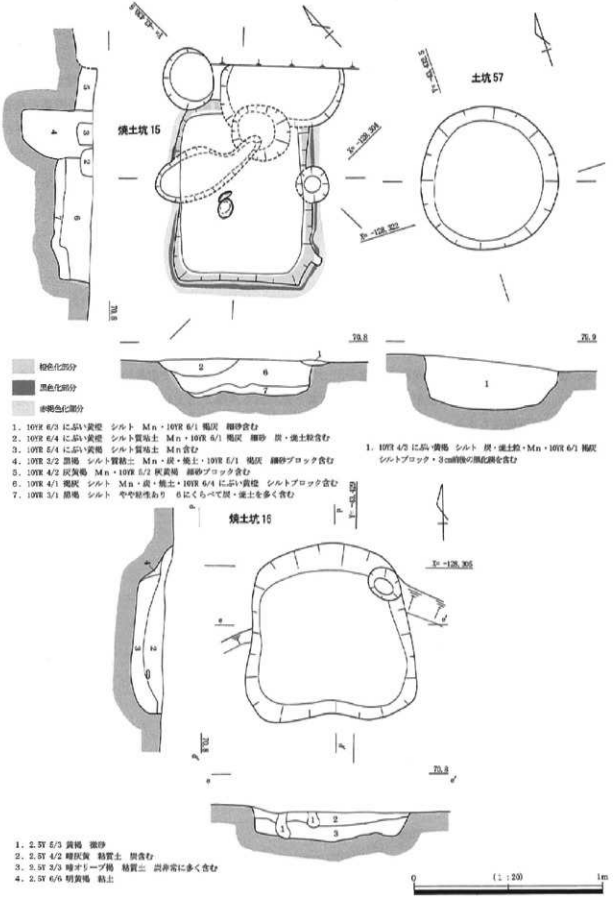
全体的に時期のわからない遺構が多いが、10～14世紀代の遺構が存在している可能性がある。

東部の谷地形内北部に立地する遺構群では、少量ではあるが、複数の遺構から黒色土器A類、器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿の小片が出土している。10～11世紀にこの部分が土地利用された可能性がある。建物93～95の柱穴からも同様な遺物が出土しているが、少量の小片で遺構の時期を決めることはできない。焼土坑15からは11世紀中葉～12世紀前葉と思われる遺物が出土しており、建物群はこの時期のものである可能性もある。いずれにしても建物92・93・95は方向軸が同じで、東辺を揃えており、同時期または近い時期のものである可能性が高い。

北西部の土坑50とその周辺には、11世紀後葉～12世紀前葉の遺構がみられる。近接して建物群があるが、建物81・82・84からはより新しい時期の遺物が出土している。建物80・83からは遺物が出土しておらず、この時期のものである可能性もあるが、不明である。



第209図　焼土坑14　平面・断面図



第210図　土坑57　焼土坑15・16　平面・断面図

ｊ域で最も広域に展開していたのは、12～13世紀の遺構である可能性が高い。北西部分に位置する建物81、中央北部に位置する建物87、東部に位置する建物96から、12～13世紀のものと思われる遺物が出土している。さらに、建物81・82・84はその構造が似ており、同時期または近い時期のものである可能性がある。建物87に近接している建物88・89は、建物87と方向軸が同じである。建物89は出土遺物がないが、建物88に伴う方形土坑53からは13世紀代のものが出土しており、これらもこの時期のものである可能性がある。ただし、柱穴から出土した遺物は少量であり、建物の時期を示すものであるかどうかは不明である。溝56・58も時期不明ではあるが、建物87・89など周辺の建物と方向軸が同じであり、家地に付属する排水や区画の機能をもつものであることも想定される。また、攪乱坑が多数あるため詳細は不明であるが、ｊ域南東部分にもこの時期の遺構が展開していた可能性がある。なお、建物88のように、竪穴を伴う建物は、東日本に多くみられ、納屋や作業場などであると考えられている。

墓３～５は、いずれも12世紀中葉～13世紀中葉のものである。これらはそれぞれ、ｊ域西端、中央、南部に位置しており、特に地形の特徴的な箇所に立地しているわけではない。散在していることから、それぞれ、建物など他の遺構群と関連して存在していた可能性も想定される。ただし、墓周辺には大きく削平されて全く遺構を検出し得てない部分が多くみられ、また、検出し得た遺構も時期を確定できるものがほとんどなく、そのセット関係を確認することは困難である。

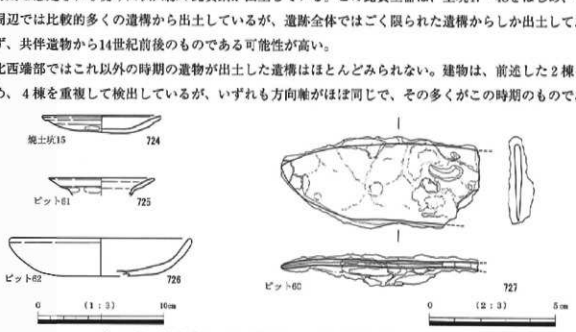
墓３周辺は、南西側のｉ域に位置する以外のほとんどの部分が、削平を受けている。最も近い建物は、85・86であるが、時期が不明である。

墓４の周辺では、東南側は全く遺構を検出しておらず、北東側も削平によって失われた遺構が多いと思われる。北西側に建物87～89が存在しており、これらと関連がある可能性はある。

墓５周辺では、北側を除いて、南側を中心に、全体的に削平を受けている可能性がある。北側に建物90・91、南東に建物98が位置しているが、時期が不明である。

13～14世紀の遺構群は、北西端部に展開している。北、東側が川２に面し、西側は約2.4mの高低差をもつ崖が迫っている地形である。建物74から14世紀以降の遺物が出土している他、建物78からも同様な時期と想定される受け口状口縁の瓦質鍋が出土している。この瓦質土器は、土坑47・48をはじめ、この周辺では比較的多くの遺構から出土しているが、遺跡全体ではごく限られた遺構からしか出土しておらず、共伴遺物から14世紀前後のものである可能性が高い。

北西端部ではこれ以外の時期の遺物が出土した遺構はほとんどみられない。建物は、前述した２棟を含め、４棟を重複して検出しているが、いずれも方向軸がほぼ同じで、その多くがこの時期のものであ

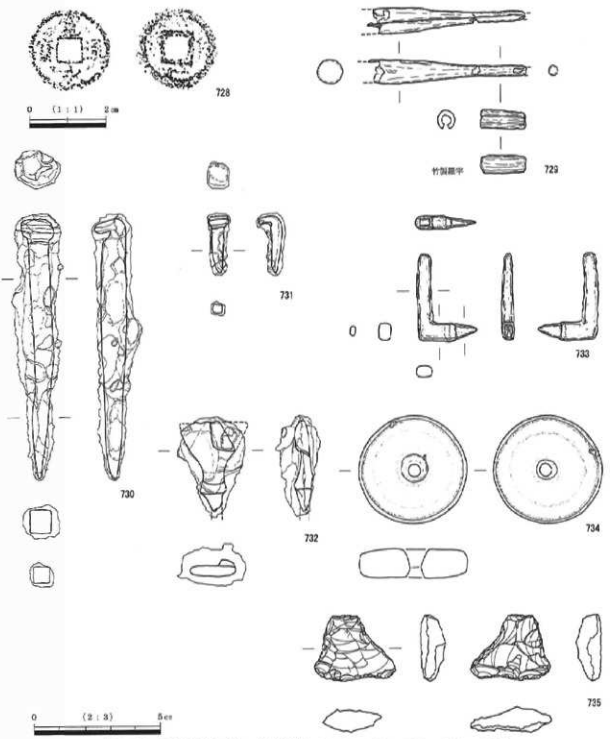


第211図　焼土坑15　その他の遺構　出土遺物（２/３＝727）

る可能性が高いと考えている。近くの井戸５、土坑49からもこの時期の遺物が出土している。

また、東部の谷地形に立地する墓６からも瓦質鍋が出土しており、この遺構もこの時期のものである可能性がある。他の墓３墓とは、地形的にみて家地から離れた立地であると思われること、火葬をおこなった焼土坑17が隣接していることなどが異なっている。他に、著しい攪乱を受けているため本来の状況が不明ではあるが、ｊ域南東部でも13～14世紀の遺物が少量ではあるが出土している。

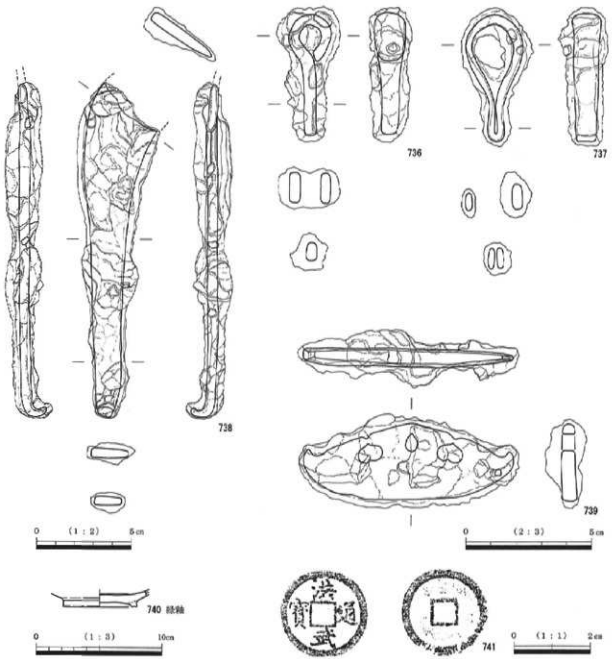
建物は、全体的に時期が明確ではない。なかでも建物97は、方形掘り方の柱穴をもっている可能性があり、遺跡全体を考える上でもその時期は興味深いが、不明であるといわざるを得ない。丘陵上西部地



第212図　近世作土層等　出土遺物（２／３＝729～735　１／１＝728）

区f域の建物45などと関係がある可能性を指摘するのみである。

j域の北西側はi域、南西側は、深さを増した川1を挟んでf・g域で、ともに11～13世紀の遺構が展開している。北側は、これも深さを増した川2を挟んでo～q域で、様相を異にする遺構群が展開している。



第213図　包含層　出土遺物（1/2＝738　2/3＝736・737・739　1/1＝741）

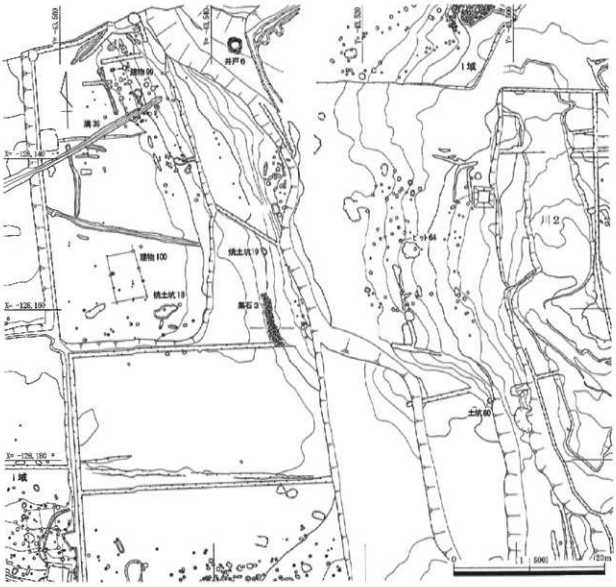
第４項　ｋ域（付図１・５・15）

丘陵上中部地区の北東部である。東側に川２があり、地形はこれに向かって低くなる。北側は調査地外である。西側はｈ域で、南側がｉ域、川２を挟んで北東側が１域、東側がｎ域である。

層序

包含層は、西部の地形が高い部分では北部分にのみ、東部の川沿いの低い部分では各棚田の東端部分にのみ、遺存していた。ほとんどの箇所では、近世以降の作土層を除去すると基盤層上面で、ここで遺構を検出している。包含層は、多くの部分では１層であるが、ｋ域北東部、川２の屈曲部南側に隣接する部分にのみ、中世のものと思われる包含層が、２層あった。ただし、遺物はほとんど出土しておらず、上下層とも詳細な時期は不明である。

包含層が２層あった部分では、上層の上面で石組みの溝59を、下面で土坑などを検出しているが、これらは同一面に帰属すると考えられる。また、この部分では、下層を除去した、基盤層上面でも遺構を検出しており、これらはより古い面に属するものと思われる。



第214図　ｋ域　平面図

棚田造成時の削平によって、包含層が2層存在していた範囲を正確に知ることはできないが、おそらく川沿いの地形の低い部分のみであったと思われる。西側の高い部分は、遺跡内の多くと同様、本来より包含層が1層のみであったと思われる。ただし、包含層が2層存在する部分と、1層のみの部分の層位的な関係は不明である。

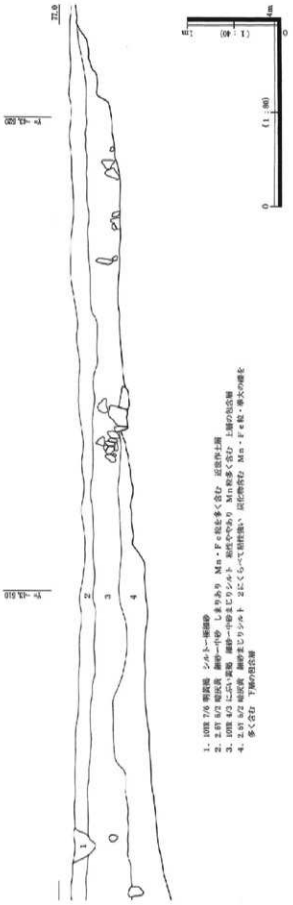
各遺構の説明は、明らかに上位の遺構面に伴う遺構群と、その他の遺構群に分けておこない、前者を面1、後者を面2と呼ぶこととする。

面1

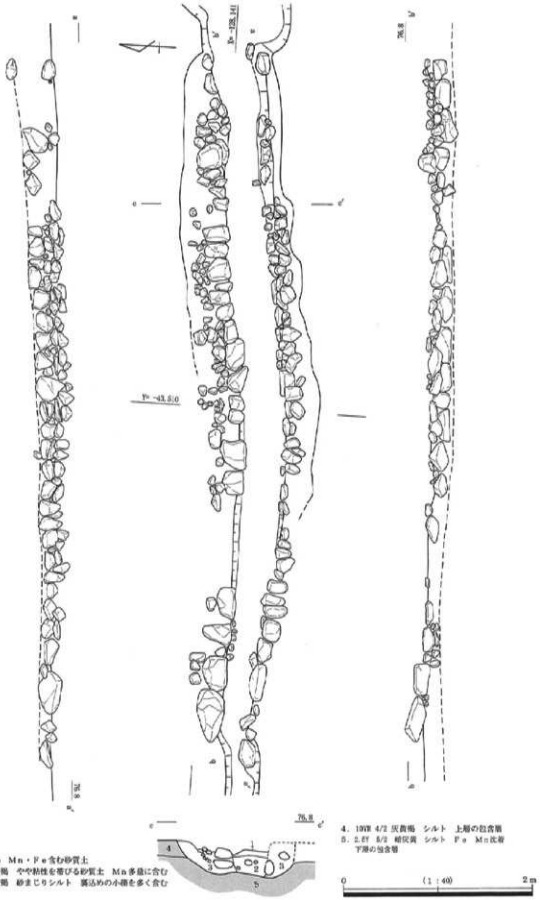
溝59（第215・217図　図版93）

東部に位置する。上層の包含層上面で検出した東西方向の石組みの溝である。検出長約15.0m、幅約0.3m～0.4m、深さ約0.4mである。西部分は包含層が遺存しておらず、削平されて失われたと考えられる。溝を掘削して両側面に礫を積み、裏込めに小石を入れて埋め戻し、石組みの溝を築いている。礫は、北側で小口積み、南側で礫の長辺を縦にして壁に立て掛けている。底面は素掘りのままである。川

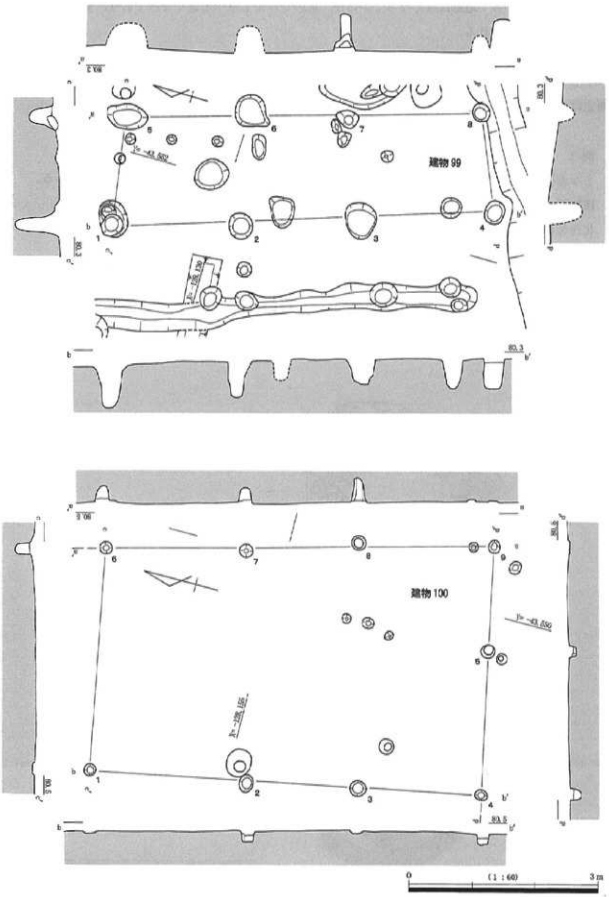
第215図　k域　面1　平面図



第216図　X＝－128,138.800ライン　断面図



第217図　溝59　平面・断面・立面図



第218図　建物99・100　平面・断面図

のある東側に向かって地形は低くなっているが、底のレベルも東へと低くなっており、東側へ排水をおこなっていたと思われる。

遺物は、瓦質羽釜などの小片が出土したのみである。

下層の包含層を除去した基盤層上面では、素掘りの溝を検出している。形状、方向がやや異なるため断定はできないが、石組みの溝の前身である可能性がある。

面2

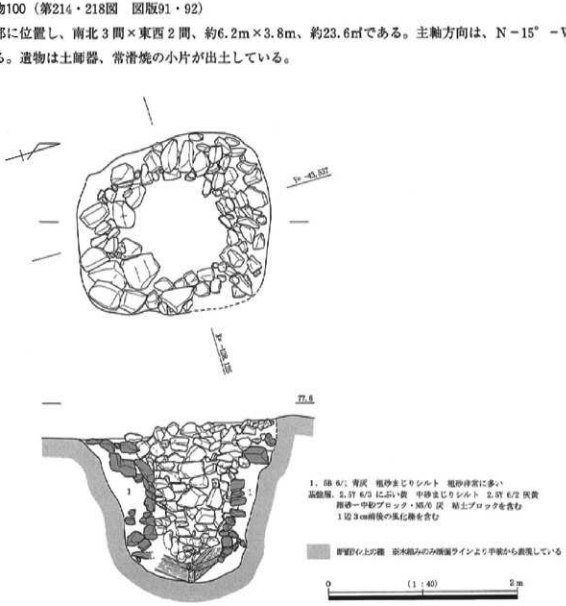
主な遺構に、建物2棟・井戸1基・焼土坑2基があり、他に、土坑・ピット・集石などがある。

建物99（第214・218図　図版91）

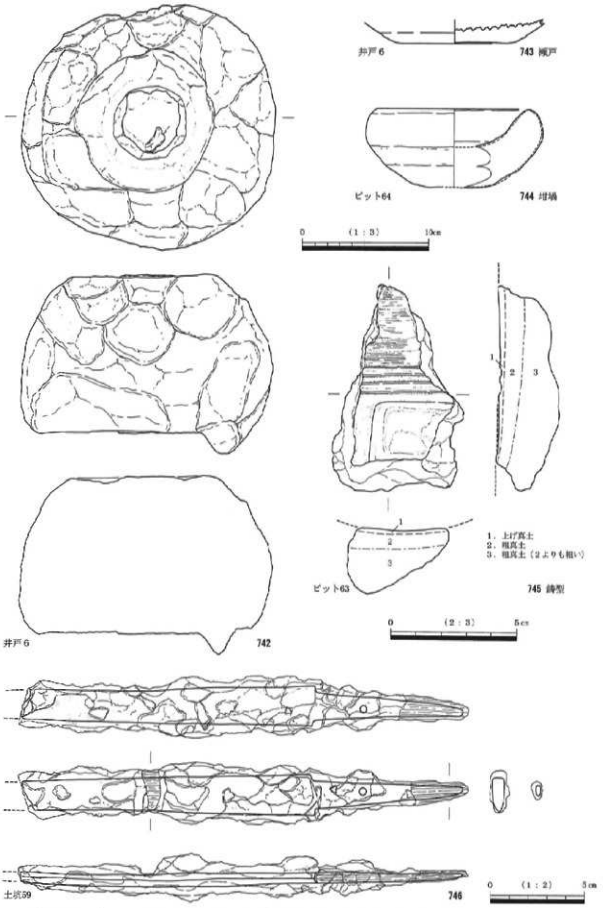
北西部に位置し、南北3間×東西1間、約5.9m×1.6m、約9.4㎡である。主軸方向は、N－18°－Wである。遺物は、瓦器、土師器、瓦質土器の小片が出土している。

建物100（第214・218図　図版91・92）

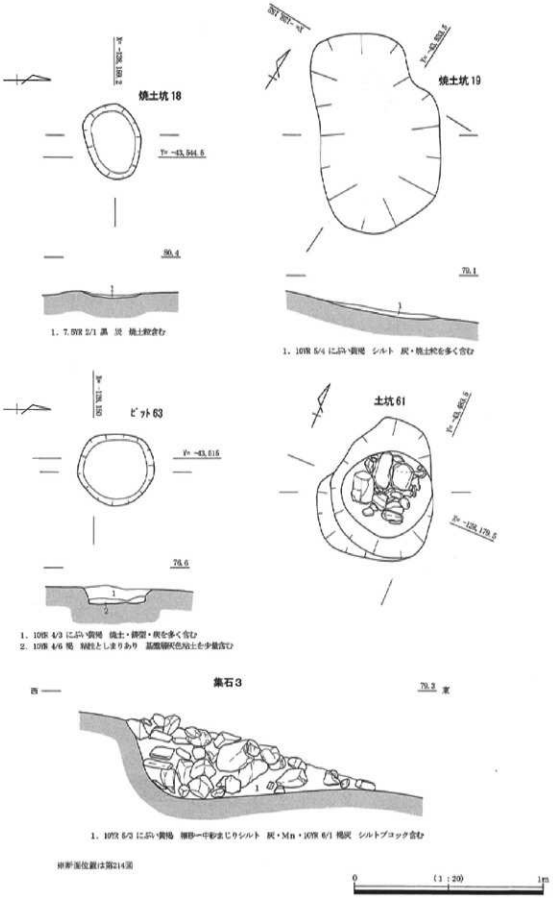
西部に位置し、南北3間×東西2間、約6.2m×3.8m、約23.6㎡である。主軸方向は、N－15°－Wである。遺物は土師器、常滑焼の小片が出土している。



第219図　井戸6　平面・立面図



第220図　井戸6　ピット63・64　その他の遺構　出土遺物（1/2＝746　2/3＝745）



断面位置は第214図

第221図　ピット63　土坑61　焼土坑18・19　集石3　平面・断面図

井戸6（第214・219・220図　図版91・93・203・251）

北部に位置し、石組みで底面には木枠がみられた。隅丸方形で、1辺約2.0m、石組みの内径約1.0m、深さ約1.7mである。川2の埋土上から掘削されている。ただし、川2の地形が完全に埋没するのは、この井戸をも覆う、礫混じりシルトの堆積によってである。井戸の存在した時期には、水量があったかどうかは不明であるが、川筋の地形は残っていたと思われる。

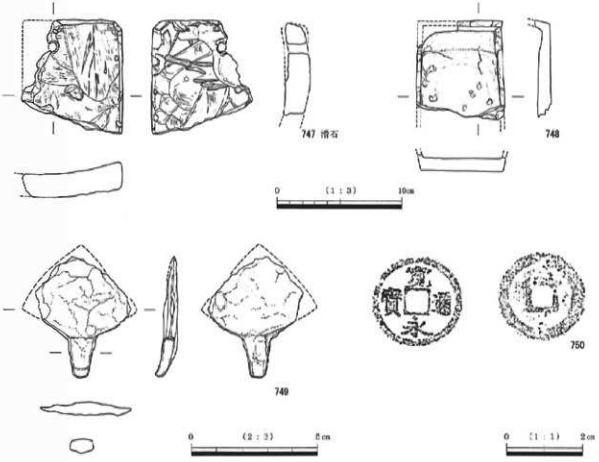
木枠は、幅約15cmの板3枚を「コ」字状に組んでいる。北東辺と南東辺の板の関係は、端にあわせて置いただけであるが、南西辺と南東辺の板では、南西辺の板に切り込みを入れ、南東辺の板を上からはめ込んでいた。ただし、北東辺には、補助するように板の外側に細い丸太を斜めに置き添えていた。北西側には板が存在しない。井戸は川筋に築かれているが、北西は上流側にあたり、湧水する方向であったと思われる。湧水方向に口を開けておき、周囲には水を溜めておくために枠を入れたのであろうか。

掘り方、石組み部分の平面形も方形に近い。石組みには五輪塔の空風輪が1点転用されていた。石組みに組みやすくするためであろうか、下部、側面が再加工されている。側面は一部の丸みが若干つぶされた程度であるが、下部は大きくカットされている。

遺物は、中層から瀬戸焼の卸目皿（743）、中～下層から瓦器椀が出土している。13～14世紀のものである。

ピット63（第220・221図　図版243）

西部に位置し、円形で、径約0.4m、深さ約0.1mである。埋土に焼土、炭を含む。鋳型（745）が出土している。



第222図　近世作土層等　出土遺物（2／3＝749　1／1＝750）

ピット64（第214図　図版204）

ピット63の南西に隣接する。径約0.4m、深さ約0.3mの小土坑である。埋土に焼土、炭を含む。坩渦（744）が出土している。

土坑60（第214図　図版204）

南東部に位置する。東側が削平されているが、方形に近い平面形であったと思われる。最大長約0.7m、深さ約0.3mである。埋土に焼土、炭を含む。遺存部分から遺物は出土していない。

土坑61（第221図）

南東部に位置し、円形で、径約0.7m、深さ約0.2mである。小礫を含む。遺物は出土していない。

焼土坑18（第214・221図　図版93）

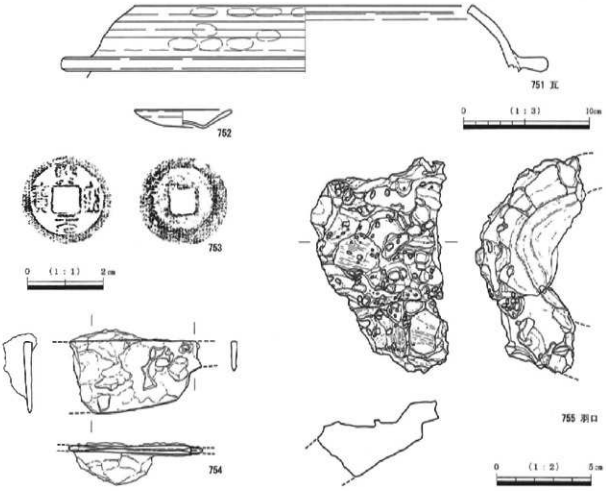
西部に位置し、長径約0.4m、短径約0.3m、深さ0.03mの楕円形であるが、削平が著しく、遺存状況が非常に悪い。被熱痕跡は認められるが、非常に弱いものである。遺物は、出土していない。

焼土坑19（第214・221図　図版91）

西部に位置し、長径約1.1m、短径約0.6mの楕円形で、大きく削平されている可能性がある。底面が被熱して焼土化している。遺物は出土していない。

集石3（第214・221図　図版93）

東側の川2に向けて地形が低くなっていく部分に立地し、西の地形の高い方を削り込んで屑をつくりだし、土とともに多量の礫を入れている。南北約7.4m、東西約1.4mで、長軸は南北方向の等高線に



第223図　包含層　出土遺物（1/2＝754・755　1/1＝753）

沿っている。土留めなどの機能が考えられるが、この部分はゆるやかな斜面であるため、その意義については疑問が残る。

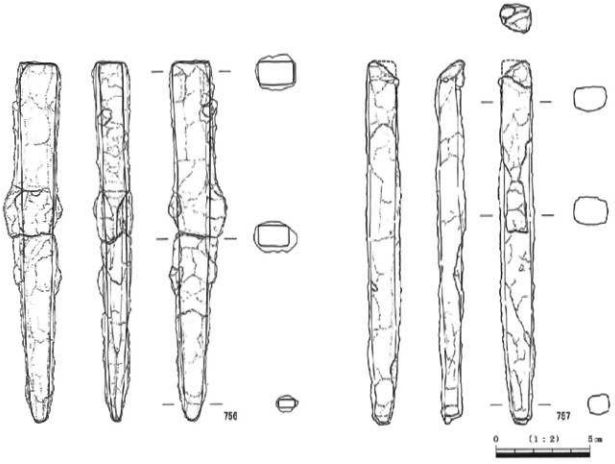
遺物は、瓦質脚付羽釜、須恵器甕、土師器鍋、玉縁口縁の白磁碗の小片が出土している。

小結

全体的に非常に激しい削平を受けており、失われた遺構は多いと思われる。出土遺物も非常に少なく、時期不明の遺構がほとんどである。唯一時期がある程度わかるのは井戸6で、13～14世紀のものである。

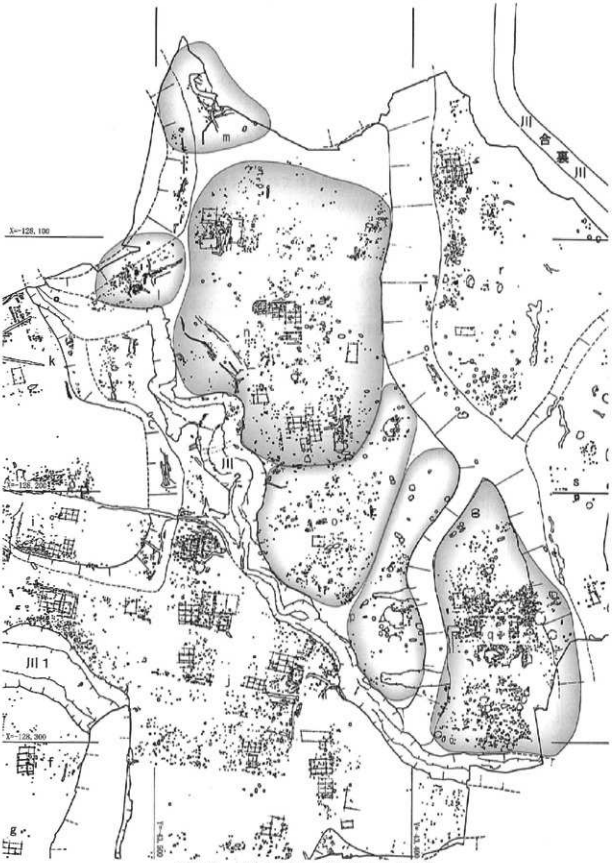
西部の地形の高い部分に立地する遺構群は、地形的にみると、西側に隣接しているh域、南西に隣接しているi域北部と関連がある可能性がある。溝39は、h域とこのk域にまたがっている。ただ、k・h・i域ともに、隣接する部分が特に大きく削平されており、その詳細な関係は不明である。

溝59など、面1の遺構群は、全くその時期が不明である。ただ、遺跡全体をみると、礫を用いて築いた遺構は、比較的新しい時期に属するものが多い。北側に隣接する丘陵東部地区l域には礫を用いた遺構群が展開しており、14～15世紀の時期のものであると思われる。推測ではあるが、これらと同様な時期である可能性もある。755は、東部の低い部分の包含層から出土した鋳造用羽口である。図示はできなかったが、西部の地形の高い部分からも、炉壁片、鉄滓が出土している。焼土の出土もみられ、鋳造作業に関連する空間であったことも想定される。ただし、関連遺構は確認していない。



第224図　包含層　出土遺物（1/2）

第3節　丘陵上東部



第225図　丘陵上東部　全体図（1：1,500）

第１項　ｌ域（付図５・15）

丘陵上東部地区の北西部にあたる。南東に向かって徐々に低くなる地形である。南西には川２があるが、本来より非常に浅い上に、削平を受けて輪郭すら残っていない範囲も広い。北西は調査池外で、一段高い棚田の端に里道が通っていた。東側がｎ域で、南西側が川２を挟んでｋ域である。

溝60（第226・227図　図版103）

南北方向の石組みの溝である。長さ約3.8m、幅約0.2mである。礫の比較的平らな面を溝の内側に向けて並べている。底面には礫は置かれていない。北端がやや東に振れているが、北側に位置する集石４との関係は不明である。遺物は、出土していない。

溝61（第226・227図）

等高線に沿って伸びているが、南西部は屈曲して南北方向になっている。削平され、全形は不明である。深さが約0.3m～0.4mである。埋土は水成堆積である。遺物は出土していない。

溝62（第226図）

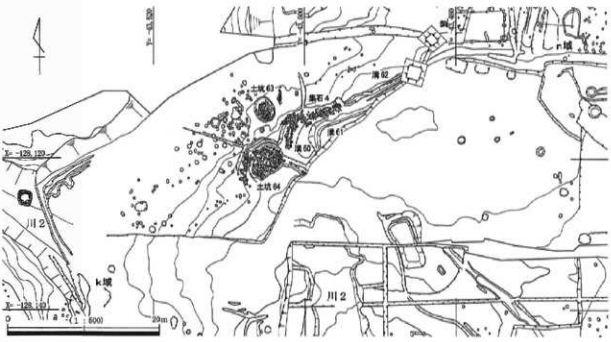
等高線に沿って伸びており、残存長約8.6m、幅約0.9m、深さ約0.2m～0.3mである。削平によって全形は不明である。埋土は水成堆積で、溝61と共に排水機能を果たしていたと思われる。遺物は出土していない。

土坑63（第226～228図　図版103）

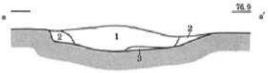
長径約3.4m、短径2.7mの楕円形で、深さ約0.4mである。多量の礫が含まれ、出土状況から廃棄されたか、土坑を埋め戻す際に入れられたと考えられる。礫群を除去した土坑底面では窪みがみられ、羽口が出土した。遺物は、瓦質羽釜、陶器などが出土している。

土坑64（第226～228図　図版103・204）

径約3.0mの円形で、西側の地形の高い部分からの深さ約0.8m、東側からの高さ約0.3mである。底面と壁の一部には40cm前後の角礫を敷いている。土坑の肩は、地形がやや高い北西部分では３段、西部分では２段になっている。西側の段部分には礫が集積しており、土坑の南端からはみ出すように南西へ

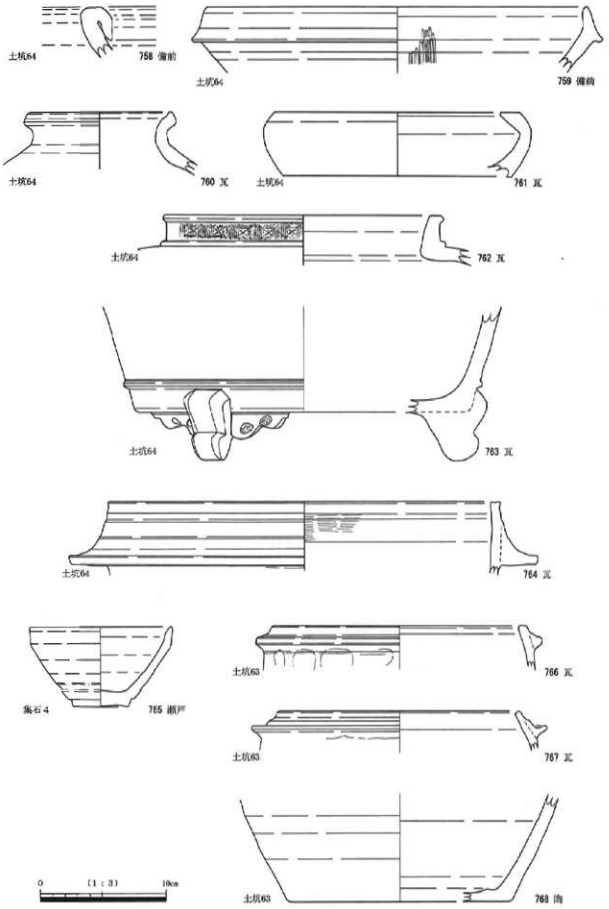


第226図　ｌ域　平面図



1．褐灰　1辺10cm前後の礫　礫間は7.5Y 5/1 灰　粘土
2．7.5Y 5/1 灰　粘質シルト　φ1cm前後の小石をわずかに含む
3．5Y 5/2 灰オリーブ　粘土
基盤層．10YR 6/6 明黄褐　小礫まじり粘質土　小礫は1辺3cm前後

第227図　溝60・61　土坑63・64　集石4　平面・断面図



第228図　土坑63・64　集石4　出土遺物

と続いている。礫は平らな面を上面に揃えている。埋土は水成堆積で、水に関わる施設であったと考えられる。

礫を取り除くとその部分が溝状になっており、溝を掘削して礫を据えたようである。東側には南東へと伸びていく溝が接続している。溝の全形は削平を受けて不明であるが、等高線に直交して地形の低い方へと伸びており、土坑からの排水を担っていたと考えられる。

遺物は、土師器鍋、瓦質火鉢か風呂・羽釜・脚付羽釜、備前焼甕・擂鉢などが出土している。15世紀のものがみられる。

集石4（第226～228図）

南東に向かって緩やかに下がる地形に、等高線に沿って礫を集積している。北東部分では図化する前に数点の礫を外してしまった。

遺物は、東播系須恵器鉢、瓦質羽釜、瀬戸焼褐釉天目椀などが出土している。14～15世紀のものと思われる。

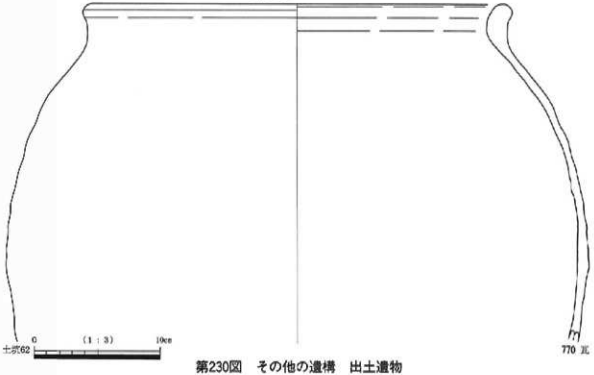
第229図　近世作土層　出土遺物

包含層は、遺構を検出し得た範囲の南東部にのみ遺存していた。k域の包含層との層位関係が問題となるが、不明であるといわざるを得ない。周辺部は削平が著しく、遺構が失われた可能性が高い。

小結

遺物は遺構からも包含層からも少量しか出土しておらず、時期不明の遺構がほとんどである。ある程度時期がわかるのは土坑64、集石4のみで、14～15世紀の遺物が出土している。

時期は不明であるが、柱穴である可能性をもつピットもみられる。



第230図　その他の遺構　出土遺物

第２項　m域（付図４）

調査地の最北端である。調査地外の西側はさらに高い地形で、東側は谷となっている。南側はｎ域である。主な遺構に墓２基・土坑がある。

墓７（第231～233図　図版104・105・205・240・242）

西寄りに位置する。南北約1.5m、東西約0.8m、深さ約0.3mの長方形で、北西と北東部分に張り出している部分がある。

遺物は、土師器大皿・小皿、鉄鏃、火打ち金、刀子が出土している。土師器皿は北西部分の張り出し部がとりつく箇所からまとまって出土している。12世紀後葉～13世紀前葉のものと思われる。金属製品は出土位置が不明で、火打金と刀子が錆びて接着した状態で出土している。

墓８（第231・234・235図　図版104・105・204・240・242）

東部に位置し、南北約2.0m、東西約1.1m、深さ約0.2mである。底面付近から鉄製の釘が出土した。出土状況から、木棺に使われていたものと思われ、原位置を保っているものが多いと考えられる。特に頭を下にして垂直に立っているものは、底板と側板をとめていたものであろう。釘の位置から木棺の規模を推定すると、長辺約0.8m～0.9m、短辺約0.6mである。断面でも木棺痕跡を確認している。木棺痕跡より外側の埋土はブロック状に分層でき、木棺を埋め戻した際の状況を示していると思われる。

第231図　m域　平面図

副葬品は、土師器大皿が２枚、小皿が９枚またはそれ以上、短刀である。墓壙内北西よりの底面に、まず南北方向に短刀を置き、その上に正置の状態で土師器皿を並べていた。短刀は切先が南、刃部が東向きである。土師器は、北端に大皿２枚を重ね、その上にさらに小皿２枚を並べ、以南はあたかも短刀を覆うように小皿を並べている。想定される木棺の位置にこれらを重ねると、木棺の北東隅から東辺に沿っている。土葬で、頭部を北に向けて埋葬したと仮定すれば、頭部の東側に副葬品を南北に並べたと考えられる。12世紀中葉～後葉のものと思われる。

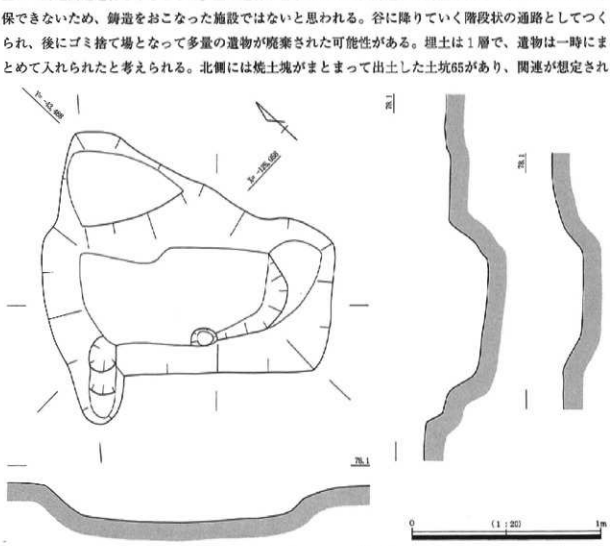
土坑65（第231・236図）

東西約2.6m、南北約1.4m、深さ約0.1mで、東端は、谷地形に続いている。焼土片がまとまって出土した。一部に炉壁と確認できるものがみられ、他の焼土塊も炉壁片である可能性が高い。南には鋳造関係の遺物が多量に出土した土坑66があり、関連が想定される。

遺物は、炉壁片と焼土のみである。

土坑66（第231・236～239図　図版104・205～207・244・245）

東側の調査地外は谷地形となっており、これに向かって開口する階段状の掘り込みである。東西に長く、約6.8m、上端幅約1.1m～3.8m下端幅約0.3m～0.6m、西端と東端の高低差は約1.9mである。埋土には鋳造関連遺物を中心とした多量の遺物が含まれていた。鋳造炉や鋳型を据えつけるスペースは確保できないため、鋳造をおこなった施設ではないと思われる。谷に降りていく階段状の通路としてつくられ、後にゴミ捨て場となって多量の遺物が廃棄された可能性がある。埋土は１層で、遺物は一時にまとめて入れられたと考えられる。北側には焼土塊がまとまって出土した土坑65があり、関連が想定され



第232図　墓７　平面・断面図

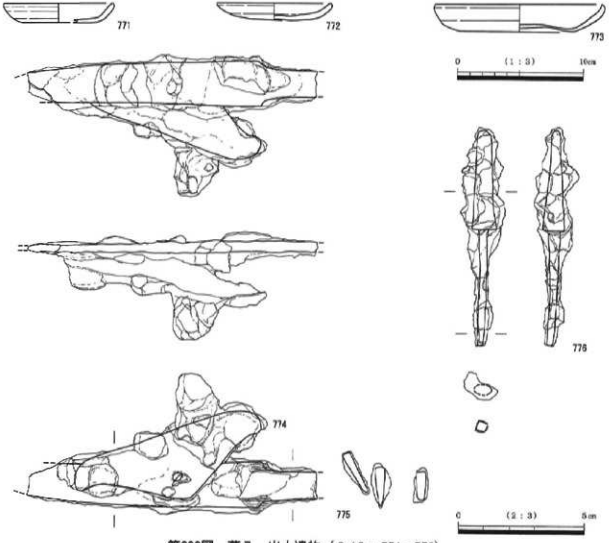
る。遺物は、鋳型、鋳造用炉壁、湯玉状鉄製品、羽口、ガラス質滓など多量の鋳造関連の遺物が出土したほか、土師器皿・鍋・甕、瓦器皿・椀、白磁碗などが出土している。ほぼ同時期と思われるものばかりで、12世紀中葉～後葉のものと思われる。

西部の地形的に高い部分から北東の谷に向かって下がっていく地形である。現況では南北に長い棚田に造成されていたが、包含層は、造成時に削平を免れた各棚田の東部のごく一部分にのみ遺存していた。本来は比較的等高線が密な地形であるために、造成の影響を強く受けている。遺構をほとんど検出していない部分が多いが、削平によって失われた可能性が高い。ただし、本来より遺構が希薄であった可能性もある。遺構、包含層ともに出土遺物は多くはない。

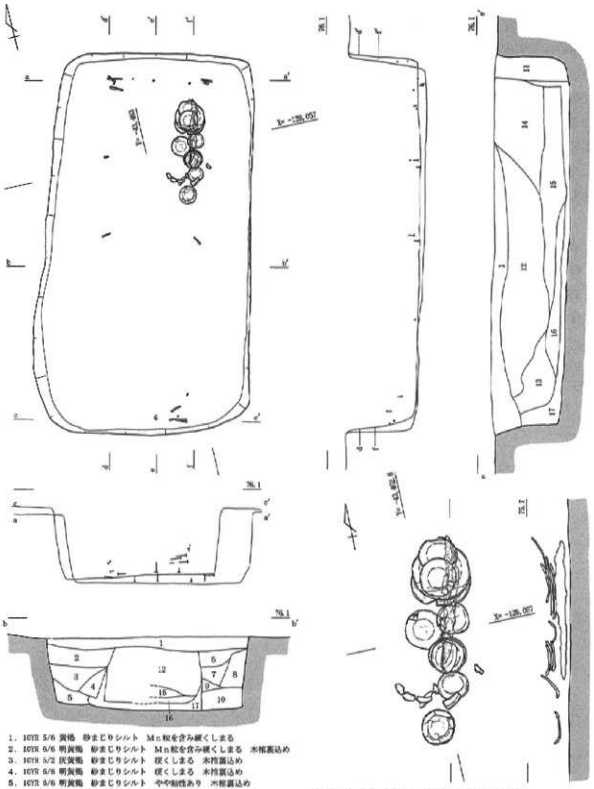
小結

特徴的なのは、墓が2基存在することと、鋳造関連の遺物が多く出土していることである。

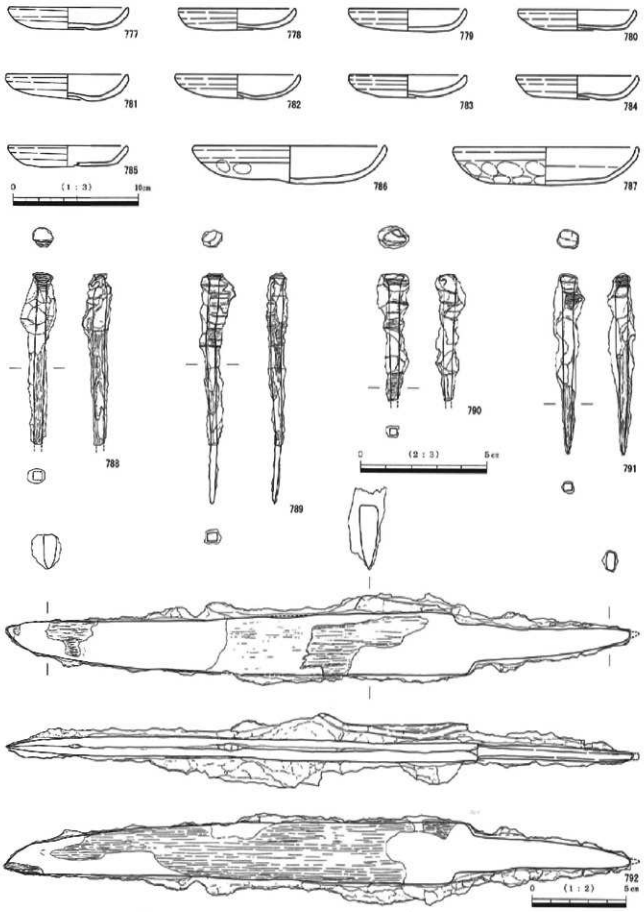
墓7と8は、7の方がやや新しい様相であるものの、ほぼ12世紀中葉～13世紀前葉のもので、丘陵上中部にある墓の多くと同様な時期のものである。中部では、墓の立地と分布状況、また詳細は不明であるが他の遺構の分布状況などから、建物など他の遺構と関連して存在していることを想定している。し



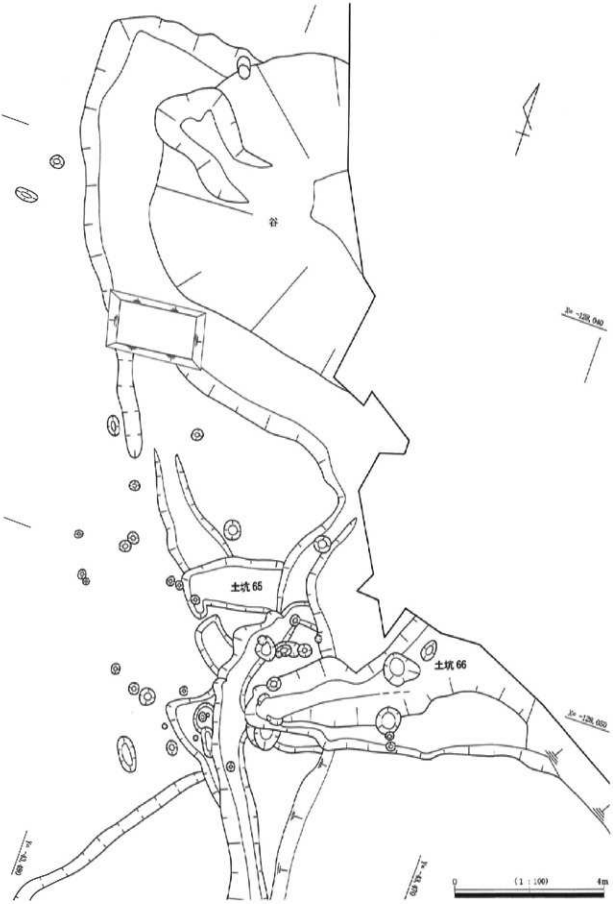
第233図　墓7　出土遺物（2／3＝774～776）



第234図　墓８　平面・断面図



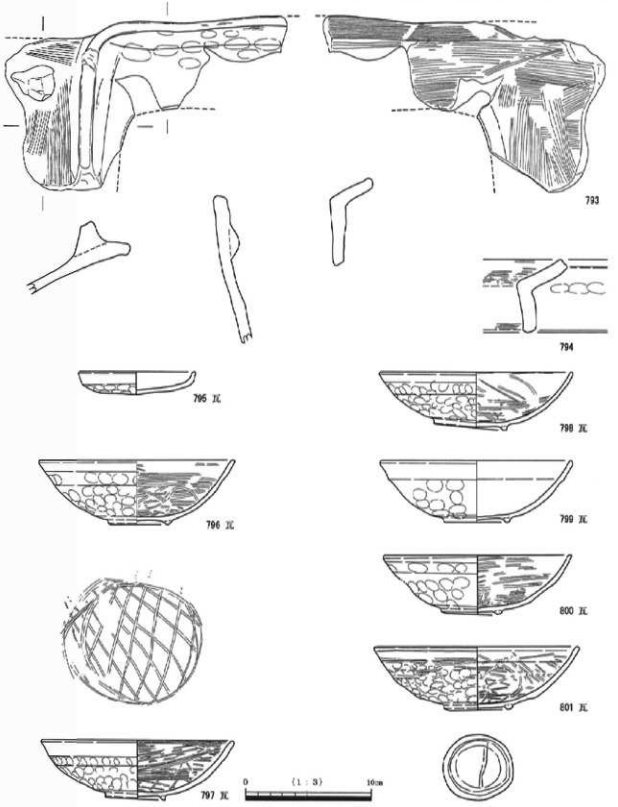
第235図　墓8　出土遺物（2/3＝788～791　1/2＝792）



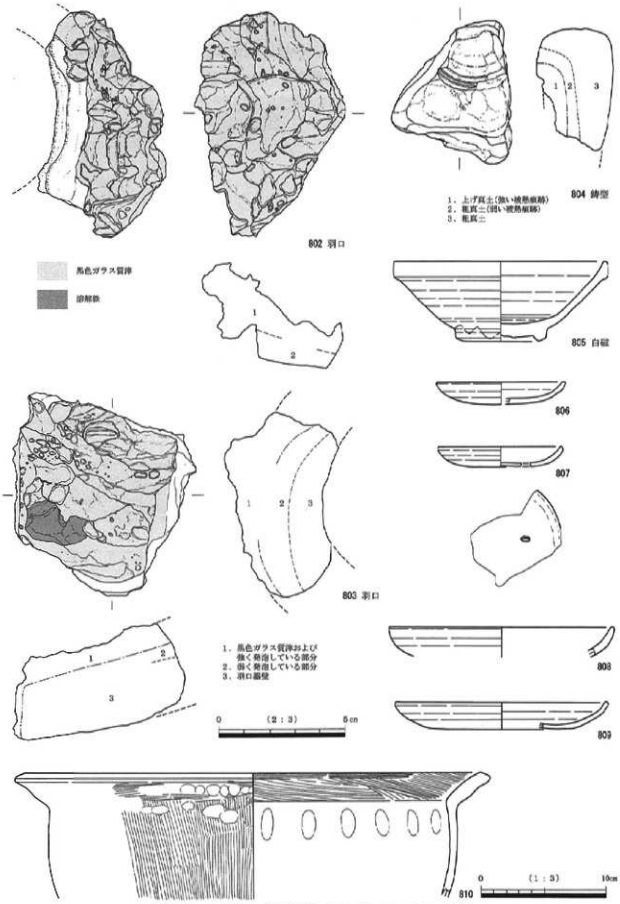
第236図　土坑65・66周辺　平面図

かし、m域では削平が著しいため、それを検証することは、中部地区以上に困難である。本来より遺構が希薄な箇所であったとすれば、家地から離れた、集落の外れに立地していたことも想定される。

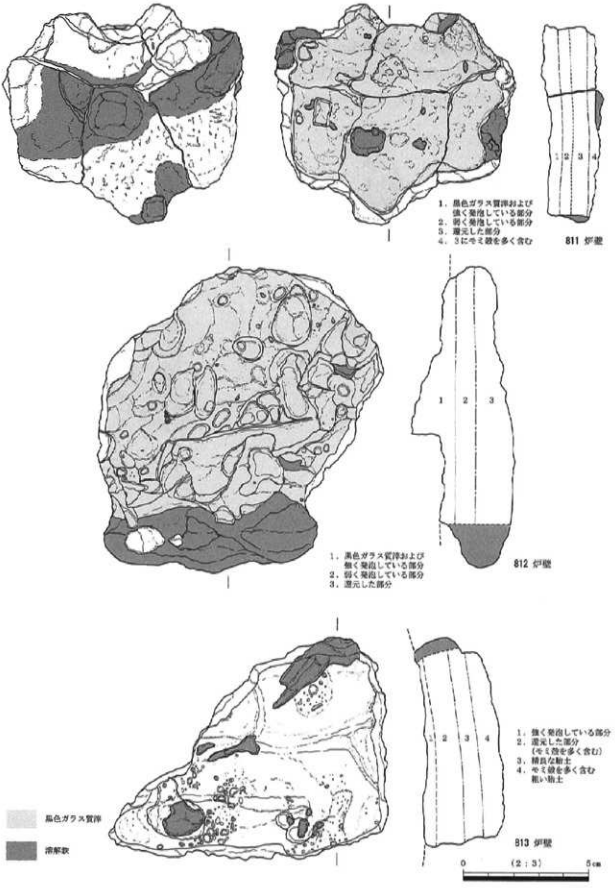
鋳造用羽口、湯玉、炉壁などの鋳造関連遺物が、土坑66、北東の谷地形部分、包含層から多量に出土している。明確な遺構を確認していないが、この部分もしくは近い場所で、鋳造作業がおこなわれた可



第237図　土坑66　出土遺物（1）



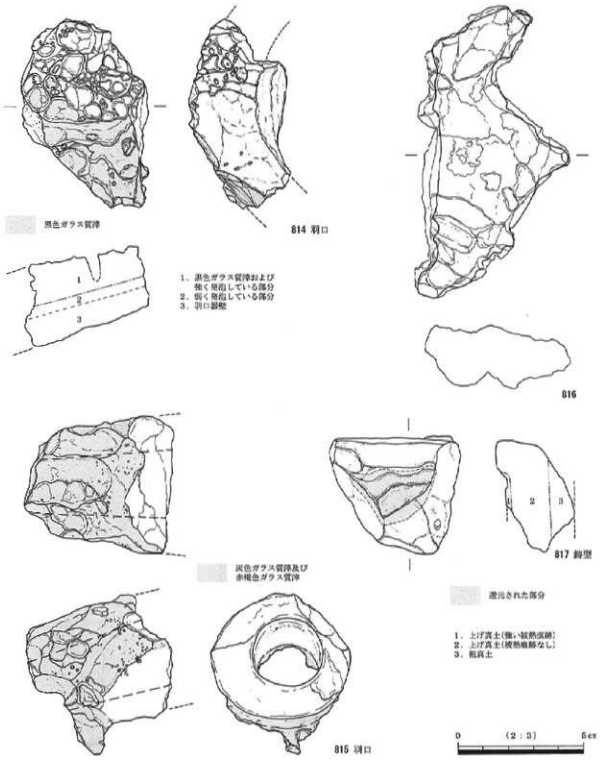
第238図　土坑66　出土遺物（２）（２／３＝802～804）



第239図　土坑66　出土遺物（３）（２/３）

能性がある。土坑66からは、多量の12世紀中葉～後葉の土器が出土しており、鋳造がおこなわれた時期について示唆的である。

墓と同時期もしくは近い時期に、鋳造作業がおこなわれた可能性がある。作業自体はやや離れた場所でおこなわれたことも考えられるものの、遺跡内の空間利用を考える上で、看過できない箇所である。



第240図　包含層　出土遺物（２/３）

第3項　n域（付図4・5）

第241図　n域　平面図

丘陵上東部の北部にあたる。西側は川２、東側は約8.0mの高低差をもつ段丘崖であるが、非常に平坦な地形である。川は比較的浅く、ｎ域の南端辺りには橋を構成していた可能性がある東西２列のピット列がある。北側がm域、西側が１域と川２を挟んでｋ域、南側がｏ域、東側が段丘崖下のｒ域である。

主な遺構に、建物14棟・柱列１列・井戸１基・溝・ピット・土坑などがある。

建物101（第241・242図　図版106）

北西部に位置し、東西２間×南北１間で、南側に１間の付属部分がある。約5.5m×5.5m、約30.3㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。柱穴１・２・４は根石を有す。ただし、北側は削平が著しい。

遺物は、「て」字状口縁土師器皿、瓦器など11世紀中葉～後葉のものかと思われる小片がわずかに出土している。

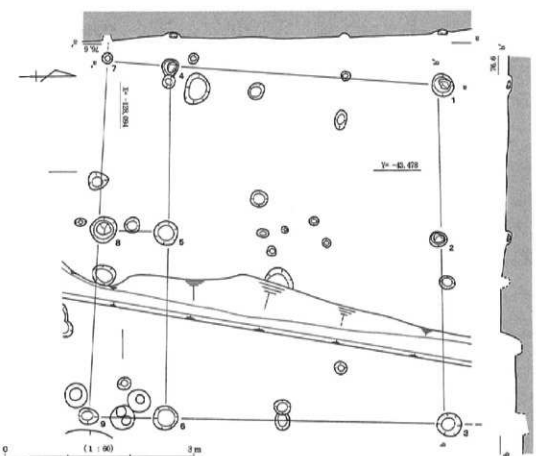
建物102（第241・243図　図版106）

北西部に位置し、東西３間×南北２間、約6.6m×3.9m、約25.7㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。南西隅は削平が著しく、柱穴が失われたと思われる。

遺物は、土師器、瓦器の細片がわずかに出土したのみである。

建物103（第241・244図　図版106）

北西部に位置し、南北３間×東西１間、約9.8m×4.6m、約45.1㎡である。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。柱穴８は土坑68内の礫を除去した後に検出した。柱穴４～６など、埋土に10cm大の礫が多く含まれているものがみられた。



第242図　建物101　平面・断面図

遺物は、土師器、瓦器椀、瓦質甕、須恵器などの小片のほか、柱穴5からは、図化できなかったが鉄製品（鋳造品）、鋳造用羽口が出土している。柱穴5から13～14世紀のものである可能性がある瓦器の小片が出土している。

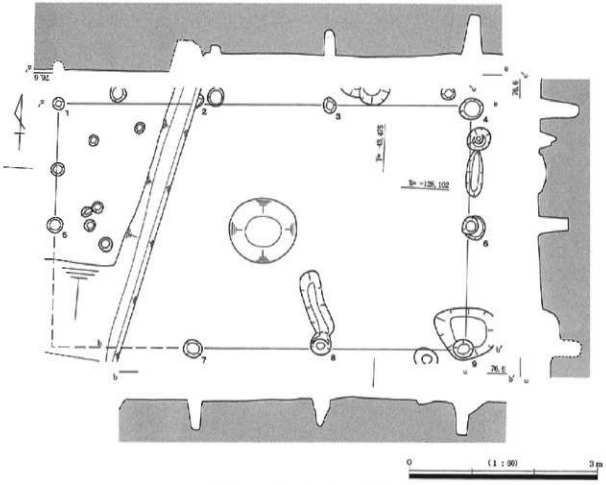
建物104〔第241・246図　図版108〕

中央部に位置し、南北1間以上×東西3間または4間である。南北2.2m以上、東西約5.9mまたは8.6m、面積13.0㎡以上である。主軸方向は、ほぼ正方位である。西端の東西柱間がやや狭い。南側は未調査で、さらに南へ続いている可能性がある。東西は3間または4間であるが、調査時にこの建物を認識していなかったため、不明といわざるを得ない。南北が1間以上であるとすれば、東西4間とした時の東辺の当該部分には柱穴が存在している。遺物は、出土していない。

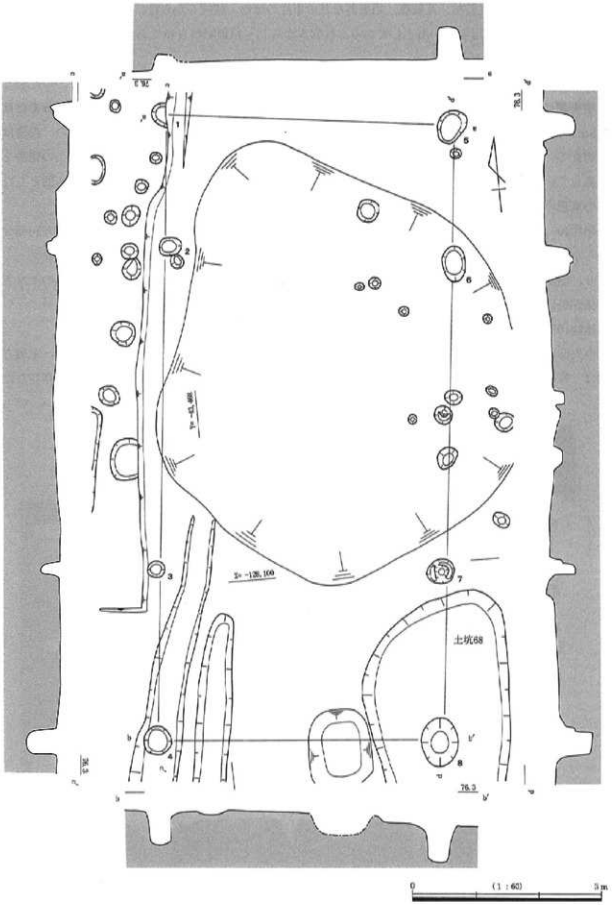
建物105と重なっている。溝63と溝64はこれら2棟とほぼ方向軸を揃える、南北方向と東西方向部分からなる平面カギ形の溝である。建物の北西角の外側で、建物の外形に対応するように直角に曲がっており、建物と同時に存在していたと考えられる。位置関係から建物104と溝63、建物105と溝64のセット関係が想定できる。

建物105（第241・245・246図　図版107・108）

中央部に位置し、東西4間×南北3間の総柱建物である。約9.6m×5.6m、約53.8㎡である。主軸方向は、N－4°－Wである。ただし、南側が著しい削平を受けているため、さらに南に柱穴が存在した



第243図　建物102　平面・断面図



第244図　建物103　平面・断面図

可能性がある。

遺物は、複数の柱穴から黒色土器A類椀の小片が出土したほか、柱穴18から刀子が出土している。

建物104と重なる。位置関係から建物105と溝63、建物104と溝64のセット関係が想定できる。

建物106（第241・247図　図版107・108）

中央部に位置する、南北4間または5間×東西3間で、約8.1mまたは約10.2m×5.7m、約41.8㎡または58.1㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。北東の角と北西の中央部分には柱穴がないが、調査時にないことを確認している。他の柱穴の深さから削平されて失われたとは考えづらく、本来より存在しなかった可能性が高い。

遺物は、複数の柱穴から焼土片が出土しているほか、土師器、黒色土器A類、須恵器などが出土している。

南は削平が著しく、南辺が不明である。南側の建物107と一連の建物である可能性もある。西側の建物105と北辺を揃えるが、南北の柱間はわずかにずれている。同時期に存在したとすれば、北側の溝を共有していたことも考えられる。

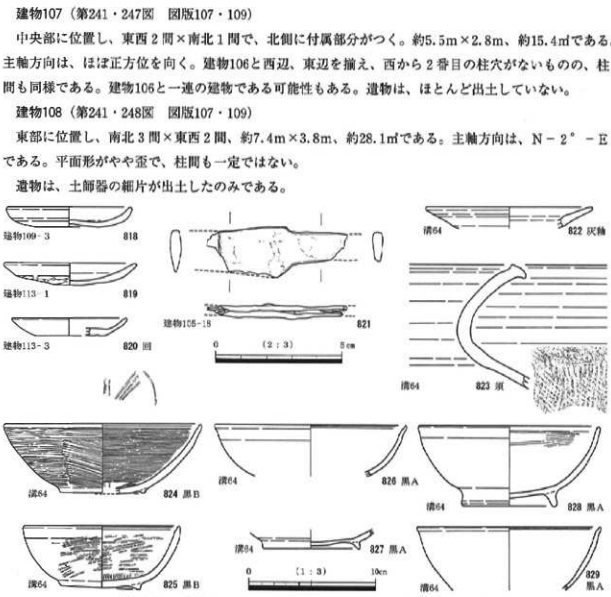
建物107（第241・247図　図版107・109）

中央部に位置し、東西2間×南北1間で、北側に付属部分がつく。約5.5m×2.8m、約15.4㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。建物106と西辺、東辺を揃え、西から2番目の柱穴がないものの、柱間も同様である。建物106と一連の建物である可能性もある。遺物は、ほとんど出土していない。

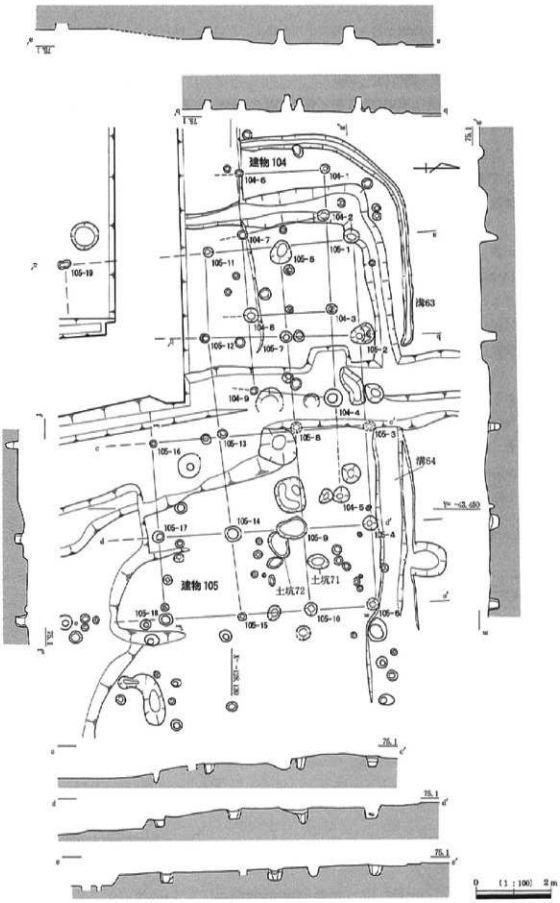
建物108（第241・248図　図版107・109）

東部に位置し、南北3間×東西2間、約7.4m×3.8m、約28.1㎡である。主軸方向は、N－2°－Eである。平面形がやや歪で、柱間も一定ではない。

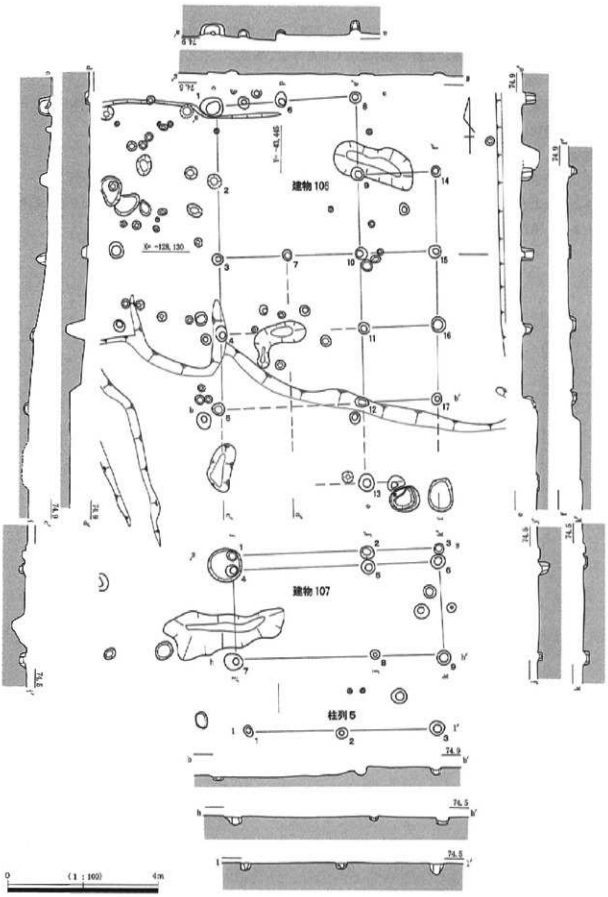
遺物は、土師器の細片が出土したのみである。



第245図　建物105・109・113　溝64　出土遺物（2／3＝821）



第246図　建物104・105　平面・断面図



第247図　建物106・107　柱列5　平面・断面図

建物109（第241・245・249図）

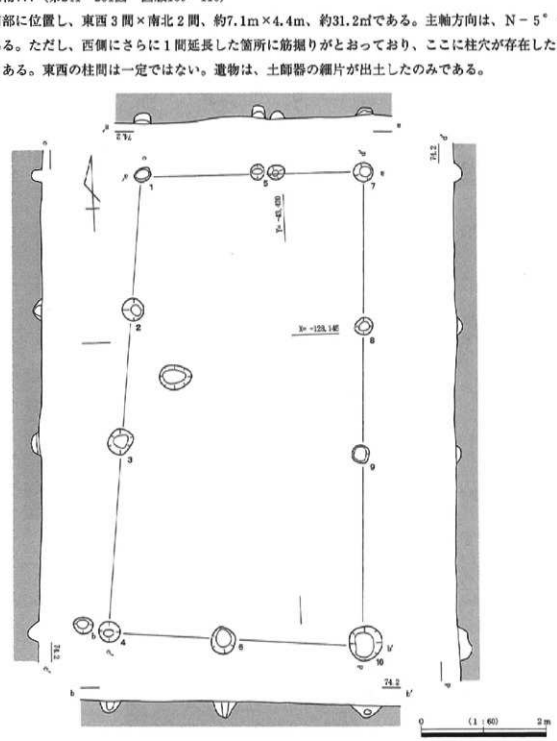
南部に位置し、歪な平面形で、南北約5.5m×東西5.6m、約27.8㎡である。主軸方向は、N－2°－Wである。遺物は、土師器、瓦器の細片が出土したのみである。

建物110（第241・250図　図版109・110）

南部に位置し、南北２間×東西２間、約3.0m×2.8m、約8.4㎡である。主軸方向は、N－5°－Wである。遺物は、磨滅した土師器皿の細片が出土したのみである。

建物111（第241・251図　図版109・110）

南部に位置し、東西３間×南北２間、約7.1m×4.4m、約31.2㎡である。主軸方向は、N－5°－Wである。ただし、西側にさらに１間延長した箇所に筋掘りがとおっており、ここに柱穴が存在した可能性もある。東西の柱間は一定ではない。遺物は、土師器の細片が出土したのみである。



第248図　建物108　平面・断面図

建物112（第241・252図　図版109・110）

南部に位置し、南北4間×東西2間、約7.9m×4.2m、約33.2㎡である。主軸方向は、N－7°－Wである。一部調査できなかった部分にも柱穴が存在している可能性がある。

遺物は、須恵器甕、「て」字状口縁土師器皿、黒色土器A類などの小片が出土している。

建物113（第241・245・253図　図版109・110）

南部に位置し、南北2間×東西1間で、南東に1間の付属部分がつく。約4.6m×3.6m、約14.3㎡である。主軸方向は、N－6°－Wである。東辺の中央には柱穴がない。

遺物は、瓦器、「て」字状口縁土師器皿、回転台土師器皿、鉄製品が出土している。11世紀中葉～12世紀前葉と思われるものである。

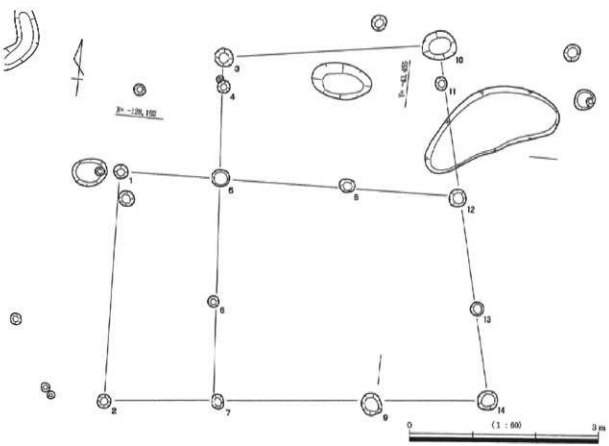
建物114（第241・250図　図版109・111）

南部に位置し、南北2間×東西1間、約6.3m×3.7m、約29.6㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位である。遺物は出土していない。

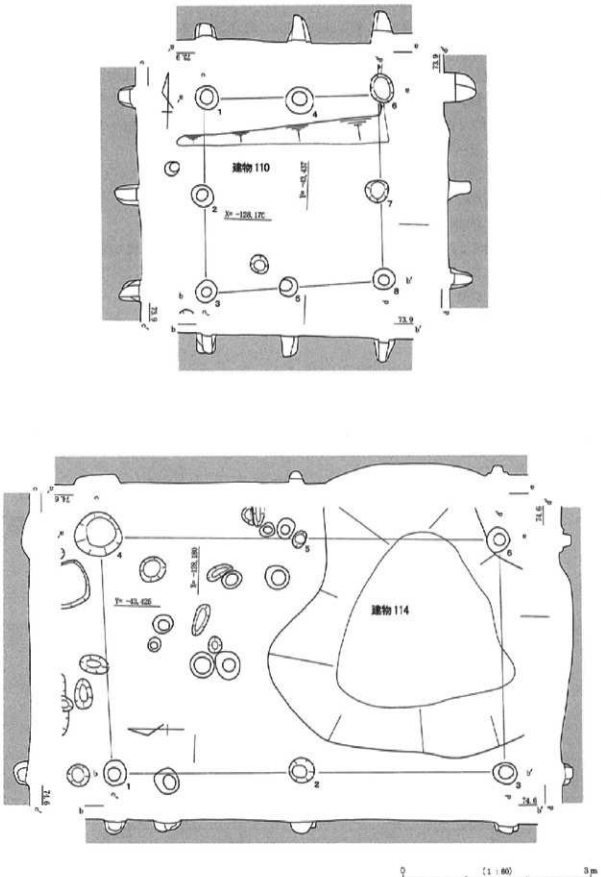
柱列5（第241・247図　図版107・109）

建物107の南にある、柱穴3基からなる東西方向の柱列である。2間、約5.5mで、建物107に付属する柵、塀などであると思われる。

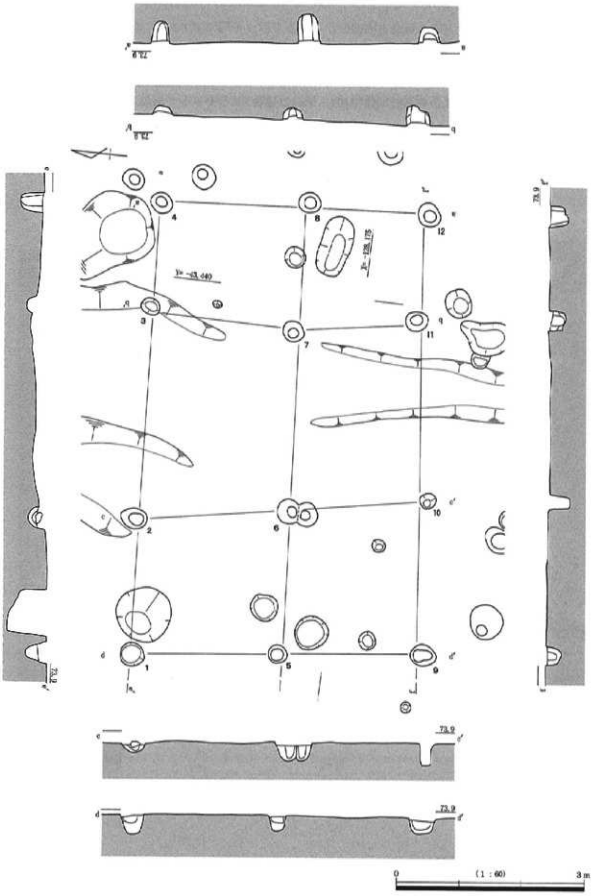
遺物は、黒色土器A類椀の高台が1点出土している。



第249図　建物109　平面図



第250図　建物110・114　平面・断面図

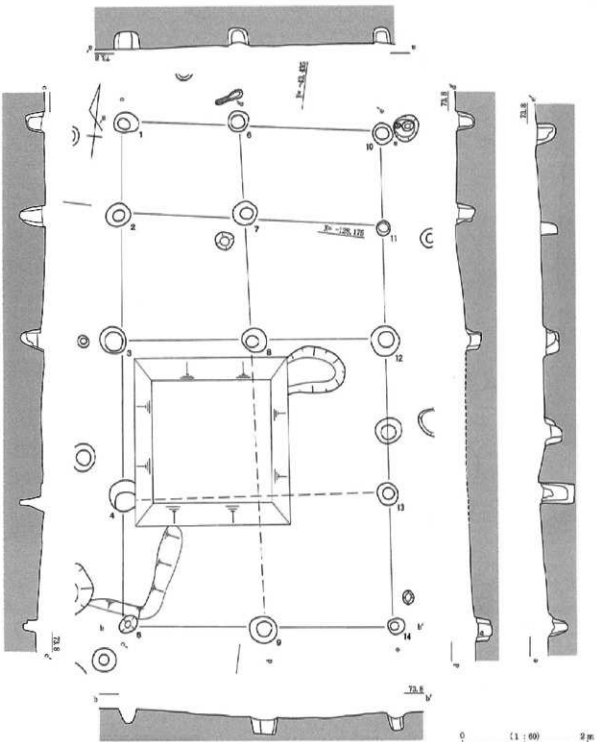


第251図　建物111　平面・断面図

溝63（第246図）

中央部に位置し、南北方向と東西方向部分からなる平面カギ形の溝である。幅約0.2m～0.4m、深さ約0.1mである。遺物は、細片がわずかに出土している。

やや南東にずれた位置に同様な溝64がある。方向軸を揃える建物105との関係が想定されるが、２棟は重複しており、位置関係から溝63は建物104、溝64は建物105とセットであると考えられる。



第252図　建物112　平面・断面図

溝64（第245・246図　図版111・207）

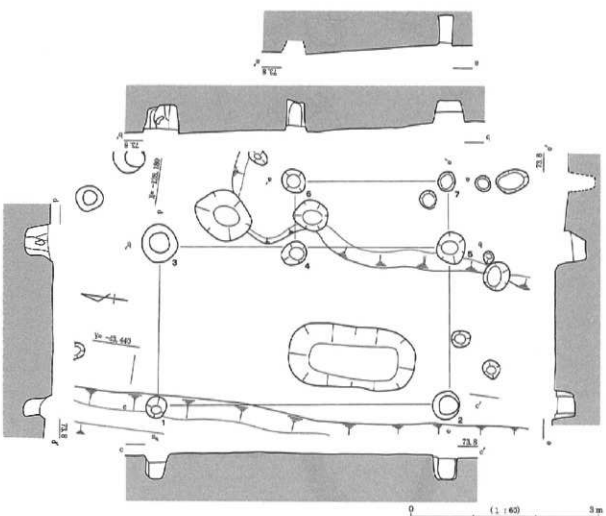
中央部に位置し、南北方向と東西方向部分からなる平面カギ形の溝である。幅約0.6m～1.0m、深さ約0.1mで、底面のレベルは南に向かって低くなっている。少し北西にずれた位置に、同様な溝63がある。方向軸を揃える建物105との関係が想定される。

遺物は、黒色土器A類椀、黒色土器B類椀、器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿、土師器甕、須恵器甕、灰釉陶器段皿、鍛冶滓などが出土している。828の黒色土器A類椀は、器壁がやや厚く、高台が高いものである。それ以外のものは、丘陵上西部地区e域の土坑19、土器集積1と同様なものと思われる。黒色土器B類椀は、b域の土坑10のものと同様なものである。「て」字状口縁土師器皿片は磨滅した小片のみであるが、器壁の薄いものがみられる。

多数の黒色土器A類椀と器壁の薄い「て」字状口縁土師器皿が出土したa域の土坑19を10世紀後葉、多数の黒色土器B類椀と器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿が出土した、b域の土坑10を11世紀中葉と考えている。土坑10よりやや古い時期か、近い時期であることが想定されるため、11世紀前葉～中葉の時期である可能性がある。

井戸7（第241・254・255図　図版106・111・207）

北部に位置し、石組みの井戸である。東西径約3.6m、南北約3.2m、石組みの内径約1.2m～1.5m、



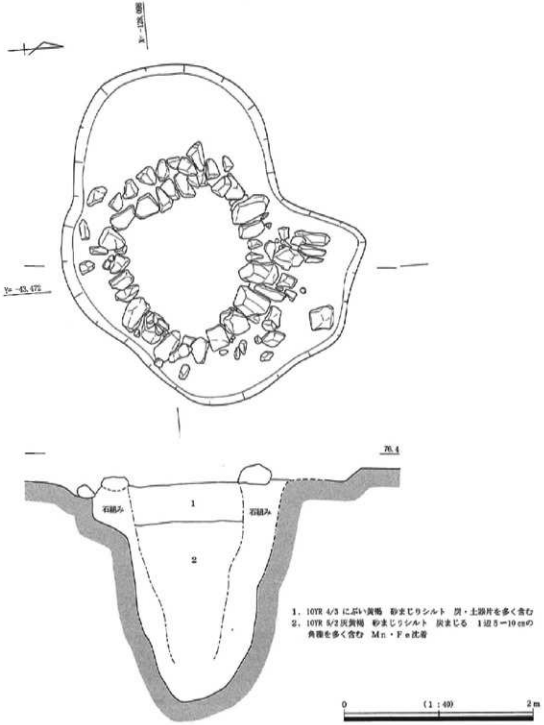
第253図　建物113　平面・断面図

深さ約2.3mである。40cm程度の角礫の面を揃えて積んでいる。礫の断面および立面は図化できなかったが、13段前後積み上げていた。

遺物は、上層から瓦器片、鉄製品（鋳造品）、鋳造用羽口が出土している。ただし、周囲には11世紀代の遺物が出土する包含層が良好に遺存しており、上層の遺物はこれらが落ち込んだものである可能性が高い。底付近から木製品が出土したものの、下層から他に遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ピット68（第256図　図版112）

中央部に位置し、楕円形で、東西約0.5m、南北0.4m、深さ約0.1mである。10cm前後の小礫が集積していた。南側に類似したピット69がある。遺物は出土していない。



第254図　井戸７　平面・断面図

ピット69（第256図　図版112）

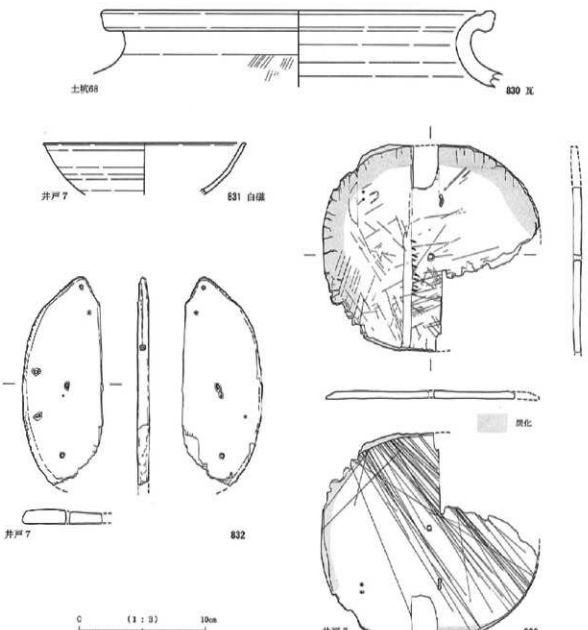
ピット68の南に隣接し、径約0.4m、深さ約0.1mである。10cm前後の小礫が集積していた。第256図の平面図は、数点の礫を外してしまった状態である。北側に類似したピット68がある。遺物は、出土していない。

土坑67

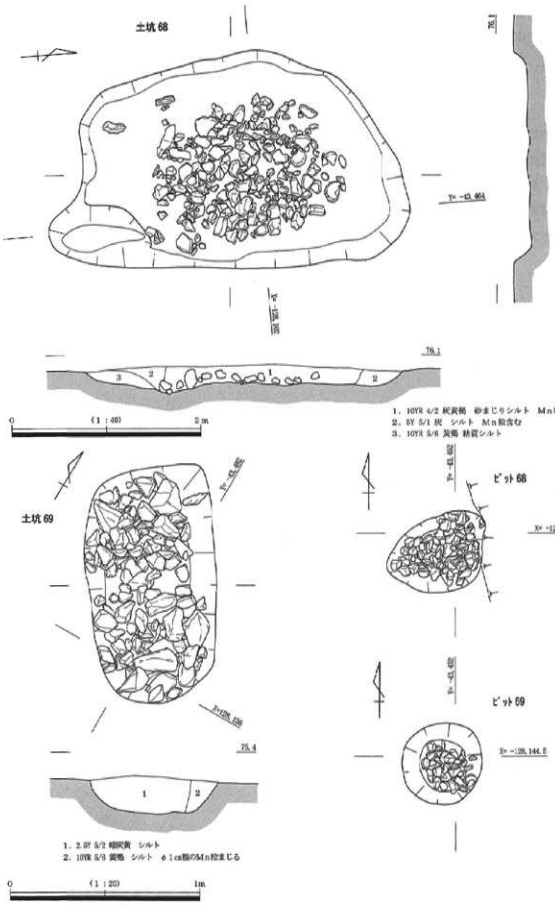
北部に位置し、楕円形で、南北約0.6m、東西約0.5m、深さ約0.2mである。埋土に焼土粒、炭を多く含む。遺物は出土していない。

土坑68（第244・255・256図　図版111）

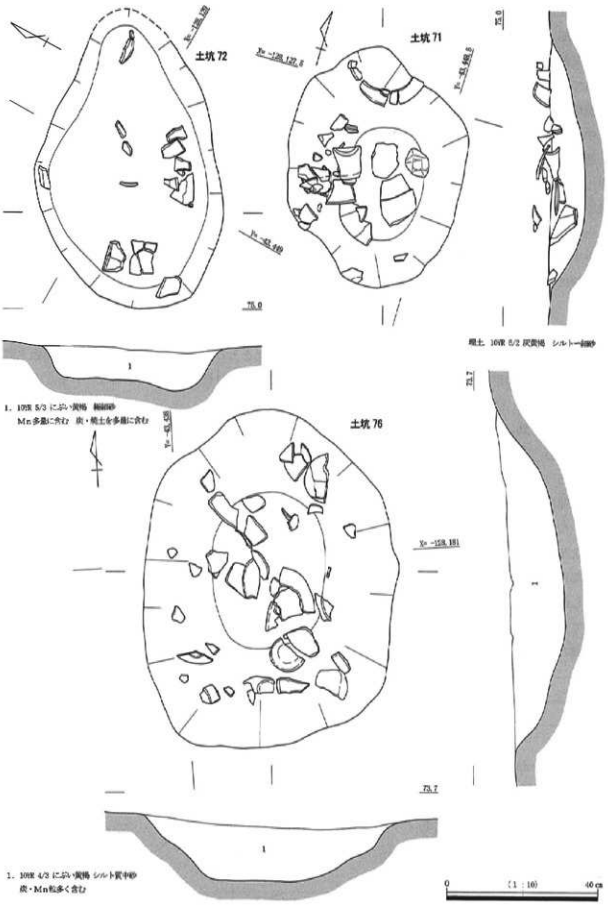
北部に位置し、長径約3.4m、短径約2.3m、深さ約0.3mの隅丸方形または楕円形の土坑である。多くの礫が入っていた。礫は10cm前後である。礫を除去した底面で建物103の柱穴8を検出した。



第255図　井戸7　土坑68　出土遺物



第256図　ピット68・69　土坑68・69　平面・断面図



第257図　土坑71・72・76　平面・断面・立面図

遺物は、瓦質甕・羽釜、須恵器甕、土師器煮炊具、瓦器などの小片が出土している。

土坑69（第256図　図版112）

中央部に位置し、長辺約1.3m、短辺約0.7mの隅丸長方形の土坑である。10～20cm大の礫が多量に集積していた。出土遺物はない。

土坑71（第241・246・257・258図　図版112）

中央部に位置し、長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.1mである。

遺物には、黒色土器A類椀、黒色土器B類椀、須恵器、器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿の破片が出土している。表面の磨滅が著しく、ミガキなど調整痕は不明瞭である。黒色土器A類椀は高台の形状は不明であるが、器壁の厚いものである。11世紀中葉頃のものと考えられる。

土坑72（第241・246・257・258図　図版112）

中央部に位置する、長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mの楕円形の土坑である。

遺物には、黒色土器A類椀、黒色土器B類椀、土師器、須恵器などの破片が出土した。表面の磨滅が著しく、ミガキなど調整痕は不明瞭である。

遺跡内で、黒色土器A類椀と黒色土器B類椀の共伴が、どちらも細片ではなく図化可能な遺存状態で確認できるのは、これ以外では溝64、土坑71、b域の土坑10などわずかな例しかみられない。黒色土器A類椀は、高台の形状は不明であるが、器壁の厚いものである。11世紀中葉のものと思われる。

土坑73（第241・262図）

中央部に位置し、1辺約1.2mの方形で、深さは0.1m以内である。底面は凹凸が激しい。埋土に炭片を多く含む。遺物は、黒色土器B類の小片が出土したのみである。

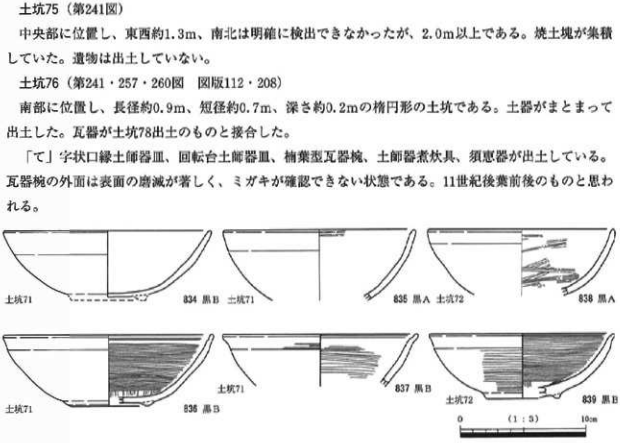
土坑75（第241図）

中央部に位置し、東西約1.3m、南北は明確に検出できなかったが、2.0m以上である。焼土塊が集積していた。遺物は出土していない。

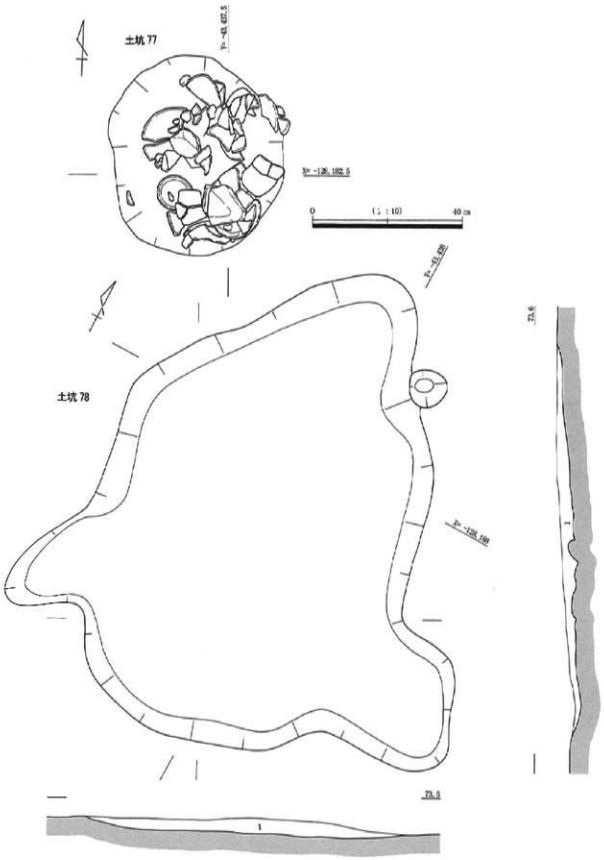
土坑76（第241・257・260図　図版112・208）

南部に位置し、長径約0.9m、短径約0.7m、深さ約0.2mの楕円形の土坑である。土器がまとまって出土した。瓦器が土坑78出土のものと接合した。

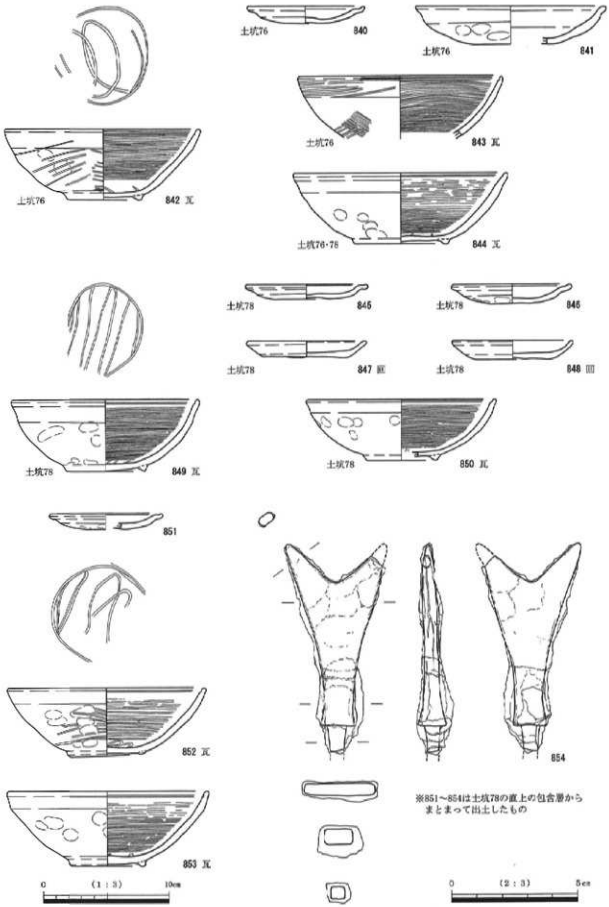
「て」字状口縁土師器皿、回転台土師器皿、柚葉型瓦器椀、土師器煮炊具、須恵器が出土している。瓦器椀の外面は表面の磨滅が著しく、ミガキが確認できない状態である。11世紀後葉前後のものと思われる。



第258図　土坑71・72　出土遺物



第259図　土坑77・78　平面・断面図



第260図　土坑76・78　土坑78直上包含層　出土遺物（2／3＝854）

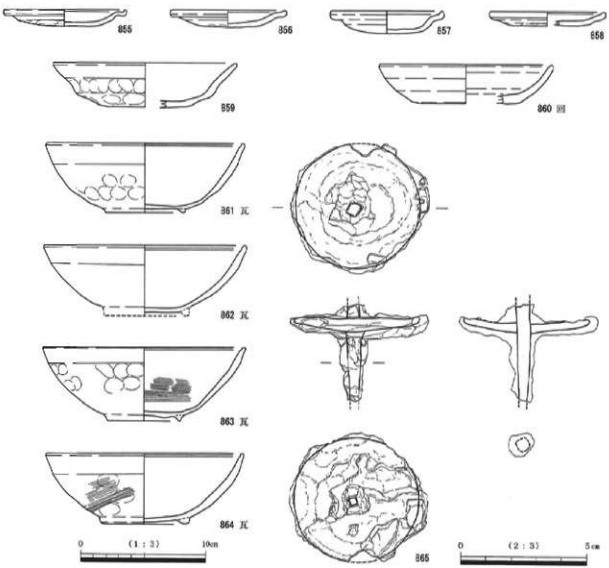
土坑77（第241・259・261図　図版112・208・242）

南部に位置し、径約0.5mの円形で、深さは約0.1mである。遺物がまとまって出土した。完形の楠葉型瓦器椀、「て」字状口縁土師器皿のほか、土師器大皿、回転台土師器皿、土師器煮炊具、須恵器、黒色土器B類椀の小片、鉄製紡錘車も出土している。瓦器椀は表面の磨滅が著しく、ミガキを確認できない。11世紀後葉前後の時期のものである。

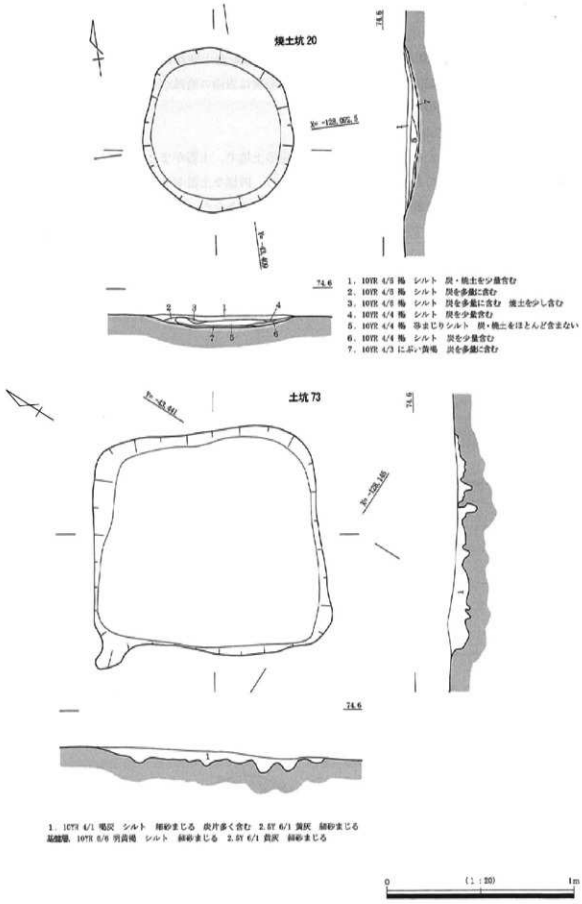
土坑78（第241・259・260図　図版112・208）

南部に位置し、最大長約2.6m、深さ約0.1mの不定形土坑で、土器がまとまって出土した。この部分には包含層が良好に遺存しており、土坑直上の位置から、同様な土器がまとまって出土している。土坑の輪郭は、包含層を除去した段階、基盤層上面でしか確認できなかったが、上位から出土した遺物も、土坑出土のものと一連のものである可能性が高い。瓦器片が土坑76のものと接合した。

遺物は、楠葉型瓦器椀、「て」字状口縁土師器皿、回転台土師器皿、土師器煮炊具、鉄鏃のほか、実測不可能であったが、鉄製品（鋳造品）4点、湯玉20数点が出土している。瓦器椀の外面は表面の磨滅が著しく、ミガキが確認できない状態である。11世紀後葉前後の時期のものである。



第261図　土坑77　出土遺物（2／3＝865）



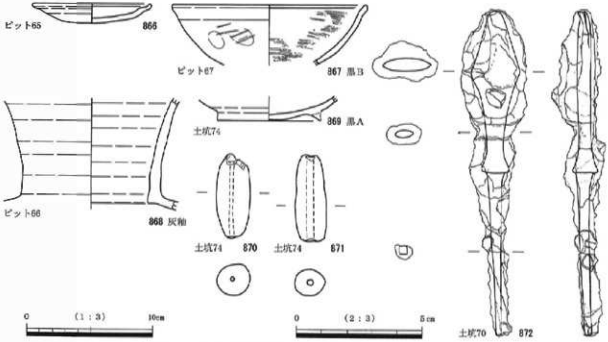
第262図　土坑73　焼土坑20　平面・断面図

焼土坑20（第241・262図）

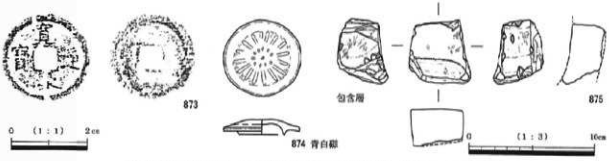
北東部に位置し、楕円形で、径約0.8m～0.9m、深さ約0.1mである。壁、底面ともに同程度の被熱痕跡が認められ、焼土化している。底面に薄い炭層がある。遺物は出土していない。

北西から南東へと緩やかに低くなる地形で、丘陵上では比較的平坦な部分である。しかし、後世に小面積の正方位の棚田を造成しているために、著しい削平を受けている部分が多い。

北西部、中央部、南部に建物群がみられるが、包含層は、ほぼこの3箇所にのみ遺存していた。ただ、南端部では、建物群の周辺に限らず比較的良好に遺存していた。これ以外の部分では多くの遺構が失われた可能性がある。また、先述した3箇所など、多くの遺構を検出している部分においても、棚田の段直下部分では削平が著しく、本来存在した遺構が失われたと思われる。n域は、比較的平坦な地形ではあるものの、すべての部分について、失われた遺構が存在する可能性が高いことを考慮に入れておく必要がある。



第263図　その他の遺構　出土遺物（2／3＝870～872）



第264図　包含層・近世作土層等　出土遺物（1／1＝873）

小結

建物をはじめ、多くの遺構が展開しているが、その割には出土遺物が少量で、時期の不明な遺構が多い。

中央部分に位置する建物群、建物104～107は、その位置関係から、同時期のものであると考えられる。複数の柱穴から黒色土器Ａ類が出土しているものの、建物の時期を明確に示す遺物はない。ただ、建物105とセットであると考えられる溝64からは、まとまった遺物が出土しており、11世紀前葉～中葉のものと想定している。建物104と105は重複しており、前後関係にあることが確実であるが、それ以外の建物の時期関係は不明である。

また、特に東側が著しいが、周辺は多かれ少なかれ削平を受けているため、周辺に建物を含めてさらに遺構が存在した可能性を考慮に入れておく必要がある。建物105と重なる位置にある土坑71・72から比較的まとまった遺物が出土しており、どちらも溝64出土遺物より若干新しい様相で、11世紀中葉の時期を想定している。

北西部の建物群、建物101～103は、いずれも、建物の時期を決定し得る遺物が出土していない。建物101の柱穴から出土した少量の細片には器壁の厚い「て」字状口縁土師器皿、瓦器などがみられ、11世紀中葉～後葉以降のものであると思われる。また、建物103の柱穴５からは、13～14世紀のものである可能性がある瓦器が出土しており、この時期以降のものである可能性がある。周辺には時期のわかる遺構がほとんどない。ただ、この部分に遺存していた包含層からは、比較的11世紀代の遺物の出土が目立ち、この時期に土地利用されていたことが考えられる。

３棟の建物からほぼ等距離の位置に、井戸７が位置している。井戸は、いずれかの建物に付属するものである可能性が高いが、時期が不明である。ただし、遺跡内の石組みを伴う井戸は、13～14世紀のものばかりである。周辺は著しく削平されており、多くの遺構が失われたと思われる。ほかにも建物が存在した可能性も考慮に入れておく必要がある。

南部の建物群、建物109～114でも、ほとんど時期のわかる遺物が出土していない。建物113から11世紀中葉～12世紀前葉と思われる遺物が出土しているのみである。この部分に位置する土坑76～78から、11世紀後葉のまとまった遺物が出土しており、周囲の建物にこの時期のものがある可能性が考えられる。南側、西側は包含層が遺存していたが、北側、東側は削平を受けており、本来存在した遺構が失われた可能性がある。

以上の３箇所から離れた、段丘崖の肩部に建物108がある。遺物は出土しておらず、時期は、不明である。

ｎ域の西側には、川２が蛇行して流れている。深さ約1.0ｍと非常に浅く、南部の建物群の西側部分では、並行する２列のピット列を検出しており、橋が設けられていた可能性がある。その時期は不明であるが、ｎ域と丘陵上中部地区には同様な時期の遺構が展開しており、橋であるとすれば、その行き来に使われていた可能性がある。

北側はｍ域であるが、削平が著しい部分を挟む。

東側は、川合裏川段丘面に至る、約８ｍの高低差をもつ段丘崖である。時期は明らかではないが、多くの焼土坑が段丘崖肩部から崖部分、段丘面まで分布しており、焼土坑20は、これらと一連のものである可能性がある。南はｏ域で、ここにも時期不明の焼土坑が多く分布している。

第4項　o域（付図5・6・9）

丘陵上東部地区の中央部分で、南西側には川2が北西から南東に流れ、対岸がj域である。北側がn域、南東側がp域である。北東は川合裏川段丘面r域に至る、約8.0mの高低差を有する段丘崖である。

主な遺構として、建物1棟・焼土坑25基があり、他に、土坑などがある。

建物115（第265・266図　図版113・114）

中央部に位置し、東西2間×南北2間、約4.5m×3.8m、約17.1㎡である。主軸方向は、ほぼ正方位を向く。周辺に柱穴は認められず、他に建物は存在しなかった可能性がある。

遺物は、須恵器片が1点出土したのみである。

第265図　o域　平面図

土坑79（第265・267・268図）

北東部に位置し、不定形で、南北約7.8m、東西約4.8m、深さ約0.5mである。底面には比較的凹凸がある。土坑の東部分、および東側には焼土坑が密集している。土坑80、焼土坑24・26・27に切られている。第267図の南北断面図で焼土坑26との切り合い関係がみてとれ、焼土坑26は土坑79の埋土を切って掘削されているが、土坑79が完全に埋まる前に埋まっていることがわかる。埋土中から馬の歯が並んで出土したが、腐食が著しく、取り上げることができなかった。その他、土師器皿、瓦器椀、瓦質土器、砥石などが出土している。土師器皿は13世紀中葉～後葉のものと思われる。

土坑80（第267・271図）

北東部に位置し、円形で、径約1.0m、深さ約0.2mである。形態、炭層を含む埋土から焼土坑である可能性があるが、被熱痕跡は確認できなかった。土坑79を切っている。

遺物は、土師器煮炊具の小片が出土したのみである。

土坑81（第267・272図）

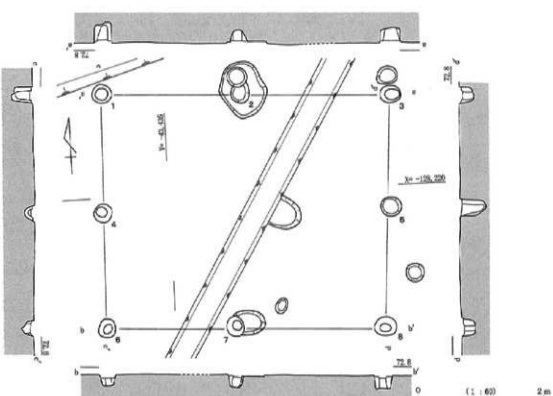
北東部に位置し、円形で、径約1.0m、深さ約0.1mである。形態、埋土から、焼土坑である可能性があるが、被熱痕跡は確認できなかった。埋土の下層は炭層である。土坑79の東部、土坑の密集する箇所に位置し、土坑79を切っている。遺物は出土していない。

土坑82（第274図）

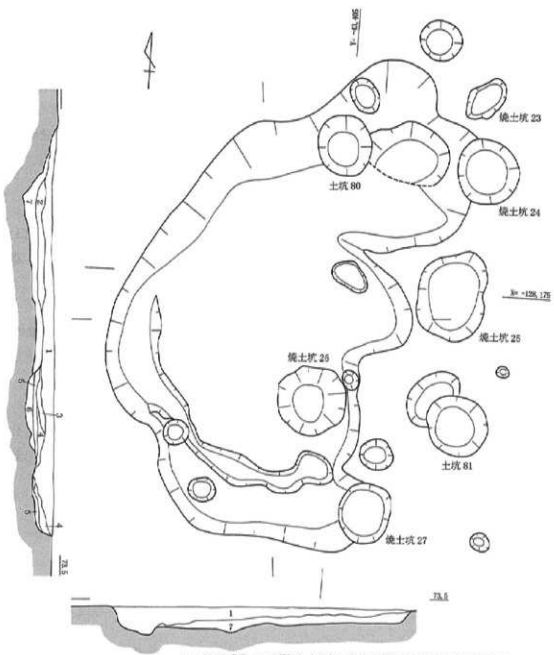
中央部に位置し、歪な長楕円形で、長径約2.7m、短径約1.5m、深さ約0.1mである。埋土に多くの焼土塊が含まれていたが、被熱痕跡は認められない。遺物は出土していない。

焼土坑21（第270図）

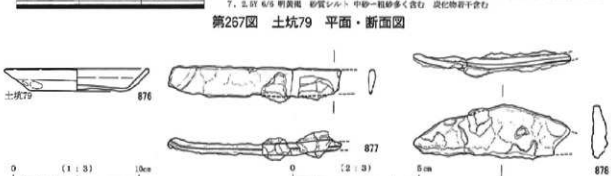
北東端部に位置し、円形で、径約0.9m、深さ約0.2mである。壁が被熱し、焼土化している。底面で



第266図　建物115　平面・断面図



第267図　土坑79　平面・断面図



第268図　土坑79　近世作土層　出土遺物（2/3＝877・878）

は埋土に炭、焼土を多く含み、下層は炭層である。遺物は、土師器の小片が出土したのみである。

焼土坑22（第265・270図　図版114）

北東部に位置し、円形で、径約1.0mである。壁と底面の一部が被熱して赤色化している。10～20cm大の角礫を含むが、これには被熱痕跡はみられない。遺物は出土していない。

焼土坑23（第265・267・270図　図版114）

北東部に位置し、歪な楕円形で、長径約0.8m、短径約0.5m、深さ約0.1mである。壁の一部が被熱して焼土化している。埋土に炭、焼土を非常に多く含む。土坑79の北東に接する。遺物は、出土していない。

焼土坑24（第265・267・271図）

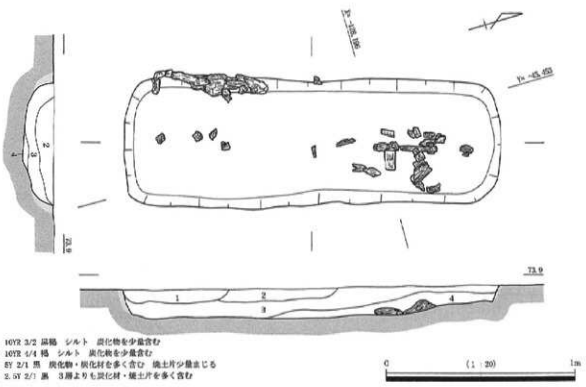
北東部に位置し、円形で、径約1.0m、深さ約0.2mである。壁と底面の一部が被熱して焼土化している。下層は炭層である。埋土に丸みを帯びた礫を1点含む。土坑79の北東隅を切っている。遺物は、土師器小片が1点出土したのみである。

焼土坑25（第265・267・272図）

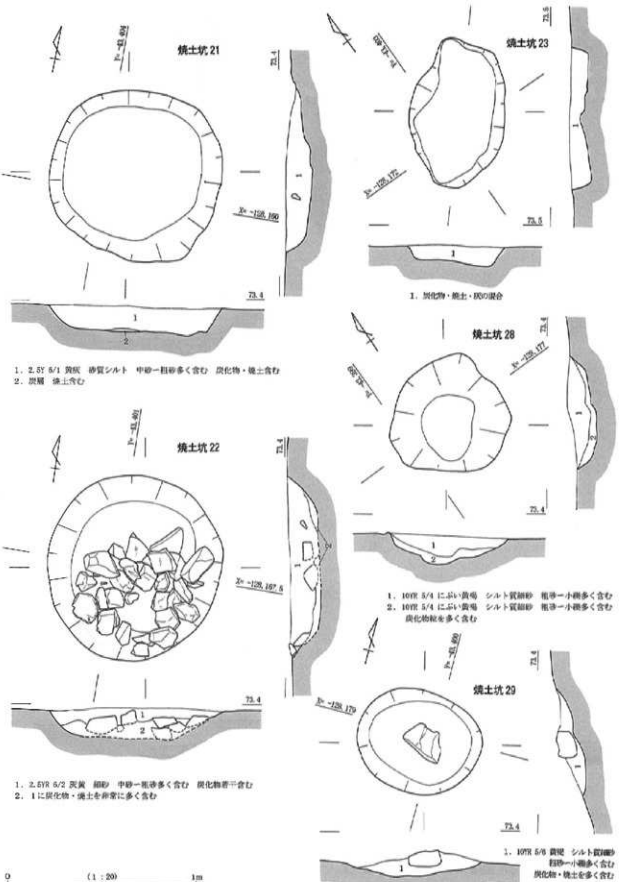
北東部に位置する。不整楕円形で、長径約1.5m、短径約1.1m、深さ約0.2mである。壁の一部に、顕著ではないが被熱痕跡が確認できる。土坑79の東に隣接する。遺物は、土師器小片が出土したのみである。

焼土坑26（第265・267・271図）

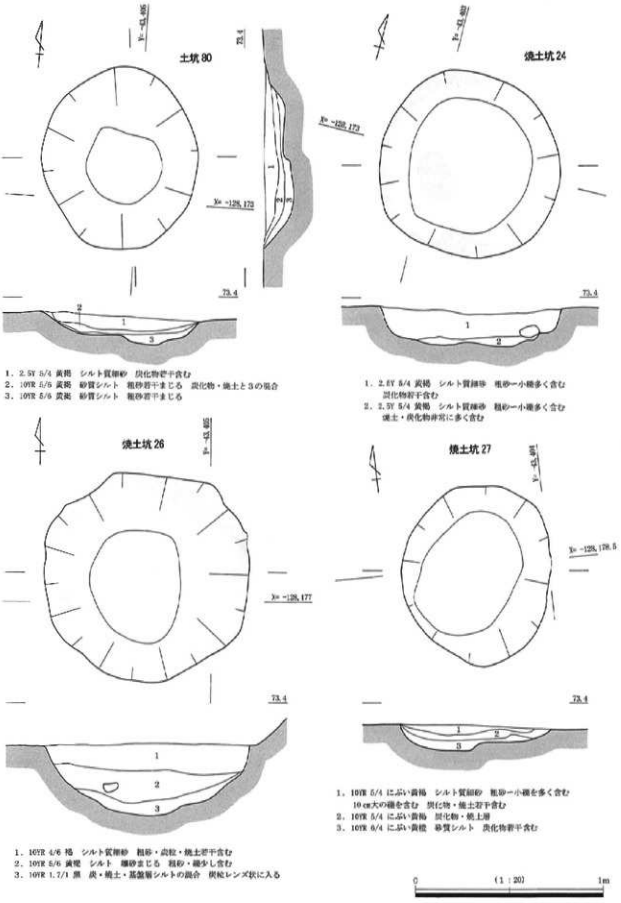
北東部に位置し、やや歪な円形で、径約1.1mである。壁は被熱して焼土化している。埋土下層は炭、焼土を含む。第267図の南北断面図から、土坑79の埋土を切って掘削されたが、土坑79が完全に埋まる前に埋まったことがわかる。遺物は出土していない。



第269図　焼土坑31　平面・断面図



第270図　焼土坑21～23・28・29　平面・断面図



第271図　土坑80　焼土坑24・26・27　平面・断面図

焼土坑27（第265・267・271図）

北東部に位置し、円形で、径約1.0m、深さ約0.1mである。被熱しているが、その痕跡は顕著ではない。埋土に炭・焼土層がある。土坑79を切っており、周囲には焼土坑が密集している。遺物は出土していない。

焼土坑28（第265・270図）

北東部の段丘崖の肩近くに位置する。やや歪な円形で、径約0.6m、深さ約0.2mである。被熱痕跡は顕著ではない。下層に炭を多く含む。基盤層に礫が含まれているため、底面には多くの礫がみられる。遺物は、土師器小片が出土したのみである。

焼土坑29（第265・270図）

北東部の段丘崖の肩近くに位置する。円形で、径約0.7mである。削平が著しく、壁の状態は不明であるが、底面の一部に淡い被熱痕跡が確認できる。埋土に炭、焼土を多く含む。遺物は出土していない。

焼土坑30（第265・273図）

北東部に位置し、隅丸方形で、長辺約1.3m、短辺約1.2m、深さ約0.3mである。壁に被熱して焼土化している部分がみられる。埋土上層の下部に炭化物を多く含む。近接する焼土坑はなく、単独で立地する。遺物は出土していない。

焼土坑31（第265・269図　図版114）

北西部に位置し、長方形で、長辺約2.0m、短辺約0.7m、深さ約0.2mである。特に長辺で顕著であるが、壁部分の基盤層が被熱して焼土化している。底面にも被熱痕跡がみられたが、部分的である。下層に炭化物を多く含み、底面で丸太状の炭化材が長軸に平行に出土した。

焼土坑32（第265・272図）

北部に位置し、円形で、径約0.5m、深さ約0.1mである。底面の一部に被熱痕跡を確認した。下層は炭層である。遺物は、土師器細片が出土したのみである。

焼土坑33（第265・272図）

北部に位置し、楕円形で、長径約0.5m、短径約0.4m、深さ約0.1mである。削平を受けたと思われ、遺存状態が悪い。壁と底面の一部に被熱痕跡がみられた。埋土に炭化物を含むが少量である。遺物は、出土していない。

焼土坑34（第265図）

北部に位置し、楕円形で、長径約1.4m、短径約1.0m、深さ約0.3mである。壁で被熱痕跡を確認したが、底面ではその有無を確認していない。埋土に炭を多量に含む。遺物は出土していない。

焼土坑35（第265・272図）

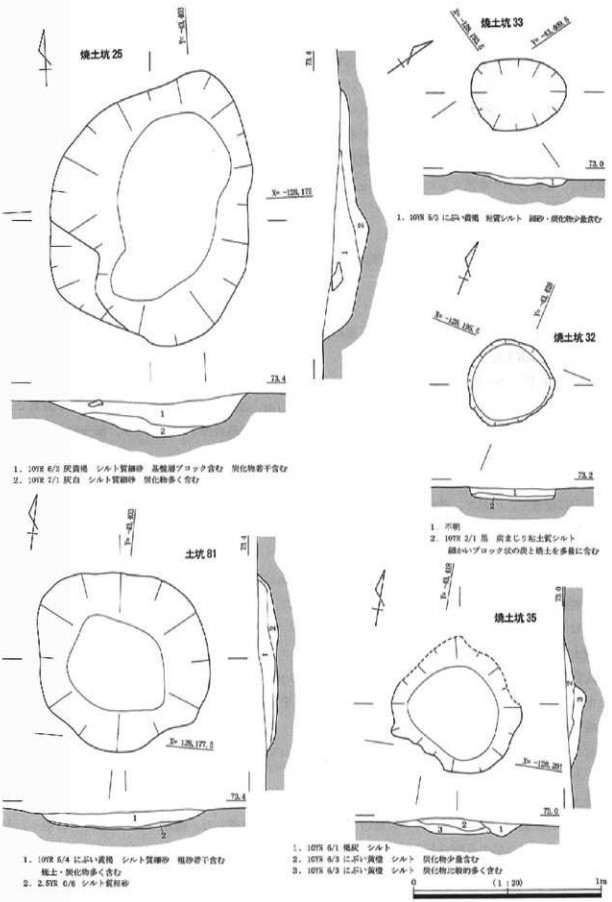
北部に位置し、不整円形で、径約0.7m、深さ約0.1mである。一部で被熱痕跡を確認した。下層は炭層である。遺物は出土していない。

焼土坑36（第265図）

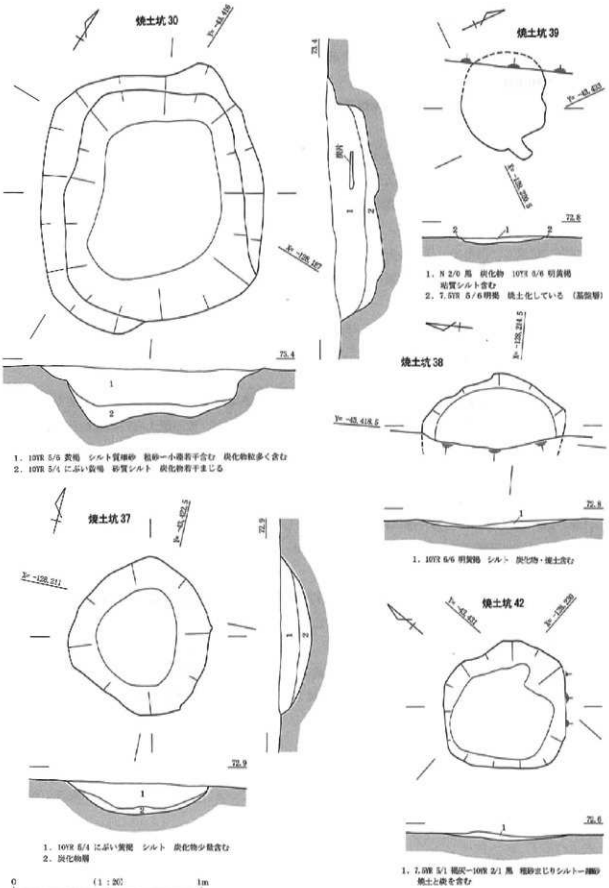
中央部に位置し、被熱痕跡と薄い炭層のみを基盤層上面で確認した。輪郭などは確認できなかったが、削平を受けた焼土坑の痕跡であると思われる。遺物は出土していない。

焼土坑37（第265・273図　図版114）

中央部に位置し、不整楕円形で、南北約0.9m、東西約0.8m、深さ約0.2mである。壁の大部分と底面の一部が被熱して焼土化している。埋土下層は炭層である。遺物は、瓦器椀の高台、土師器皿の小片



第272図　土坑81　焼土坑25・32・33・35　平面・断面図



第273図　焼土坑30・37～39・42　平面・断面図

が出土している。11～13世紀の範疇に入るものである。

焼土坑38（第265・273図）

中央部に位置する。円形と思われるが西半部を検出できず、全容は不明である。遺存部の南北長約0.8m、深さ0.04mである。壁、底面ともに一部に被熱痕跡がみられる。埋土は炭層であるが、他の焼土坑の状態から、削平され下層部分のみが遺存した可能性がある。遺物は、出土していない。

焼土坑39（第265・273図）

中央部に位置する。西半部が検出できず全容が不明であるが、遺存部分の径約0.5m、深さ0.03mである。壁、底面の一部が被熱して焼土化している。埋土は炭層であるが、他の焼土坑の状態から、削平されて下層部分のみが遺存した可能性がある。遺物は、出土していない。

焼土坑40（第265・274図）

中央部に位置し、円形で、径約1.0m、深さ約0.1mである。壁、底面ともに被熱して焼土化している。埋土下層は炭層である。遺物は、土器片が1点出土しているが、種類不明である。

焼土坑41（第265・274図）

川2の肩部に位置し、やや歪な円形で、径約1.0m、深さ約0.2mである。一部に被熱痕跡が認められる。埋土下層は炭層である。遺物は、出土していない。

焼土坑42（第265・273図）

中央部に位置し、不整円形で、径約0.7m、深さ約0.1mである。遺存状態が悪いため明確ではないが、壁、底面共に一部が被熱して焼土化している。埋土は炭層であるが、他の焼土坑の状態から、削平されて下層部分のみが遺存した可能性がある。遺物は出土していない。

焼土坑43（第265・275図）

川2の肩部に位置し、南側が削平されており、全容は不明である。遺存している部分の最大長約1.4m、深さ約0.3mである。壁の一部に被熱して焼土化している部分がみられた。埋土の最下と中位に炭層がある。中位の炭層はごく薄いものである。遺物は、土師器の細片が出土したのみである。

焼土坑44（第265・274図）

南部に位置し、楕円形で、長径約0.6m、短径約0.5m、深さ約0.1mである。壁と底面の一部に被熱痕跡がみられる。埋土炭化物多量に含む。遺物は、出土していない。

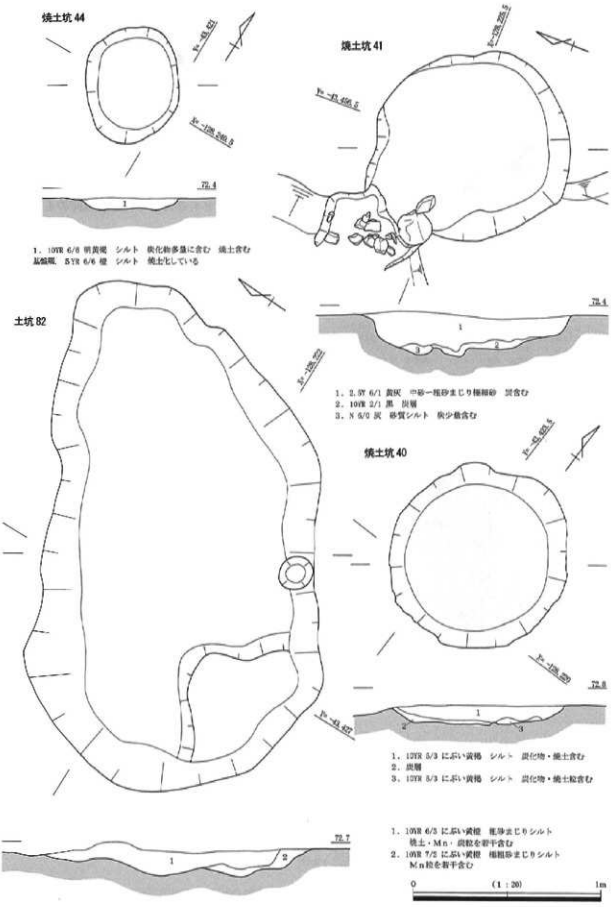
焼土坑45（第265・275図　図版114）

南部に位置し、不整円形で、径約1.2m、深さ約0.2mである。壁、底面共に被熱して焼土化している。埋土下層は炭層である。遺物は、磨滅した土師器皿と瓦器椀の小片が出土しており、11～13世紀の範疇に入るものである。

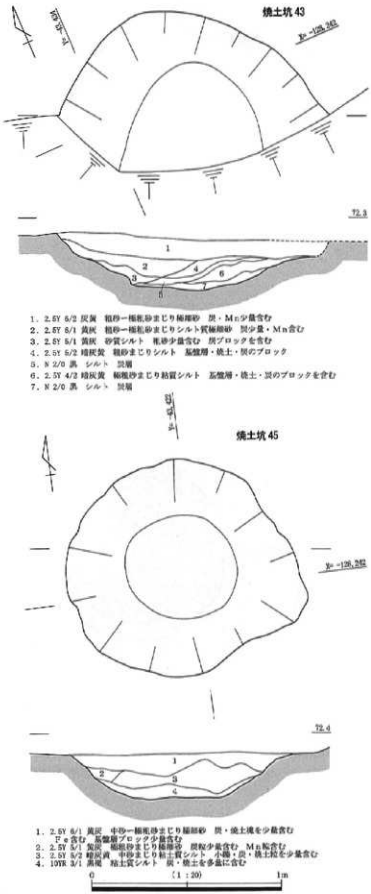
包含層は、中央部、南端部にのみ遺存していた。それ以外の、特に川2の南北方向部分と接する部分や北側のn域と接する部分、p域と接する端部は削平を受けている。また、当然ながら中央部の棚田の段下部分も削平を受けている。

小結

o域は、多数の焼土坑が分布する特徴的な部分である。北部は、段丘崖に沿ってその肩部に焼土坑が分布している。南部は崖の肩からやや離れた箇所に、面的な分布がみられる。円形のものが多く、被熱



第274図　土坑82　焼土坑40・41・44　平面・断面図



第275図　焼土坑43・45　平面・断面図

痕跡は壁に顕著であるものの、底面にはあまりみられない。また、下層が炭層、上層が埋め戻し土であるものが多く、遺物は全くといってよいほど出土しない。時期は遺物が出土しないため不明であるが、北部に位置するもののなかには、13世紀の遺物が出土した土坑79を切っているものがみられ、少なくともそれらは13世紀以降のものと考えられる。

焼土坑は、遺跡全体にみられる遺構である。なかには焼骨が出土し、火葬をおこなったと考えられるものが存在するが、大半は、その性格を知ることができない。ｏ域の焼土坑はすべてが後者である。多数の焼土坑があるのにかかわらず、１片の焼骨も出土していないことから、火葬をおこなったものとは考え難く、何らかの作業をおこなったものと思われる。

ｏ域は、多数の焼土坑以外に顕著な遺構はほとんどみられない、特徴的な部分である。遺跡内でも作業空間として機能していた箇所であると思われる。建物は１棟あるのみである。時期は不明であるが、小規模で、かつ単独で存在することから、焼土坑に伴う作業小屋や収納小屋であった可能性もある。

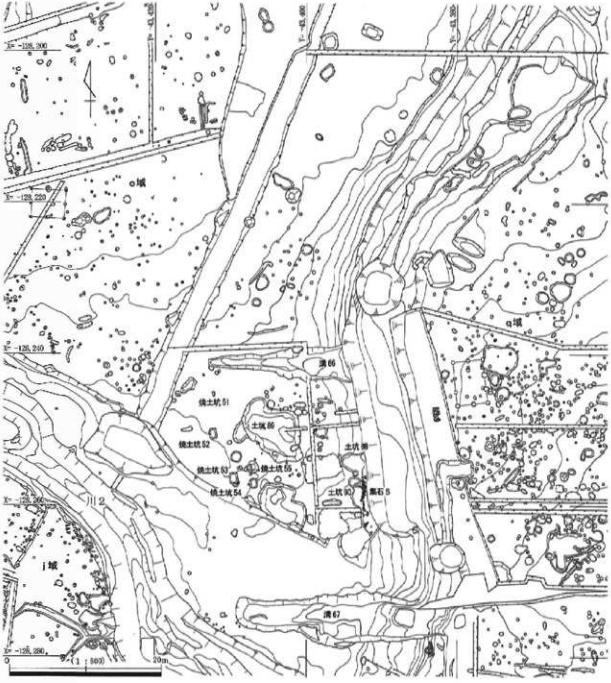
第5項　p域（付図6・10・16）

丘陵上東部地区の南西部分である。南西側は川2が北西から南東へと流れており、対岸はj域である。東側はq域に至る約2.4mの高低差をもつ崖が存在する。北側はo域である。

層序

現代の表土下に近世以降の層が複数層、中世の包含層が1層ある。近世と中世、2面の遺構面を確認した。

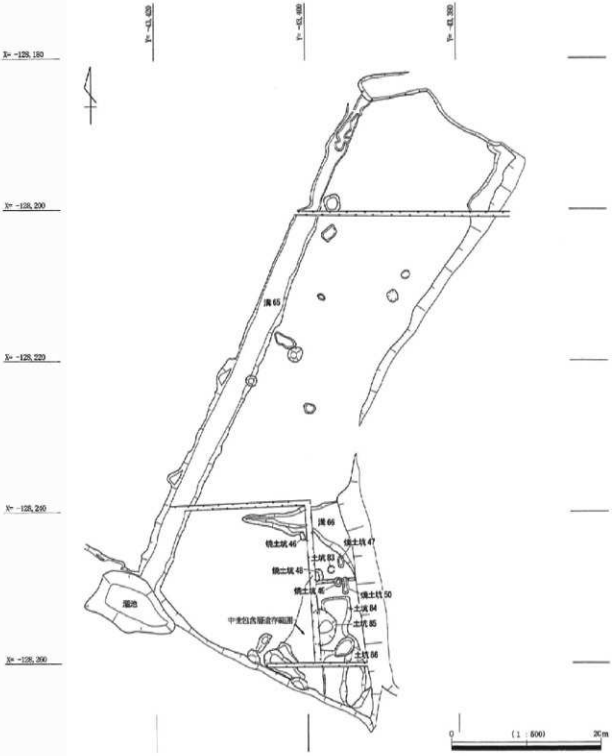
近世の層には作土層、整地層などがあるが、検出した遺構に対応する層は明らかにできなかった。火葬遺構を伴う近世包含層は、西部、北部では畑田化して以後、削平されたと思われる。



第276図　p域　平面図

中世包含層は東南部の一部にのみ遺存しており、それ以外の部分では削平されたと思われる。

また、集石5の立地する崖肩部分にのみ、近世包含層下に炭、焼土を多量に含む層が存在していた。焼土塊には、化粧土を施したもの、木舞の入ったものなど、壁片と思われるもの（図版210）が多量にみられ、周辺に土壁の建物が存在したことが想定される。ただし、この層と中世包含層との層位関係は確認できず、時期が不明である。焼土塊以外の出土遺物が少ないが、922の土師器皿はこの層から出土したもので、14～15世紀のものと思われる。この層を除去した段階で、集石5を検出した。焼土塊は崖



第277図　p域　近世遺構　分布図

肩部にまとまっており、集積5を設置した後に、まとめられたことが想定される。

近世面

主な遺構として、焼土坑5基、溝・土坑などがある。

溝65（第277・279図）

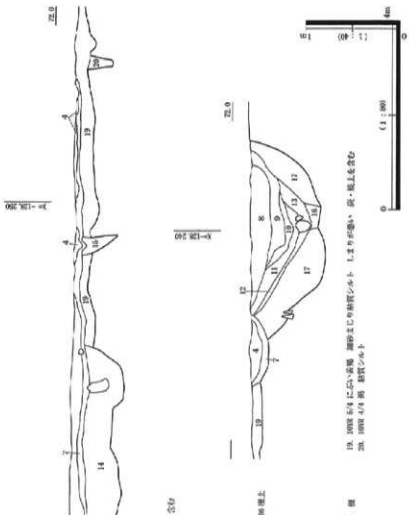
西端に位置する南北溝である。長さ約70.0m、幅約1.6m～4.0m、深さ約1.0mである。底面のレベルは南に向かって低くなっている。

遺物は、染付碗、瓦、鉄製品の他、多くの中世の遺物も出土している。883の鉄滓は、中世のものである可能性が高いと思われる。

南端にはため池と思われる大型の土坑を検出しており、関係が想定される。現況の棚田の区画にも合っていることから、棚田に伴う水路などである可能性が高い。ただし、埋土は埋め戻された状況であり、水が流れていた形跡は認められなかった。この溝が棚田に伴うものであるとすれば、棚田化以前の遺構である、焼土坑群とは時期が異なると思われる。ただし、溝以西と以東の棚田化の時期が異なるのならば、その限りではない。

溝66（第276・277・279）

東西方向の溝で、長さ約19.0m、幅約1.6m～5.0m、深さ約0.8mである。東端は虚で、西側は削平された可能性がある。底面のレベルは東に向かって低

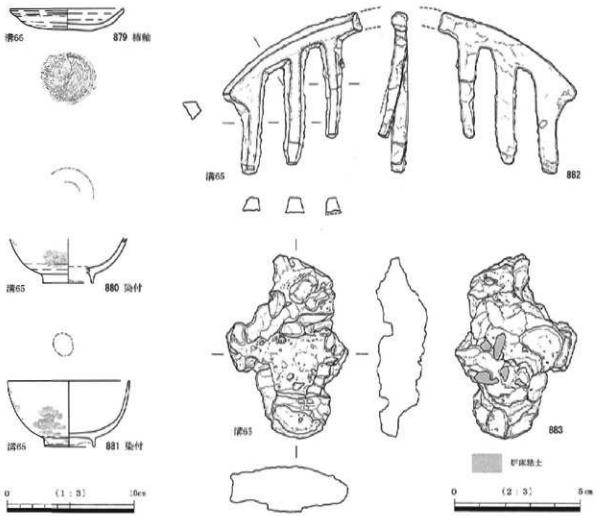

X=-128,280
X=-128,290
X=-128,300
72.0
1. 1973 5/4 にぶい黄褐　褐砂まじりシルト　1は1～5mm礫の礫を含む　石英斑
2. 1973 5/4 黒褐　粗まじり粘質シルト　2～5mm大のものに最大10cm程度までの礫を多く含む
3. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む　炭斑
4. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
5. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　1は2～5mm礫を多く含む　炭斑
6. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
7. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
8. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
9. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
10. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
11. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
12. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　炭・焼土を含む　炭斑
13. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
14. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
15. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
16. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
17. 1973 5/4 黒褐　シルトブロックを含む
18. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
19. 1973 5/4 黒褐　シルトブロックを含む
20. 1973 5/4 黒褐　シルトブロックを含む
21. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
22. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
23. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
24. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
25. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
26. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
27. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
28. 1973 5/4 にぶい黄褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
29. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
30. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
31. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
32. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
33. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む
34. 1973 5/4 黒褐　粘質シルト　にぶい黄色シルトブロックを含む

くなっている。

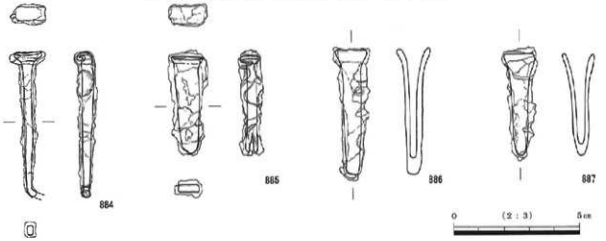
遺物は、879などが出土している。下層からは瓦質羽釜など中世の遺物が出土しており、下層が中世である可能性もある。

溝67（第276・280図）

東西方向で、長さ約28.0m、幅約4.0m～7.0m、深さ約0.4m～1.2mである。東は崖下まで伸びてお



第279図　溝65・66　出土遺物（２/３＝882・883）



第280図　溝67　出土遺物（２/３）

り、東へと底面のレベルは低くなっている。しまりの悪い細砂で埋まっており、埋め戻されたことが想定される。

遺物は、土師器鍋片、釘、椀、不明鉄製品などが出土しているが、時期を決定し得るものがない。中世の遺構である可能性もあるが、溝66と位置、方向などが類似しているため、ここに記載した。

土坑83（第277・281・282図
図版115・209）

南部に位置し、火葬遺構群に近接する。円形で、径約1.0m、深さ約0.1mである。埋土は2層で、上層は灰黄色（2.5Y 6/2）のシルトに灰を含んでいる可能性があり、下層がにぶい黄褐色（10YR 5/4）のしまりの悪いシルトである。

丹波焼鉢片が出土し、焼土坑49・50出土のものと接合した。骨片も1点出土している。

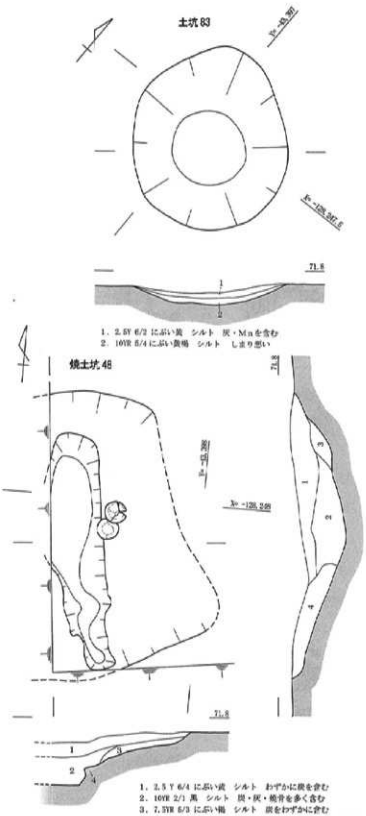
土坑84（第277図）

火葬遺構群の南に位置する。大型の土坑で、南北約7.0m、東西約3.7m、深さ約0.1mである。埋土は、灰色の砂混じりシルトで、骨片、焼土、炭を含む。

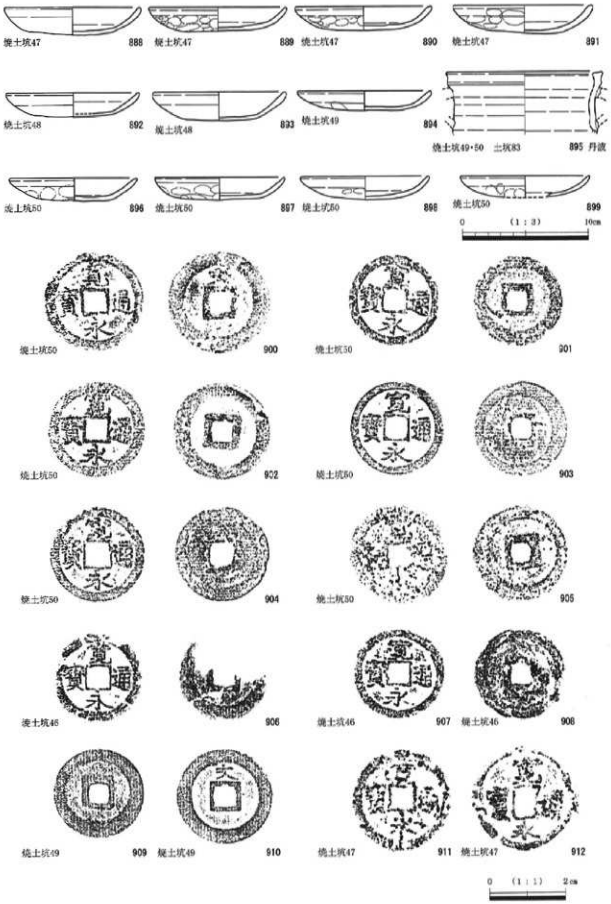
遺物は、出土していない。

土坑85（第277図）

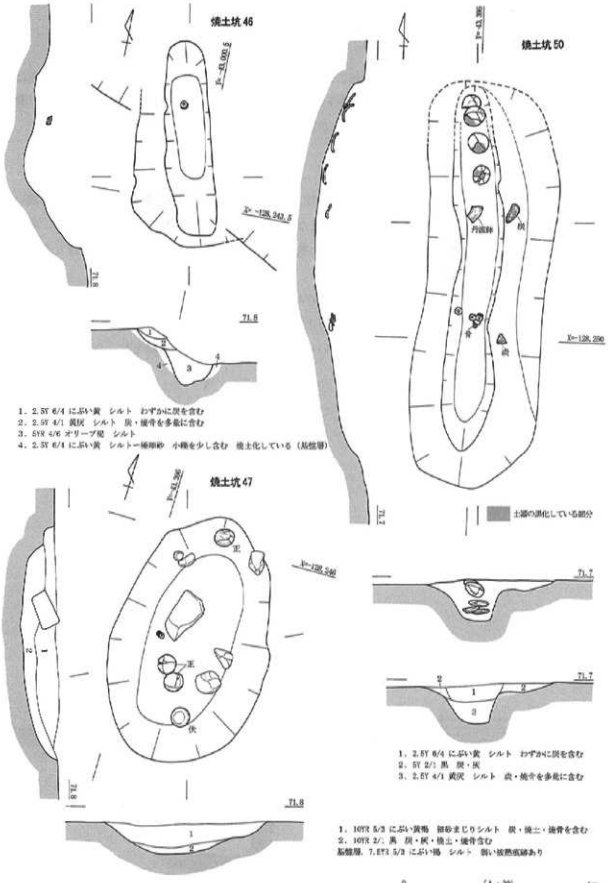
火葬遺構群の南に位置する。楕円形であると思われるが、西端が調査用筋掛りにかかり、全容は不明である。長径約4.8m、短径2.0m以上、深さ約0.1mである。埋土は、灰黄褐色（10YR 5/2）の中砂混じりシルトで、灰白色（10YR 7/1）のシルトブロック（灰か）、炭・焼



第281図　土坑83　焼土坑48　平面・断面図



第282図　土坑83　焼土坑46～50　出土遺物（1／1＝900～912）



第283図　焼土坑46・47・50　平面・断面・立面図

土をわずかに含む。

遺物は出土していない。

土坑86（第277図）

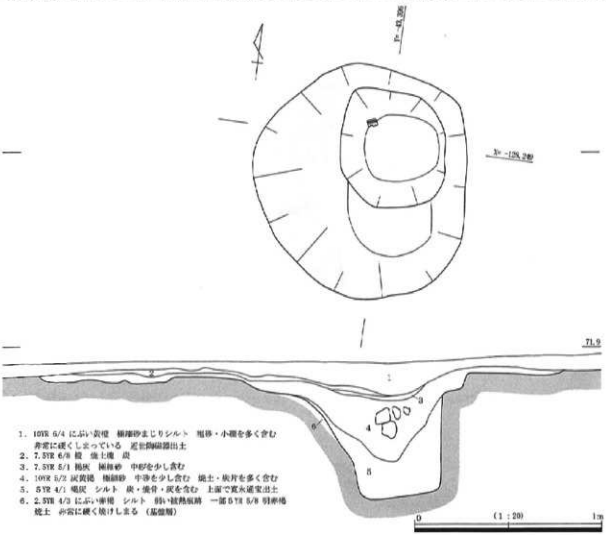
火葬遺構群の南に位置する。長径約3.1m、短径約2.0mの楕円形で、深さ約0.3mである。埋土はにぶい黄褐色（10YR5/4）の中砂混じりシルトで、灰黄褐色（10YR5/2）のシルトブロック、角礫を含む。部分的に灰黄色（2.5Y6/2）の粘土が壁部分にみられる。

遺物は出土していない。

焼土坑46（第277・282・283図　図版115）

南北に長いが、南西部以外は溝66に切られており、検出長約1.1mである。外側部は約0.1mと浅いが、内側部は約0.2mと深さが増しており、2段構造となっている。内側部の平面形は、全形同様に南北に長いが、東西両辺は直線的で、東西幅は約0.2mと狭い。断面形は、外側部は緩やかな傾斜であるが、内側部の壁の立ち上がりは急である。

壁から底面にかけて被熱痕跡がみられ、特に遺存状態のよい南西部分では壁が硬く焼けしまっており、強い被熱を受けたことを示している。内側部の埋土は炭を多量に含み、特に上部に顕著である。炭層から焼骨片が出土しており、土坑自体が被熱していることから、この土坑で火葬をおこなったと思われる。



第284図　焼土坑49　平面・断面図

炭層上または層上部から、銭貨が5枚重なった状態で出土した。銭種が確認できた2枚はどちらも寛永通寶で、いわゆる古寛永である。焼け歪み、溶融しており、火葬の際に土坑内に置かれていたと思われる。

骨片は、安部みき子氏に鑑定を依頼し、結果をⅣ　第3章に記載している。

焼土坑47（第277・282・283図　図版115・116・209）

南北に長い楕円形で、長径約1.3m、短径約0.8m、深さ約0.2mである。壁から底面にかけて部分的に被熱痕跡がみられるが、全体的に顕著ではない。埋土の下層は、多量の炭を含む。埋土から焼骨片が出土しており、土坑自体が被熱していることから、この土坑で火葬をおこなったと思われる。

完形の土師器皿4枚が南北方向に並ぶように出土したが、南端のもの以外は、正置の状態である。中央西寄りでは銭貨が6枚重なった状態で出土している。銭貨は溶着しており、表面がみえる両端の2枚は、寛永通寶、いわゆる古寛永である。六道銭であると思われる。中央北寄りには被熱した角礫がある。土師器皿、銭貨、角礫共に、炭層上に載っている。銭貨は、焼け歪み、溶融しており、火葬の際に土坑内に置かれていたと思われる。角礫も被熱していることから、火葬の際に土坑内に存在していた可能性がある。平らな面をもつ礫で、棺台に使用された可能性もある。土師器皿には被熱した形跡はなく、火葬終了後に置かれたと思われる。

骨片の鑑定結果をⅣ　第3章に記載している。

焼土坑48（第277・281・282図　図版115・116・209）

平面形は南北に長いと思われるが、西半が筋掘りにあたり、南北長約1.5mである。全容は不明である。2段構造となっており、外側部は深さ約0.1mと浅いが、内側部はさらに約0.2m深さを増している。内側部の平面形は、全形同様南北に長いが、東西両辺は直線的で、推定東西幅は0.3m前後と狭い。断面形は、外側部は緩やかな傾斜であるが、内側部の壁の立ち上がりは急である。外側、内側部共に被熱痕跡がみられ、特に内側部の壁には硬く焼けしまった部分もみられる。内側部の埋土には炭を多く含む。焼骨片が出土しており、土坑自体が被熱していることから、この土坑で火葬をおこなったと思われる。

内側部中央東肩上で、完形の土師器皿が2枚、逆さまの状態で出土した。出土状況は詳細に記録していないが、炭を多量に含む層の上に載っていたか、または層中に含まれていたと思われる。893のごく一部にはススの付着が認められるが、892にはみられない。火葬が終了した後におかれたと思われる。

骨片の鑑定結果をⅣ　第3章に記載している。

焼土坑49（第277・282・284図　図版115・117・209）

南北にやや長い楕円形で、長径約1.2m、短径約1.1mである。被熱痕跡のみられる部分は、大部分がしまりの悪い状態であるが、部分的に硬く焼けしまっている箇所もみられる。下層（5層）は炭および灰を含んでいる。それ以上を埋める層は、土坑部分だけではなく西側を中心とした周辺にも広がっている。焼骨片が出土しており、土坑自体が被熱していることから、この土坑で火葬がおこなわれたと考えられる。上層からは、鉄銭3枚が出土している。

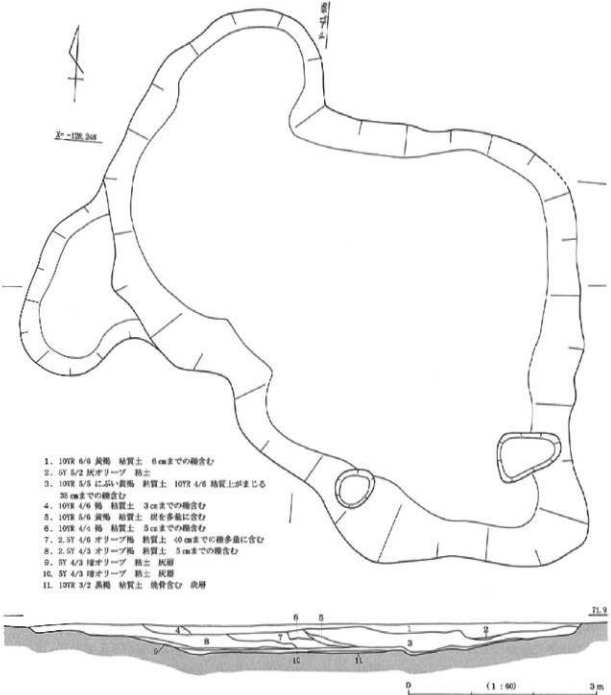
炭層の上面もしくは上部で銭貨6枚が重なった状態で出土した。六道銭であると思われる。銭貨は重なった状態で接着しており、外すことができなかった。両端の2枚は、共に背面がみえており、片方は寛永通寶の文銭であることがわかる。銭貨は焼けた痕跡がみられず、火葬後に、炭、灰などの上に重ねて置かれたと思われる。

その他に、土師器皿、丹波焼鉢の小片が出土している。土器も被熱はしておらず、火葬後におかれた

ものと思われる。丹波焼片は焼土坑50、土坑83出土のものと接合した。骨片の鑑定結果をⅣ　第３章に記載している。

焼土坑50（第277・282・283図　図版115・116・209）

長楕円形で、南北約2.2m、東西約0.7m、深さ約0.2mである。外側部は深さ約0.1mと浅いが、内側部はさらに約0.2m深さが増しており、２段構造となっている。内側部の平面形は、全形同様南北に長いが、東西両辺は直線的で、東西の幅は約0.2mと狭い。断面形は、外側部、内側部の北、南端部がゆるやかな傾斜であるが、内側部の東、西辺の壁の立ち上がりが急である。外側、内側部共に被熱痕跡がみられ、特に内側部分の壁には硬く焼けしまった箇所もみられる。埋土の下層には炭、骨片を多量に含

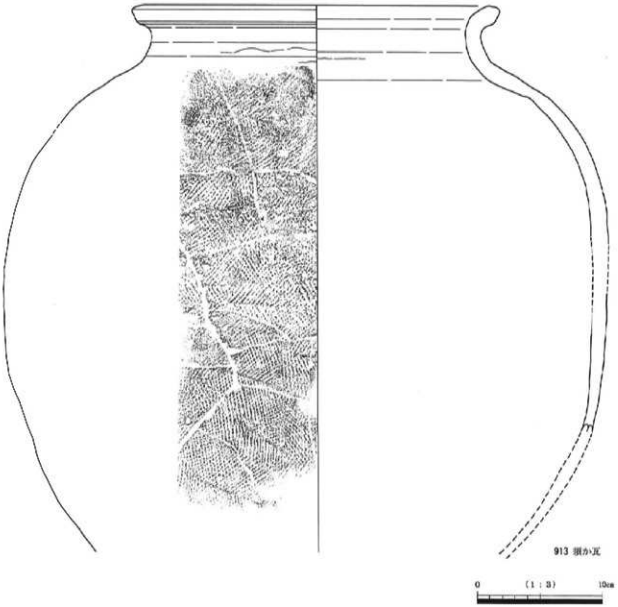


第285図　土坑89　平面・断面図

む。土坑が被熱しており、焼骨片が出土していることから、この土坑で火葬をおこなったと思われる。

内側部の北部では土師器皿が4枚、正置の状態で南北方向に並んで出土した。その南には丹波焼鉢の破片が、土坑中心部分よりやや南には寛永通寶6枚が1箇所にまとまって出土した。1枚は不明であるが、4枚が古寛永、1枚が文銭である。土師器皿、寛永通寶共に詳細な出土状況を記録していないが、炭層上に載っていたか炭層上部に含まれていたと思われる。寛永通寶は一部が歪んでおり、被熱したと思われるが、焼土坑46・47出土のものほど強い被熱痕跡は認められない。火葬の際に土坑内に置かれていたかどうかは不明である。土師器皿は、土坑底面に接する部分が黒変している。火葬の際に焼けた程度の被熱痕跡は認められないため、火葬が終わってから、まだ余熱がある時点で並べ置いた可能性が考えられる。丹波焼鉢は、土坑83、焼土坑49出土の小片と接合した。17世紀後葉のものである。

骨片の鑑定結果をⅣ　第3章に記載している。



第286図　土坑89　出土遺物

中世面

主な遺構に焼土坑5基・土坑・集石などがある。

土坑87（第288図　図版118）

崖の肩部に位置する、埋土に焼土塊、炭を比較的多く含む土坑である。径約0.7mの円形で、深さ約0.5mである。遺物は出土していない。

土坑88（第276・287図　図版210）

崖の肩部に位置する、東西約3.1m、南北約2.5m、深さ約0.1mの浅い土坑である。

瀬戸焼水注、須恵器甕などが出土した。出土時に確認できていないが、914の瀬戸焼仏花瓶もこの土坑から出土した可能性が高い。

土坑89（第276・285・286図　図版118・209）

不定形の大型の土坑で、東西長約9.0m、深さ約0.5mである。埋土に、多量の礫、炭片、焼骨片、甕片が含まれる。9・10層は灰層と想定され、11層は炭、焼骨を多く含む層である。甕は、焼成が不良で、瓦質土器か須恵器か判別し難い。14～15世紀のものと思われる。

焼骨片、1/3個体分が遺存している甕が出土していること、炭・灰層がみられることなどから、火葬との関連が想定される。ただし、土坑自体は被熱していない。

骨の鑑定結果をⅣ　第3章に記載している。

土坑90（第276・288図　図版118）

崖の肩部に位置する、炭、焼土塊を比較的多く含む土坑である。東西約1.7m、南北約1.4mの楕円形で、深さ約0.2mである。

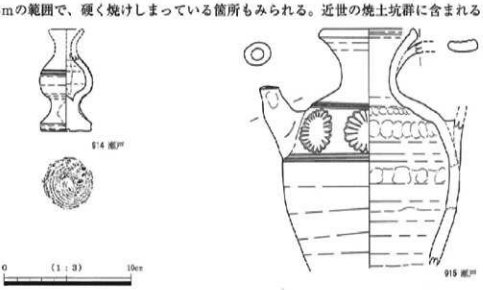
遺物は、比較的新しい様相の瓦器椀の小片が出土している。

土坑91（第288図）

崖の肩部に位置する、炭、焼土片を比較的多く含む土坑である。東西約0.9m、南北約0.7mの楕円形で、深さ約0.7mである。遺物は、出土していない。

焼土坑51（第276図）

土坑としたが削平が著しく、部分的に被熱面が遺存するのみで、輪郭は不明である。南北約0.6m、東西約0.3mの範囲で、硬く焼けしまっている箇所もみられる。近世の焼土坑群に含まれるものである



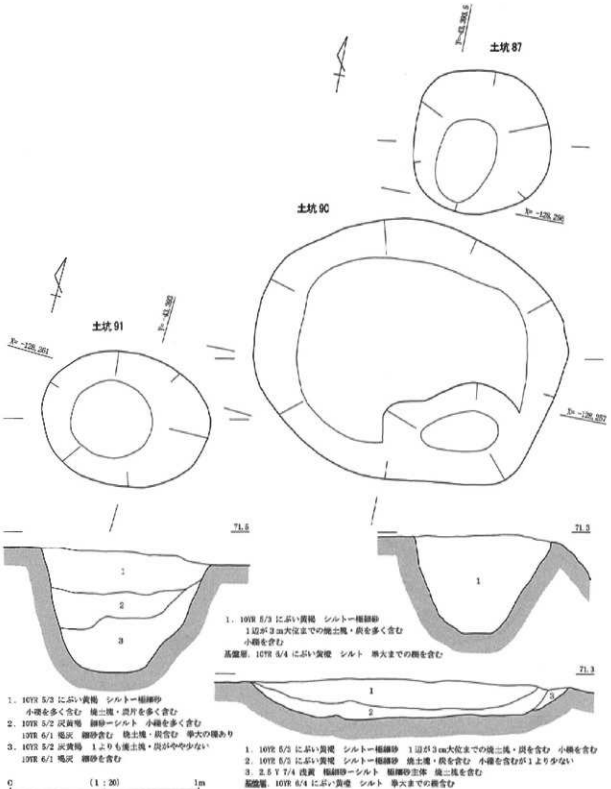
第287図　土坑88　出土遺物

可能性もあるが、位置的に中世の焼土坑群に含まれる可能性が高いと判断した。

遺物は出土していない。

焼土坑52（第276・289図　図版118）

長方形で、南北約1.3m、東西約0.9m、深さ約0.3mである。壁は被熱して非常に硬く焼けしまって



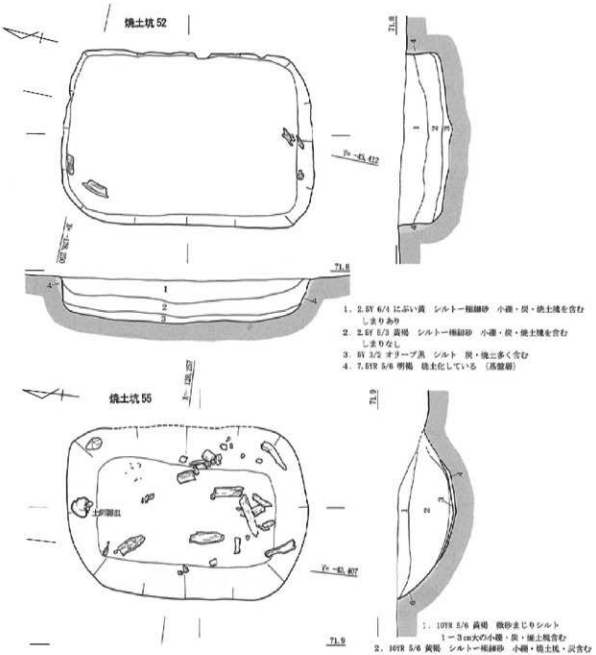
第288図　土坑87・90・91　平面・断面図

いる。特に上部が顕著で、下部は上部ほどの被熱痕跡がみられない。埋土の最下層には炭を比較的多く含む。焼土片も多くみられる。骨片は出土していないが、類似する焼土坑55から焼骨が出土しており、火葬をおこなった遺構である可能性が考えられる。

遺物は、瓦器椀の退化した高台片が出土している。

焼土坑53（第276・291図　図版118）

長方形で、南北約1.4m、東西約1.0m、深さ約0.3mである。壁の上半部が被熱して硬く焼けしまっ



第289図　焼土坑52・55　平面・断面図

ている。底面には淡く赤色化している部分がみられる。下層ほど炭を多く含むが、炭層といえるものではない。焼土坑54を切っている。骨片は出土していないが、類似する焼土坑55から焼骨が出土しており、火葬をおこなった遺構である可能性が考えられる。

遺物は、格子状タタキの須恵器甕の小片が出土している。

焼土坑54（第276・291図　図版118）

北側が焼土坑53に切られており、全形は不明である。隅丸方形か不定円形の可能性がある。遺存部分の東西長は約0.8mで、深さが約0.5mである。遺存部分東半の壁上部が非常によく焼けしまっている。埋土には炭層がみられる。

遺物は、11～12世紀と思われる土師器、瓦器の細片が出土したが、周辺の類似遺構の出土遺物から、これらは土坑の時期を示すものではない可能性が高い。

焼土坑55（第276・289・290図　図版118）

長方形で、南北約1.3m、東西約0.9m、深さ約0.3mである。東部は攪乱を受けている。壁が被熱して焼けしまってはいるが、焼土坑52・53と比較するとやや弱い。埋土の下層には炭を比較的多く含むが、炭層といえるものではない。この層上、または層上部を中心に長さ20cm程度までの炭片がみられる。焼骨片が出土しており、この土坑で火葬がおこなわれたと思われる。ただし、骨片の量はきわめて少量である。

916の土師器皿が出土した。土坑北辺の壁際に位置し、底面には接していない。また、南東隅の壁に接して、鉄製品が出土した。他に、格子状タタキの瓦質または須恵器と思われる甕片もみられる。14世紀～15世紀前葉のものと思われる。

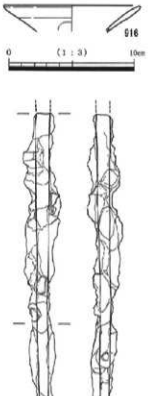
残存脂肪酸分析の結果をⅣ　第2章に、骨片の鑑定結果を同第3章に記載している。

集石5（第276・292・293図　図版118・211）

崖の肩部分に沿って、礫を集積している。南北長約8.7mである。角礫を単層に敷いた状態である。北半部の礫間には石鍋と瓦質土器火鉢の破片が含まれていた。

遺物は、石鍋、瓦質火鉢のほか、須恵器または陶器甕の小片が出土した。石鍋は大、小2個体が復元できた。火鉢片は多くの破片が出土しており、同一個体のものと思われるが、あまり接合はしない。火鉢は14世紀、石鍋は12～13世紀のものと思われる。

この箇所にのみ、近世層下に炭、焼土を多量に含む層が存在しており、その下で検出した。焼土には土壁の破片と思われるものが多くみられ、位置的に集積との関係が想定されるが、詳細は不明である。この層から出土した922の土師器皿は、14世紀後葉～15世紀前葉と思われるものである。



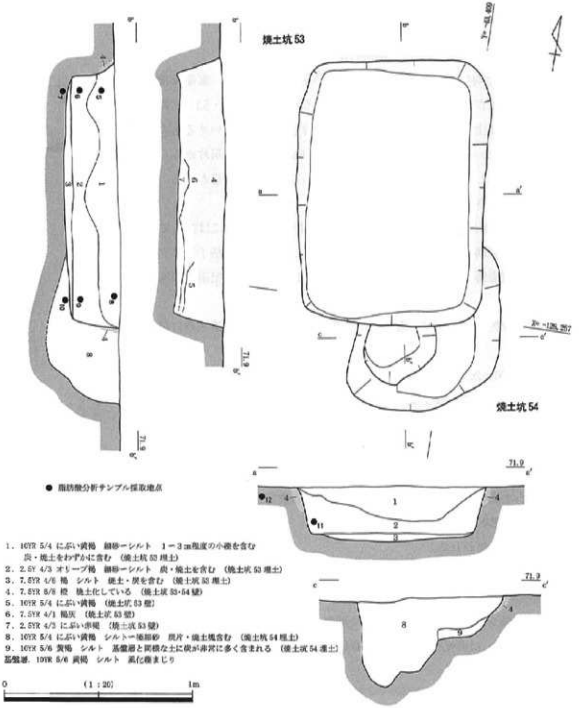
第290図　焼土坑55
出土遺物
(2/3＝917)

小結

近世面では、5基の焼土坑を検出した。焼骨の出土、土坑の被熱痕跡から、

火葬をおこなった遺構であると思われる。ただし、火葬をおこなっただけであるのか、墓としての機能も有するのかは不明である。平面形は、すべて南北方向に長く、長径1.3m前後の楕円形または隅丸方形のものがほとんどであるが、焼土坑50のみ長さ約2.2mの細長い形状を呈する。焼土坑46・48・50は、外側が浅く内側が深い、2段構造である。内側の平面形は、外形同様南北方向に長いが、南北両辺が直線的で、東西の幅が狭い。断面形は、外側部分は緩やかな傾斜であるが、内側部分の壁の立ち上がりは急である。特に内側の壁に被熱痕跡が顕著で、硬く焼け締まっている。焼土坑47と49は、皿状であるが、49は北部分が深くなっている。

寛永通寶が出土したのは、焼土坑46・49・50で、それぞれ5枚、6枚、6枚である。焼け歪んでいる



第291図　焼土坑53・54　平面・断面・立面図

もの、被熱の痕跡が認められないものがみられる。焼け歪んでいるもののなかには溶融しているものもみられ、それらは火葬の際に土坑内に置かれていた可能性がある。

土師器皿が出土したのは、焼土坑47～50で、焼土坑47と50からはそれぞれ4枚が出土した。被熱痕跡のないものがほとんどであり、火葬が終わってから置かれたと思われる。ただ、焼土坑50出土のものに土坑と接する部分が黒色化しているものがあり、まだ余熱のある時点で土坑内に置かれたことが想定される。

東西に隣接している焼土坑49・50は、出土した丹波焼片が接合し、同時または近い時期のものである可能性が考えられる。丹波焼の時期は17世紀後葉である。2基から出土した銭貨のうち、確認できたものはすべて寛永通寶で、いわゆる古寛永、文銭である。不明のものが多く断定はできないが、文銭以外の新寛永がみられないため、遺構の時期は1697年以前である可能性がある。焼土坑46・47から出土した寛永通寶も、確認できるものが少ないものの、すべて古寛永である。

周辺の状況から、火葬遺構が5基以外にも存在した可能性は否定できない。しかし、検出したものに切り合いがなく、また、全体的に17世紀後葉前後の時期が想定されることから、長期にわたって営まれていたとは思われない。

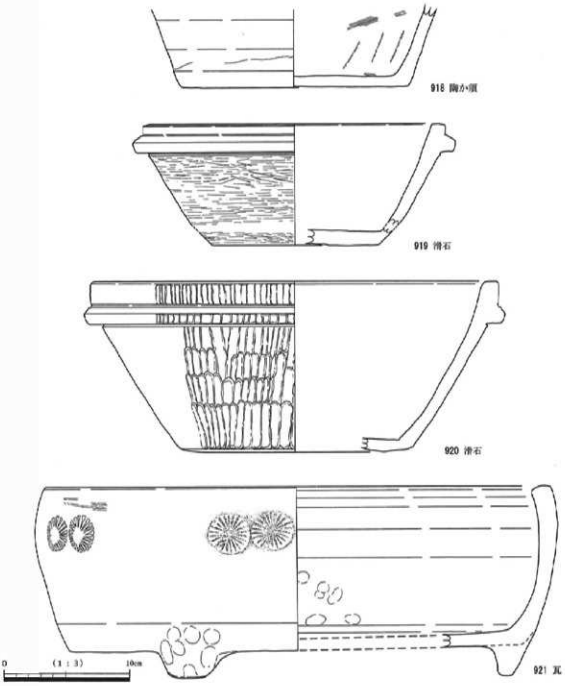
丘陵上では、近世の遺構として、これら以外に水田関連のものしか存在しない。火葬遺構は丘陵端の崖際に立地している。東に流れる川合裏川を見下ろし、北東方向に徳大寺を望む立地である。徳大寺は1698年に黄檗宗として再興された寺である。また、現在、南東の段丘崖下には川合の集落がある。住民によると、昔はp域の東、段丘崖下のs域部分にも民家が存在していたらしい。17世紀の集落の様子は不明であるが、現在に近い立地であったとすれば、火葬遺構群は、集落の裏手の崖上に立地していたことになる。p域は、18世紀以降、現代までには、棚田化する。

中世面でも焼土坑を数基検出した。焼土坑55からは焼骨が出土しており、火葬がおこなわれたと思われる。南北方向に長い長方形で、壁に被熱痕跡がみられる。土師器皿、鉄製品が出土している。火葬をおこなったのみであるのか、墓としての機能も有するのかは、不明である。焼土坑52～54も同様な遺構であり、火葬遺構であることが想定されるが、骨、遺物は出土していない。大型の土坑89にも焼骨片、大甕片、炭などが埋

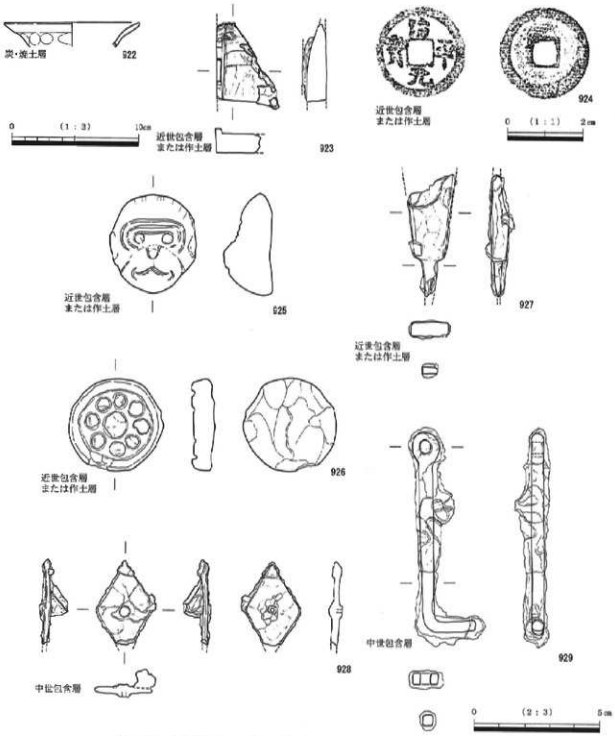
第292図　集石5　平面図

土に含まれている。被熱はしていないが、火葬と関連する遺構である可能性がある。焼土坑55出土土師器皿、土坑89出土甕共に14～15世紀のものである。

その他、特筆すべきものとして、土坑88から瀬戸焼水注、仏花瓶が出土している。また、詳細な時期は不明であるが、盛屑部分から多量の土塁片が出土したことも特徴的である。近世の層からは、鉄銭も出土している。



第293図　集石5　出土遺物



第294図　包含層等　出土遺物（2／3＝925～929　1／1＝924）